

2020（令和2）年度 人間発達環境学研究科
年 次 報 告 書

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

はじめに

本学報告書は、人間発達環境学研究科における令和2(2020)年度の教育・研究・社会貢献等の活動の記録や取り組み内容が記載されたものであり、研究科の強み・特色を示した集積となっている。

令和2年度は、前年度から始まっていた新型コロナウイルスの感染拡大が深刻化し、4月7日に最初の緊急事態宣言が発出される事態となり、神戸大学でも学生の自宅待機・教職員の在宅勤務を要請する緊急メッセージが出された。これまで経験の無い状況が続く中で、前期の授業開始を5月7日まで遅らせた上で授業等をリモートにて実施する準備を整えるという対応を行った。

教育・研究をはじめとする大学の活動が大きく制限される中で、学生らがこうむる不利益を最小限に抑えるため、試行錯誤を重ねながら大学としての機能を維持する努力を続ける1年間となった。今後は「with コロナ」とか「ニューノーマル」と言われる変容が求められることが予想されるが、この1年間の記録は特別な意味を持つことになると思われる。

その一方で、これまで本研究科が取り組んできた多様な活動を継続・発展させることもおろそかにはできず、研究科として解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題、すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、教員らが専攻をこえて協働できるための枠組みづくりの必要性、ならびに多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金獲得の必要性、及び優秀な学生の積極的獲得の必要性などの観点からの取り組み・検討を進めた。

また学域制（教員組織と教育研究組織の分離）や教員人事のポイント制のもとで、教員の新規採用および昇任について人事計画を進め、教育研究組織の活性化による機能強化につとめた。

こうした中で令和2年度に法人評価を受け、さらに令和3年度には認証評価を受けることになっている。第4期中期目標・中期計画期間に向けて神戸大学全体としての機能強化が進んでいく状況のなかでも、本研究科がこれまで唱えてきた「人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉える」という教育研究のアイデンティティは守っていくべきと考える。そのためには、着実に教育・研究・社会貢献に係る実績を重ね、学内外での研究科のプレゼンスをいっそう高めて行くことが重要と考える。

(人間発達環境学研究科長 青木茂樹)

2020(令和 2)年度
人間発達環境学研究科 年次報告書 目次

はじめに

目次

1. 令和 2 年度の取り組みの概要	1
1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み	1
1.1.1. 神戸大学機能強化改革	1
1.2. 部局としての取り組み	1
1.2.1. 戦略「社会課題を解決する文理融合研究の推進」	1
1.2.2. 講座の大きくくり化	2
2. 学部・大学院運営	3
2.1. 学部・大学院運営組織	3
2.2. 管理運営	4
2.2.1. 学域人事委員会	4
2.2.2. 研究科運営委員会	6
2.2.3. 教員活動評価委員会	7
2.2.4. 中期計画推進委員会	8
2.2.5. 自己評価委員会	8
2.2.6. 安全衛生委員会	9
2.3. 予算	10
2.3.1. 予算に関する特記事項	10
2.3.2. 予算関係の審議等の状況	11
2.3.3. 外部資金獲得状況(教員及び学生)	11
2.4. 広報及び情報公開	12
2.4.1. パンフレット, ウェブサイト等	12
2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ	12
2.4.3. ホームカミングデイ	13
2.5. 環境設備	13
2.5.1. 教育・学習環境の整備	13
2.5.2. 交流ルーム・アゴラ	14
2.6. 教員研修	15
2.6.1. FD	15
2.6.2. 初任者研修	15
3. 入試	15
3.1. 一般選抜入試	15
3.1.1. 入学試験委員会	15
3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題	17

4. 国際交流活動	17
4.1. 学術交流協定	18
4.2. 留学生	18
4.3. ダブルディグリー	20
4.4. Innovative Asia	20
4.5. 学生・教員・職員の海外派遣	20
4.6. 海外研究者等の招聘・訪問	21
4.7. 「英語による授業の実践—ESD 研究」	21
5. 教育	22
5.1. 教育課程	22
5.1.1. 今年度の特徴	22
5.1.2. 研究科, 専攻共通科目	22
5.1.3. 教職教育	24
5.1.4. 博物館学芸員資格	24
5.1.5. ESD サブコース	25
5.1.6. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント	26
5.2. 各専攻講座の教育	27
5.2.1. 人間発達専攻	27
5.2.2. 人間環境学専攻	38
6. 進路	40
6.1. キャリア形成支援	40
6.1.1. キャリアサポートセンター	40
6.1.2. 学振特別研究員申請支援	42
6.2. 卒業・修了後の進路	43
7. 研究	43
7.1. 今年度の特長	43
7.1.1. 研究動向	43
7.1.2. 学生の受賞	44
7.2. 学術 Weeks	45
7.2.1 学術 Weeks の各事業・セミナー	45
7.3. 研究科支援プロジェクト研究	48
7.4. 高度教員養成プログラム	51
7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続共同研究	55
7.6. 研究推進	55
7.6.1. 研究推進委員会	55
7.6.2. 研究倫理審査委員会	56
7.6.3. 研究紀要編集委員会	56
7.7. 各専攻の研究	57

7.7.1. 人間発達専攻	57
7.7.2. 人間環境学専攻	100
8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動	122
8.1. 産官学共同プロジェクト	122
8.2. 地域連携プロジェクト	127
9. 社会的活動・震災復興支援	131
9.1. メンタルケア関係	131
9.2. 災害地への支援活動	132
10. 附属施設	133
10.1. 発達支援インスティテュート	133
10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会	133
10.1.2. 心理教育相談室	134
10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター	136
10.1.4. のびやかスペースあーち	145
10.1.5. サイエンスショップ	154
10.1.6. 教育連携推進室	159
10.1.7. アクティブエイジング研究センター	164
10.2. 実習観察園の運営利用状況	169

1. 令和2年度の取り組みの概要

1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み

1.1.1. 神戸大学機能強化改革

(1) 神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略

平成28年度から第3期中期目標・中期計画期間が始まった。神戸大学は、第3期中期目標・中期計画期間（H28年度～H33年度）における神戸大学の機能強化改革として、平成27年4月に神戸大学ビジョンとして、先端研究・文理融合研究で輝く卓越研究大学をかかげ、平成27年6月に文部科学省「国立大学経営力戦略」の3つの重点支援の枠組みの重点支援③「海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究，社会実装を推進する取組を中核とする国立大学」を選択した。

第3期中期目標・中期計画期間におけるビジョンの実現に向けて、以下の5つの戦略が実施されている。

- ・戦略1：先端研究の推進
- ・戦略2：社会課題を解決する文理融合研究の推進
- ・戦略3：先導的研究成果の社会実装への取組み
- ・戦略4：世界で活躍できる人材の育成
- ・戦略5：大学運営基盤の改革

なお、国際人間科学部の設置は戦略4「世界で活躍できる人材の育成」に位置づくものである。

(2) 神戸大学ビジョンを支える新たな教員組織・人事システム

平成28年5月19日開催の教育研究評議会において「神戸大学ビジョンを支える新たな教育組織・人事システム（案）」が承認された。この教員組織・人事システムは、教員の流動性の向上，組織間の教員配置の最適化，柔軟な改組の実現，教員数及び若手ポストの増加をねらいとし，教員の教育研究組織からの分離，ポイント制の導入及び学長裁量戦略枠の設定などを柱としたものである。

平成28年10月から教員組織と教育研究組織の分離が実施され，当研究科教員の全員が人間発達学域の所属となった。また，同時に教員人事委員会が設置され，教授人事の審査，及び採用・昇任人事に伴うポイントの管理が行われることになった。そして，平成29年4月にポイント制が正式導入され，現在に至っている。

1.2. 部局としての取り組み

1.2.1. 戦略「社会課題を解決する文理融合研究の推進」

神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略「社会課題を解決する文理融合研究の推進」の取り

組みの一つに、「文理医融合の先端研究による未来世紀都市学の構築」があげられる。

平成30年度から、この取り組みを拡充するために、『well-being研究拠点』が新たに設置された。この拠点は、未来世紀都市を支える多様な人々のwell-being（人々の安全・安心の確保と豊かで質の高い生活）を実現するために、多様化するアジア諸国の保健衛生課題の解決を目指す「アジア健康科学研究ユニット」、及び都市における人々の社会的連携や協調を実現させるプログラムの構築を目指す「社会関係資本研究ユニット」から構成される。

本研究科は「社会関係資本研究ユニット」として役割を果たすことになった。このユニットは、都市における人々の社会的連携（結束力、絆）やネットワーク等の社会関係資本を重視した持続可能なコミュニティ形成及び環境形成プログラムを考究し、社会実装を目指すものである。

令和2年度の「社会関係資本研究ユニット」の活動実績としては、WoS論文6編、競争的資金として科研費獲得4件は確保できたが、新型コロナウイルスの影響により令和元年度まで地域の高齢者を迎えて継続的に開催していた対面での講習会は開催できず、研究者によるオンラインでのシンポジウムの開催のみとなった。

1.2.2. 講座の大きくくり化

人間発達環境学研究科は、心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻、及び人間環境学専攻の5専攻から成る研究科として平成19年4月に設置された。その後、平成25年4月に、人間それ自体の発達を対象に教育研究を担ってきた心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻の4専攻をまとめ人間発達専攻とし、人間発達専攻と人間環境学専攻の2専攻体制で教育・研究を行っている。

平成26年4月に文部科学省が公表した本研究科のミッションの再定義には、「今後、人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉えるため、異なる専門分野間の連携等の取り組みについて重点的に取り組むなど、総合的な研究を組織的に推進するとともに、我が国の社会課題解決・文化の発展に貢献することを目指す。」と記されている。

これまで、本研究科はこのミッションの実現に向け、人間の発達及びそれを支える環境に関わる新たな研究課題の設定、ならびに分野横断型研究の支援等の取り組みを行っている。

平成29年および令和2年度には外部評価を受けた。その結果、学際系の研究科として、教育・研究・社会的活動の成果を着実に蓄積していること、またそれらの活動は発展・深化を続けており、地域の課題に対して、その住民と連携する形で、研究と教育と社会活動を一体のものとして展開していること、及び高齢化、貧困、環境、共生社会などといったグローバルな課題に関する国際共同研究の推進やそれらの研究に学生を参画させる多様な取り組みが実施されていることなどが高く評価された。その一方で、本研究科が取り組んでいる多様な活動を将来にわたって継続・発展させていくために解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題も指摘された。すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、より多くの教員が専攻を越えて協働できるための枠組みづくりの必要性、多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金の

獲得の必要性などである。

人間発達環境学研究科では、国際人間科学部の最初の卒業生が入学してくるのを機に、人間発達専攻内の4つの系講座（こころ系、表現系、からだ系、教育系）および人間環境学専攻の2つの講座（環境基礎講座、環境形成講座）をそれぞれ1講座にまとめ、各専攻を1講座で編成し、それまでの講座を教育研究分野に移行する組織再編を行った。この組織再編により研究・教育活動における連携と柔軟性が大きく強化されることが期待される。

（人間発達環境学研究科長 青木茂樹）

2. 学部・大学院運営

2.1. 学部・大学院運営組織

神戸大学大学院人間発達環境学研究科及び発達科学部は、以下の組織で運営している。

<教授会等>

人間発達環境学域会議、神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授会、神戸大学発達科学部教授会

以下に委員会等の組織を列記する。その際、大学院に関係する組織については、その前に付される研究科名「神戸大学大学院人間発達環境学研究科」を省略し、学部に関係する組織については、「発達科学部」とした。

<管理運営>

学域人事委員会、教員活動評価委員会、研究科運営委員会、予算委員会、学舎検討委員会、中期計画推進委員会、自己評価委員会、交流ルーム運営委員会、安全衛生委員会、ハラスメント防止委員会、専攻運営会議

<研究>

研究推進委員会、研究紀要編集委員会、研究倫理審査委員会

<教務・学生>

教務委員会、学生委員会、博物館学芸員資格専門委員会

<入試>

入学試験委員会、学生委員会（編入学入学者の募集及び選考に関わる事務）、オープンらぼワーキンググループ

<国際交流>

国際交流委員会、学術 WEEKS ワーキンググループ

<広報>

情報メディア委員会、研究科案内作成ワーキンググループ

<附属施設等>

図書委員会、実習観察園運営委員会、キャリアサポートセンター運営委員会、発達支援イン

ステイテュート運営委員会，心理教育相談室運営委員会，ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会，のびやかスペースあーち運営委員会，サイエンスショップ運営委員会，教育連携推進室運営委員会，アクティブエイジング研究センター運営委員会

(人間発達環境学研究科長 青木茂樹)

2.2. 管理運営

2.2.1. 学域人事委員会

学域人事委員会は，教員の採用及び昇任等，ポイントの管理・運用及び教育研究組織への配置に関して，学域会議に発議する原案を審議する委員会である。学域人事委員会の構成は，学域長，副学域長，人間発達環境学研究科専攻長，発達科学部学科長，及び国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）であり，令和2年度の委員は青木茂樹学域長（委員長），平山洋介副学域長，近藤徳彦副学域長，稲垣成哲人間発達専攻長・発達科学部人間形成学科長，近江戸伸子人間環境学専攻・発達科学部人間環境学科長，河辺章子発達科学部人間行動学科長，梅宮弘光発達科学部表現学科長，並びに吉田圭吾国際人間科学部発達コミュニティ学科長，木下孝司国際人間科学部子ども教育学科長，浅野慎一国際人間科学部環境共生学科長の10名である。また，中野下勉事務課長，藤村さとみ総務係長も出席した。

学域人事委員会の開催日及び検討事項については，以下に記す。

	検討事項
第1回（4月3日）	1. 2020年度人事方針について 2. GSPオフィス教員の任期更新について
第2回（5月1日）	1. 今後の助教採用人事について
第3回（6月5日）	1. 助教採用人事について（人事選考委員会報告）
第4回（7月3日）	1. 助教採用人事に係る人事選考委員会の設置について 2. 今後の助教採用人事について
臨時（7月17日）	1. GSPオフィス教員の任期更新について 2. GSPオフィス教員の採用について
臨時（9月4日）	1. 助教採用人事に係る人事選考委員会の設置について
第5回（9月11日）	1. 新規採用教員の国際人間科学部における配置講座等について 2. 今後の助教採用人事について 3. 今後の人事の進め方について
第6回（10月16日）	1. 教員の早期退職について 2. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について 3. 今後の助教採用人事について 4. 今後の人事の進め方について
第7回（11月6日）	1. 令和3年4月1日付け人間発達環境学域教員人事配置案について

	<ol style="list-style-type: none"> 2. 助教採用人事の公募について 3. 今後の人事の進め方について 4. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について
第8回（12月4日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 助教採用人事について（人事選考委員会報告） 2. 助教採用人事の公募について 3. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について 4. 教授昇任候補者について
第9回（1月8日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 助教採用人事について（人事選考委員会報告） 2. 助教採用人事の公募について 3. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について 4. 新規採用教員の配置教育研究分野等について 5. 教授昇任人事に係る学域教員人事方針申請書について 6. 教授昇任候補者について
第10回（2月5日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 助教採用人事について（人事選考委員会報告） 2. 助教採用人事に係る人事選考委員会の設置について 3. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について 4. 新規採用教員の配置教育研究分野等について 5. 教授昇任人事に係る学域教員人事方針申請書について
第11回（3月3日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について 2. 助教採用人事に係る人事選考委員会の設置について 3. 助教採用人事について（人事選考委員会報告） 4. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について 5. 新規採用教員の配置教育研究分野等について 6. 神戸大学人間発達環境学域人事選考委員会規則の一部改正について 7. 神戸大学人間発達環境学域テニユアトラック制に関する規程の作成について 8. 国際連携推進機構E U総合学術センターからの教員の配置依頼（令和3年4月1日～令和5年3月31日）について
臨時（3月17日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 助教採用人事の公募について 2. 神戸大学人間発達環境学域テニユアトラック制に関する規程の作成について 3. 神戸大学人間発達環境学域人事選考委員会規則の一部改正について

（人事委員会委員長 青木茂樹）

2.2.2. 研究科運営委員会

研究科運営委員会は、研究科長，副研究科長，専攻長（2名，ただし2名は学科長を兼ねる），発達科学部学科長（3名）に，研究科運営委員会規則 第2条（5）その他委員会が必要と認めた者として，国際人間科学部における発達コミュニティ学科長の吉田圭吾教授，子ども教育学科長の木下孝司教授及び環境共生学科長の浅野慎一教授に加えた10名体制で，研究科等の管理を円滑に行うために組織及び運営に関し包括的な事項を扱ってきた。検討事項は，以下のとおりである。

	検討事項
第1回（4月3日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 予備審査委員会委員候補者について 2. 新型コロナウイルス対策 3. 社外取締役の依頼に関して
第2回（5月1日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 新型コロナウイルス対策（情報共有） 2. 新型コロナウイルス対策（要検討事項）
第3回（6月5日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学位論文の審査（内見委員会の設置）の依頼について 2. 新型コロナウイルス対策（情報共有） 3. 「入学者選抜への対応について」 4. 共通教育支援経費 5. 奨学寄附金について
第4回（7月3日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 令和2年9月修了予定者に係る博士學位論文審査委員候補者（案）について 2. 博士課程を経ない者の学位論文審査に係る内見結果および博士論文審査委員候補者（案）について 3. 7/17の学域会議・研究科教授会の開催方法 4. 新型コロナウイルス対策（情報共有） 5. 令和2年度教員サバティカル制度適用教員について 6. 奨学寄附金について
第5回（9月11日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 新型コロナウイルス関連 2. 新年度の発達科学部学科長，自己評価委員会の選挙について 3. 部局長会議(9/10)報告 4. 2022年度予算の見通し 5. 奨学寄附金について
第6回（10月16日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 予備審査委員会委員候補者（案）について 2. 新型コロナウイルス関連（10/1以降への対応） 3. 部局長会議(10/08)報告 4. 奨学寄附金について

第7回 (11月6日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 令和3年度外国人研究員招へい候補者の推薦について 2. 新型コロナウイルス関連 3. 部局年次計画等に関するヒアリング(11/18) 4. 奨学寄附金について
第8回 (12月4日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学位論文の審査(内見委員会の設置)の依頼について 2. 新型コロナウイルス関連 3. 国際人間科学部学科長の選挙について(ご相談) 4. 採用人事案件がある場合の審議の進め方 5. 研究科諸規則の改正(委員会の編成) 6. 部局年次計画に関するヒアリング(11/18) 7. 国際人間科学部と両研究科長の打合せ(11/26)
第9回 (1月8日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 令和2年度3月修了予定者に係る博士学位論文審査委員候補者(案)について 2. 博士課程を経ない者の学位論文審査に係る内見結果および博士論文審査委員候補者(案)について 3. 令和3年度研修員の受入れについて 4. 新型コロナウイルス関連
第10回 (2月5日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 新型コロナウイルス関連 2. 来年度の発達科学部学科長 他 3. 年次報告書の発達科学部関係 (国際人間科学部の年次報告書は別に作成)
第11回 (3月3日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 外国人研究員の選考について 2. 招聘外国人研究者の受入れについて 3. 新型コロナウイルス関連 4. 来年度の発達科学部学科長 他
臨時 (3月17日)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 新型コロナウイルス関連 2. 国際人間科学部と両研究科長との打合せ(3/16)

(研究科運営委員会委員長 青木茂樹)

2.2.3. 教員活動評価委員会

神戸大学教員活動評価が実施されて7年目となる。昨年度と同様、教員活動評価委員会内規第3条に基づき、研究科長、副研究科長、専攻長に、その他研究科長が必要と認めた者として発達科学部学科長及び国際人間科学部学科長(グローバル文化学科長を除く)を加えた10名体制で臨んだ。

また、昨年度合意した評価の方法や基準等を基本的に踏襲しつつ、その都度問題がないか慎重に判断しながら、手続きを進めた。「教員活動評価結果通知書」配布後、「意見の申出」

はなかった。

教員活動評価委員会は、4月3日、6月5日、7月3日、7月31日、10月16日、3月3日及び3月17日に開催した。年度の前半には2019年度の教員活動評価を進め、年度の後半では新年俸制の導入やエフォート率の申告に伴う対応についての検討を行った。3月中の委員会は育休から復帰した教員から提出された活動報告書の評価のための開催である。

(教員活動評価委員会委員長 青木茂樹)

2.2.4. 中期計画推進委員会

令和2年度は、研究科長(委員長・青木茂樹)、副研究科長(平山洋介、近藤徳彦)、研究推進委員会委員長(青木茂樹)、教務委員会委員長(野中哲士)、学生委員会委員長(佐藤春実)、国際交流委員会委員長(佐藤真行)、入学試験委員会委員長(平山洋介)、キャリアサポートセンター長(澤宗則)、情報メディア委員会委員長(宮田任寿)、自己評価委員会委員長(大串健一)、事務課長(中野下勉)の構成員に加え、総務係長(藤村さとみ)が出席し、月1回の定例会議を開催した(計11回)。

「中期目標の遂行、見直しに関する事項」を所掌する本委員会では、毎回、研究科長から部局年次計画に関わる全体的な状況が説明された。その後、各委員会等からそれぞれの活動内容が報告され、年次計画の進捗状況を確認し合うとともに、各委員会における計画実施の促進、ならびに委員会相互の情報の共有と連携可能性について検討した。

また、「第二期中期目標・中期計画管理表」における令和2年度実績について各委員会に対し回答を求め、それらを踏まえたうえで本研究科の年次計画管理表の再確認を行った。

(中期計画推進委員会委員長 青木茂樹)

2.2.5. 自己評価委員会

本年度は、研究科長(青木茂樹)、副研究科長(平山洋介、近藤徳彦)、委員長(大串健一)、副委員長(田畑暁生)、委員(高田義弘、福田博也、山下晃一、赤木和重)、事務課長(中野下勉)の10名の構成員ならびに総務係長(藤村さとみ)が出席した。6回の委員会の開催、1回のメール会議の実施によって、以下の事項について取り組んだ。

(1) ファカルティ・ディベロップメント

・授業のピアレビュー

大学院の授業を対象にピアレビューを実施している。各専攻から選定された授業の参観および授業担当者と参観者との意見交換が行われ、2科目の授業を対象に延べ10名の教員が参加した。両授業ともに新型コロナウイルス感染拡大防止のため対面授業から遠隔授業へと授業形式を大幅に変更して実施した。BEEFやZoomを利用することによる双方向コミュニケーションの実現等の授業において優れた点・工夫がみられた点、次年度の授業改善に向けて強化できる点がピアレビューレポートとして報告された。

・ファカルティ・ディベロップメント講演会

大学教員としての能力開発を目的として、4回のファカルティ・ディベロップメントを実施した（資料集参照）。参加者の延べ人数は、321名（教員302・職員等19）であった。今年度のテーマは、Zoomを利用した遠隔授業の実施方法、遠隔授業と関連課題などであった。

(2) Voice Box（「学生の声」投稿箱）への対応

本年度2件の投稿があり、委員会での検討後、関係部署への付託によって対応した。

(3) 各種アンケートの実施と検討

学部、研究科前期課程について、学修の記録、入学・進学時アンケート、授業振り返りアンケート、卒業・修了時アンケートを内容修正のうえ実施するとともに、結果の分析を行った。

(4) 令和2年度学生・教職員による教育懇談会

研究科から2名の学生および本委員会委員長が出席した。懇談会の模様は実施報告にまとめられ、教育環境の改善について検討された。

(5) 教育の内部質保証に関する自己点検・評価

令和2年度「教育の内部質保証に関する自己点検・評価」に関する一次点検・評価を行い、報告書を作成した。

(6) 国立大学法人評価・大学機関別認証評価に関する作業

国立大学法人評価の中間報告に提出する「研究業績説明書」「現況調査表（研究）」「現況調査表（教育）」「別添資料」の作成に従事した。また、令和3年度受審予定の大学機関別認証評価の準備作業として「自己評価書」「根拠資料・データ」の作成を行った。

(7) 令和2年度年次報告書の作成

令和2年度の本学部・研究科における教育・研究活動を集約し、年次報告書を作成した。

（自己評価委員会委員長 大串健一）

2.2.6. 安全衛生委員会

1) 令和2年度委員

委員長（高田義弘）、委員（古谷真樹、木村哲也、谷正人、田畑智博、谷篤史）、中野下勉（事務課長）、藤村さとみ（総務係長）、多田真紀子/篠原千亜紀（人間科学図書館情報サービス係長）

2) 委員会の開催

4回開催した（7月6日（対面）、9月25日～10月15日（メール審議）、11月16日（対面）、2月3日（オンライン））。

3) 委員会の業務

- ・点検事項報告とその対策の検討
- ・その他改善を要する点の検討
- ・全学安全衛生委員会の報告
- ・その他

4) 定期点検

委員による学舎内共用部点検を月に一回実施し、各委員が担当場所の点検報告を行った。

5) 本年度の実施事項

- ・巡視（廊下の物品の撤去）について協力依頼を行うとともに、教職員及び学生に節電対策の理解と協力を呼びかけた。
- ・コロナウイルス感染拡大予防に関して、部屋の換気・消毒を充分に行うことを依頼した。換気の際は、エアコンの設定温度を臨機応変に設定して頂くように依頼した。
- ・これまで研究科独自作成の安全管理マニュアルは冊子での配布であったが、学生が紛失するなど、必要なときに参照できないことがある等の意見があり、令和2年度作成分から業者発注による冊子作成をやめ、データを各専攻・プログラムにおいてBEEF上に掲載することとした。

6) 課題

- ・共有スペースにおける不要物の撤去依頼を継続する。
- ・什器等についての転倒、落下防止措置についての注意喚起を継続する。
- ・省エネルギーへの協力依頼を継続するが、コロナ感染拡大予防の観点から部屋の換気を充分行い、エアコンの設定温度は臨機応変に対応することを継続する。

(安全衛生委員会委員長 高田義弘)

2.3. 予算

2.3.1. 予算に関する特記事項

(1) 令和2年度(2020)当初予算配分について

収入予算では新学部設置に伴う既定経費の移し替えのため、旧年度と同額の1,218万円が予算振替された。支出予算では財源不足から教員一人当たりの研究費を減額して配分した。

(2) 令和2年度(2020)当初予算配分再編成(5月)について

学生当経費について5月1日現在の学部生(発達科学部)及び大学院生の員数確定及び博士実験系の申請に基づき再編成を行った。

(3) 令和2年度(2020)当初予算配分再編成(10月)について

学生当経費の研究生の人数が確定したことによる再編成を行った。また、新型コロナウイルスの影響を受けて支出予算の再編成を行った。支出予算の再編成により発生した余剰を追加配分に充てた。追加配分は新型コロナウイルス対策費や当初予算時に減額していた研究費、建物修繕等に充てた。さらに学内資金の預り・貸付制度を利用して研究推進支援事業に700万円、教育支援推進事業に700万円、新型コロナウイルス対策事業に800万円の預入をした。

(4) 令和3年度(2021)当初予算配分について

収入予算では旧年度に預入した新型コロナウイルス対策事業費800万円が既定経費に追加された。支出予算では新型コロナウイルス対策として支出予算枠を策定した。

(予算委員会委員長 桑村雅隆)

2.3.2. 予算関係の審議等の状況

(1) 令和元年度（2019）決算について

令和2年5月18日の予算委員会で審議し、令和2年5月22日の教授会において審議・承認された。

(2) 令和2年度（2020）当初予算配分再編成（5月）について

令和2年5月18日の予算委員会で審議し、令和2年5月22日の教授会において審議・承認された。

(3) 令和2年度（2020）当初予算配分再編成（10月）について

令和2年10月19日の予算委員会で審議し、令和2年10月23日の教授会において審議・承認された。

(4) 令和3年度（2021）当初予算配分について

令和3年3月11日の予算委員会で審議し、令和3年3月19日の教授会において審議・承認された。なお、学生当経費は令和3年5月1日の学生当員数に基づいて修正を加え5月開催の教授会で審議することとした。

（予算委員会委員長 桑村雅隆）

2.3.3. 外部資金獲得状況（教員及び学生）

外部資金の獲得状況については、その詳細を資料編（特に「11-3-1~5」参照）に掲載しているため、ここでは特徴的な点を指摘することと定める。

令和2年度科学研究費補助金の獲得は、74件（新規：18件）、総額177,915千円であった。内訳は、基盤研究(S)：継続1件、基盤研究(A)：継続2件、基盤研究(B)：18件（新規：7件）、基盤研究(C)：32件（新規：8件）、挑戦的研究（開拓）：継続2件、挑戦的研究（萌芽）：9件（新規：2件）、若手研究：6件（新規1件）、若手研究(A)：継続1件、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A)）：継続2件、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）：継続1件となっている。2019年度科学研究費補助金の獲得は69件（新規：17件）、総額159,498千円であることから、前年度以上の実績が得られており、大型の新規採択はないものの基盤研究(B)の採択数の堅調な増加が特徴的である。

今後、研究推進委員会等において、科研費制度改革の留意点を再考しながら、次年度以降の科学研究費補助金の獲得に向けての検討が必要と思われる。

日本学術振興会特別研究員について、令和2年度はDC6名（新規：2名）、PD新規1名が採用されており、昨年度のDC8名（新規：2名）、PD継続1名と同等の実績となっている。10年以上にわたって毎年開催している学生委員会主催の申請に係る説明会に加えて、学術・産業イノベーション創造本部・学術研究推進部門（URA室）の支援を得て、計画調書（申請書）の書き方セミナーや推敲のためのワークショップの開催により、申請数の増加につながった。今後の採用数の増加につなげたい。

受託研究について、令和2年度は12件、総額7,798万円（2019年度9件、総額3,516万円）、共同研究については、13件、総額1,021万円（2019年度10件、総額905万円）とな

った。2019年度に総額で半減した受託研究が半減前の水準に戻った。

(人間発達環境学研究科長 青木茂樹)

2.4. 広報及び情報公開

2.4.1. パンフレット、ウェブサイト等

(1) 研究科案内 (パンフレット)

2021年4月入学者向け研究科案内(研究科案内2021)を作成し、2020年5月に発行した。研究科案内2021は29ページで構成され、研究科の教育、研究、国際学術交流、社会貢献、各専攻に関する特色について掲載した。

(2) 研究科ウェブサイト

研究科ウェブサイト (<http://www.h.kobe-u.ac.jp>) は、2011年度に導入されたCMS(コンテンツ管理システム)によって運用されており、すべての情報を一元的に管理・公開している。2020年度は、セキュリティ、保守性、効率性を向上させ、更なる広報的効果を上げるため、最新のCMSに対応する新しいデザインテンプレートを作成した(ウェブサイトの更新は2021年4月の予定)。

研究科ウェブサイトは、受験生を含む一般向けの広報媒体として、また、在学生や教職員向けの広報媒体としての役割をもつ。2020年度においては、在学生向けに、様々な教務学生に関する情報、とくに、新型コロナウイルス感染拡大に伴う重要な情報(教務情報、新入生向けのガイダンス情報を含む)を掲載した。また、例年通り、入試情報、オープンらぼ(大学院説明会)、国際学術交流、学術Weeks主催のオンラインイベント、キャリアサポートに関するオンラインセミナーなど、研究科の公式組織が主催するほぼすべてのイベントの情報を掲載した。学科や専攻を超えた学術交流を支援するため、各コースが主催する卒業論文・修士論文発表会プログラムも公開した。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ

平成28年度に始まった人間発達環境学研究科主催の「オープン・らぼ」は、「オープンらぼウィークス」という研究室訪問期間を設け、参加希望者が予め個別に教員に連絡して面談の予約をとり、「オープンらぼウィークス」の期間中の任意の日時に面談を行うというものである。

令和2年度に関しては、新型コロナウイルス感染拡大の防止のため、オンライン面談の方式をとった。申込み受付期間を5月18日から6月5日、また、面談期間を6月8日から7月3日までとした。その結果、人間発達専攻での面談者は82名(昨年度は94名)、人間環境学専攻での面談者は7名(昨年度は5名)、計89名(昨年度99名)であった。

「オープン・らぼ」開催の目的は、人間発達環境学研究科の理念や特徴、養成しようとする人材像等を広く発信するとともに、ひいては大学院の受験生を増加させる点にある。人間発達専攻では、面談者が多い。面談者が増えることは、本専攻の発展を反映・促進する

とみられる。一方、人間環境学専攻では、面談者数は、一桁にとどまったままであった。この専攻の存在と特徴をより広く発信していく必要が指摘される。

(人間発達環境学研究科 オープン・らぼ WG 主査 平山洋介)

2.4.3. ホームカミングデイ

2020年度の第15回神戸大学ホームカミングデイは、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、開催が中止された。その代替措置として、神戸大学オンライン・ホームカミングデイが開催され、11月30日までの期間限定の特設サイト（ホームページ）で動画が公開された。本研究科からは、研究科長の挨拶、講義、在学生の声、キャンパス風景の動画を提供した。

(令和2年度発達科学部ホームカミングデイ実行委員会委員長 山口悦司)

2.5. 環境設備

2.5.1. 教育・学習環境の整備

(1) 各種施設・設備

学生の教育環境を充実させるため、B棟教室（B106・B208・B210・B212）の老朽化したプロジェクターを更新した。これら整備のうち、2教室分は紫陽会からの支援によるものである。

その他、各種施設・設備の整備に関しては、【資料編】「11-1-4. 教育研究施設の整備状況」を参照されたい。

(事務課長 中野下勉)

(2) キャンパス内ネットワーク環境整備

本研究科で利用できる無線LANは、神戸大学情報基盤センターが管理する全学用無線LANと、本研究科が独自に管理するものが存在する。昨年度までに、授業で使用する教室からの無線LANへのアクセス状況が改善されており、2020年度は、アクセスポイントの増設はない。

本研究科では、学生向けメーリングリストの運用を行っている。メーリングリストは学生が所属する公式組織（コースなど）単位で構成され、教務、学生生活、キャリアサポートに関する情報などが配信された。また、在学生向けの情報を流す電子掲示板も部局内に3箇所設置しているが、学生がキャンパスへ来ることが少なく、今年度は運用を休止した。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

(3) 図書館運営・整備

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言発出、それに伴う大学の休校及び入構制限が長期にわたったため、通常とは異なる運営とせざるを得なかった。4回の附属図書館運営委員会はWeb開催、5回の人間科学図書館図書委員会はメール審議とな

った。

そのような中であつたが、教育・学習環境の整備のために、第1クォーターについては、卒論・修論・博論の提出、論文投稿を予定している学部生・院生に対し、希望図書の郵送サービスを行った。第2クォーターは、月・木の13:00-16:30に、指導教員の承認がある場合「特別利用」ができるようになり、かつ郵送サービスも継続した。他の学生についても、私費での郵送サービスを行った。10月以降は、感染予防対策として同時利用人数を上限45名（使用可能座席数は30席）、滞在時間2時間まで、としたうえで、平日10:00-17:00に図書館を開館し、多くの学部生・院生が利用できるようになった。

今年度は新型コロナウイルス感染症対応により休館・入館制限等サービスを縮小した期間があつたことから、全体の貸出率、回転率ともに前年度から減少している（貸出率48.49%→42.26%、回転率137.41%→96.79%）。学生用推薦図書は、6,949,479円（うち教員選書は電子図書353,393円を含む3,210,374円）の執行であつた。また、2019年度より、貸し出し冊数を従前の6冊から10冊に増やすことを試行してきたが、利用者への定着が図られなかったため、附属図書館利用細則を改正し、正式なものとした。遠隔授業の併用は、今後も継続する可能性が高いことから、在宅でも利用しやすい電子版への移行が検討課題である。

（図書委員会委員長 鳥居深雪）

2.5.2. 交流ルーム・アゴラ

今年は3月から新型コロナウイルスの感染拡大の影響があり、4月7日より兵庫県に発出された緊急事態宣言を受けて、神戸大学の学生、教職員などが自宅待機になった。交流ルームもこれを受けて休業した。アゴラ再開は8月末から検討され、衛生管理のアドバイスを受け10月より再開され、平日12時～16時まで感染対策を施して運営し、食事と飲み物を提供した。10月から2月まで「終わりのない芸術展」を開催することができた。

体制

今年度は、スタッフ（非常勤職員）5名（うち3名は知的障害のある職員）で運営を行った。3月～10月の休業中、スタッフは「のびやかスペースあーち」及び人間系図書室での消毒作業、附属特別支援学校での清掃研修等を行った。

活動状況

- ・今年度は新型コロナウイルスの影響で、授業やオープンキャンパスで利用することはなかった。
- ・学内の専門家の助言を受けて新型コロナウイルス対策のマニュアルを策定し、メニューも限定的にしたうえで、飲料と食事を提供した。
- ・知的障害のあるスタッフのうち1名は、交流ルームでの業務の他に、会議室や教室の清掃に従事した。

- ・スタッフは、教員ボックスへの郵便物の配架作業、及び人間系図書室の消毒作業と廃棄書籍の処理作業を行った。

展示

10月1日から2月26日までの期間で、博物館学芸員資格の学内実習として連携し、神戸大学附属特別支援学校の生徒たちの美術作品を「終わりのない芸術展」として展示することができた。

その他

- ・新型コロナウイルスの感染対策として、マニュアルを策定し、消毒液の設置、定期的な換気などを行った。

(交流ルーム運営委員会委員 大田美佐子)

2.6 教員研修

2.6.1. FD

研究科FD記録、及び神戸大学HP 大学教育推進機構「FD活動」FDカレンダーより抜粋したFDについて、以下に記す。

- (1) 5月22日 Zoomを利用した遠隔授業の実施方法について/新型コロナウイルス感染予防について
- (2) 6月1日 「人間環境学相関研究」に関する意見交換会
- (3) 7月10日 「人間発達総合研究Ⅱ」に関する意見交換会
- (4) 9月4日 これまでの研究力強化の取り組みのご報告とR3年度科研費のお願い/科研費申請に向けて - 評価基準に基づく、好ましい書面記載事項について-
- (5) 12月18日 遠隔授業と関連課題
- (6) 2月19日 ハラスメントの防止に向けて

(人間発達環境学研究科長 青木茂樹)

2.6.2. 初任者研修(情報セキュリティに関する研修)

情報メディア委員会では、毎年、着任した教員に対して研修会を主催している。2020年4月に着任した4名の教員と10月に着任した1名の教員に対して、情報セキュリティに関する研修会を行った。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

3. 入試

3.1. 一般選抜入試

3.1.1. 入学試験委員会

本研究科が関係する入学試験全体を所管する入学試験委員会は、研究科長、副研究科

長，専攻長，学生委員会委員長，発達科学部学科長の計8名で構成し，令和2年度委員長を平山洋介副研究科長が務めた。なお，学部の入学試験は国際人間科学部入学試験委員会の所掌下にある。

今年度の審議概要（日程と議題）は以下のとおり。

・第1回（4月14日）（持ち回り審議）

1. 令和3年度大学院募集要項（案）について
2. 令和3年度入学者に係る入学試験日程について
3. 博士課程前期課程推薦入試の検討について

・第2回（4月24日）（持ち回り審議）

1. 令和3年度博士課程前期課程学生募集要項の一部修正について
2. 専門科目「美術・造形教育」の削除について

・第3回（6月26日）（Zoom会議）

1. 新型コロナウイルス感染拡大に伴う大学院入試の対応について
2. 令和3年度入試における合格者発表方法の変更について
3. 前期課程入試における受験場の特別配慮について
4. 前期課程入試における筆記試験問題の点検方法について

・第4回（8月12日）（持ち回り審議）

1. 令和3年度博士前期課程入試実施方法について

・第5回（9月1日）

1. 令和3年度博士課程後期課程人間環境学専攻（第Ⅰ期）入学試験・進学者選考試験合格者の判定について

・第6回（9月29日）

1. 令和3年度博士課程前期課程入学試験合格者の判定について
2. 令和3年度前期課程入試（2次募集）募集要項について

・第7回（11月11日）（持ち回り審議）

1. 令和4年度博士課程前期課程推薦入試募集要項について
2. アドミッション・ポリシーの英語翻訳について
3. 令和3年度大学院入試の入試情報の開示基準について

・第8回（11月26日）（持ち回り審議）

1. 令和3年度博士前期課程1年履修コース入試における受験上の特別配慮について

・第9回（12月21日）（持ち回り審議）

1. 令和3年度博士課程後期課程（第Ⅱ期）入試実施方法について

・第10回（1月13日）

1. 令和3年度博士課程前期課程（第2次募集）合格者の判定について
2. 令和3年度博士課程前期課程1年履修コース入学試験合格者の判定について

・第11回（3月4日）

1. 令和3年度博士課程後期課程人間発達専攻，人間環境学専攻（第Ⅱ期）入学試験・進学者選考試験合格者の判定について

（入学試験委員会委員長 平山洋介）

3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題

今年度の人間発達環境学研究科の一般選抜入試に関する業務は，関係各位の尽力により大過なく遂行された。

平成28年度から導入された博士課程前期課程の英語外部試験は本年度も継続され，可否判定に有効に活用された。

博士課程前期課程の令和3年度入学試験結果は，人間発達専攻では，入学定員51名に対し，志願者数82名（志願倍率1.61倍），合格者数55名であった。人間環境学専攻では，入学定員36名に対し，志願者数31名（志願倍率0.86倍），合格者数25名であった。人間環境学専攻では，合格者数が定員に達しなかったため，募集人員を10名程度とする第二次募集を実施した。その結果は，志願者数11名，合格者数8名であった。同専攻では，第二次募集を実施しても，合格者の総計が33名で，入学定員に達しなかった。しかしながら，新型コロナウイルス感染拡大という特殊な状況のもとで，入学試験をさらに実施しても，本専攻に適した志願者を集めることは困難と判断され，第三次募集は実施しないこととした。外数としている人間発達専攻（一年履修コース）の入学定員4名に対しては，志願者数7名，合格者数5名であった。これらの入試の結果，研究科全体では，定員91名に対し，志願者数131名（志願倍率1.43倍），合格者数93人となった。博士課程後期課程については，人間発達専攻では，入学定員11名に対し，志願者数18名（志願倍率1.64倍），合格者数11名，人間環境学専攻では，定員6名に対し，志願者数7名（志願倍率1.17倍），合格者数6名であった（第Ⅰ期と第Ⅱ期の合計）。研究科全体に関しては，定員17名に対し，志願者数25名（志願倍率1.47倍），合格者数17名となっている。

人間環境学専攻では，博士前期課程に関し，合格者数が定員を下回り，第二次募集を実施してもなお合格者数が定員に達しなかった。受験者の確保は，いっそう重要な課題となっている。受験者を増やすために，(1)同専攻については，2020年度から英語での受験を可能とし，さらに，(2)両専攻とも，2021年度入試から社会人特別枠における英語の配点割合を下げ，専門科目を重視した採点を行うことで，社会人受験生の増加を図った。これに加え，(3)人間環境学専攻に関し，2022年度入試から推薦選抜を実施することとしている。これらの一連の制度改革がどの程度の効果をあげるのかをみていく必要がある。一方，研究科に直結する学部の定員が減少し，その影響が2021年度入試から現れている可能性があり，この点の把握・分析が求められる。大学院受験生の確保のあり方を引き続き検討していきたい。

入学試験に関する詳細なデータは『資料編』に掲載する。

（入学試験委員会委員長 平山洋介）

4. 国際交流活動

今年度は、大学院受け入れ留学生（正規生，研究生，教員研修生）及び短期受け入れ留学生の増加，大学院生の海外派遣（本学プログラムによる留学及び私費留学）の増加と ERASMUS+ 派遣推進を目標として，活動を行った。しかしながら新型コロナウイルス感染症の状況が改善せず，国際交流事業計画は大きな影響を受け，活動の実施に支障が生じた。

4.1. 学術交流協定

(1) 新規

新たに以下の大学との交流協定を締結した。

全学協定（タイプ1）

- ・ロモノソフ・モスクワ国立総合大学（モスクワ国立大学）

(2) 更新

以下の大学との交流協定を更新した。

全学協定（タイプ1）

- ・西オーストラリア大学

（国際交流委員会委員長 佐藤真行）

4.2. 留学生

本年度，本研究科で学んだ留学生は70名，概要（性別・国籍別・学年別・専攻・学科別・国費/私費別）は次表の通りである。

		前期	後期	計
性別	女性	41	49	90
	男性	16	19	35
	計	57	68	125

		前期	後期	計
国籍	中国	44	55	99
	韓国	5	5	10
	台湾	2	2	4
	コロンビア	1	1	2
	タイ	1	1	2
	ベトナム	1	1	2
	マレーシア	2	2	4
	バングラディッシュ	1	1	2

	計	57	68	125
--	---	----	----	-----

		前期	後期	計
学年	D3	6	6	12
	D2	4	4	8
	D1	2	2	4
	M2	20	19	39
	M1	12	12	24
	学部生 4 回生	2	2	4
	学部生 3 回生	1	1	2
	学部生 1 回生	3	3	6
	研究科研究生	7	19	26
	学部研究生	0	0	0
	学部特別聴講学生	0	0	0
	大学院特別聴講学生	0	0	0
	教育研修生(大学院特別研究生)	0	0	0
	計	57	68	125

		前期	後期	計
専攻・学科	人間発達	25	31	56
	人間環境学	26	31	57
	発達コミュニティ	4	4	8
	環境共生	2	2	4
	計	57	68	125

		前期	後期	計
国費/私費	国費	2	2	4
	私費	55	66	121
	計	57	68	125

(2) 留学生見学旅行

新型コロナウイルス感染拡大のため、実施を見送った。

(3) 留学生説明会及びチューター説明会

4月入学予定の海外からの留学生は、新型コロナウイルス感染症の影響で10月に入学が延期されたため、前期の留学生説明会は開催されなかった。また、後期についても国内居住の新入留学生がいなかったため、後期の説明会も開催されなかった。10月下旬より順次渡日してきた学生には教務学生係で個別に説明した。

(4) チューター制度

留学生の渡日直後の生活条件の整備、諸手続き遂行、また論文作成において補助を要するものに対して、渡日していない学生に対しても10月入学者にはチューターを配して日本社会、学生生活への円滑な適応、および論文のレベルアップを図った。渡日前の留学生とチューターはオンラインで研究指導補助等を行った。チューターに対する説明会は3月と9月に実施した。

(5) 派遣留学生報告書の閲覧

教務学生係において、過去の交換留学生の報告書をファイルにまとめ、学生を対象に閲覧を継続している。

(6) メーリングリストの利用

留学生のメーリングリストを作成し、就活セミナーやイベントなどについて一斉メールで案内を送付した。

(7) 来年度に向けて

Erasmus+に参加できるのは非常に有益なことであるので引き続き押し進めたい。しかし、同時に、専門能力や意欲などを慎重に吟味の上学生を派遣する必要性もある。

(国際交流委員会委員長 佐藤真行)

4.3. ダブルディグリー

Edith Cowan University との間で、博士課程におけるダブルディグリーの可能性を検討した。まずは、学術交流・学生交流細則の締結に向け、準備を進めている。

(国際交流委員会委員長 佐藤真行)

4.4. Innovative Asia

すでに受け入れている1名の学生が今年度博士前期課程を修了した。なお、新規受入について2019年度以降は申請しないことになっている。

(国際交流委員会委員長 佐藤真行)

4.5. 学生・教員・職員の海外派遣

(1) 国際交流運営資金

毎年2回の募集を行うが、前期は新型コロナウイルスの感染拡大の影響による出入国制限のため、募集が見送られた。後期は、国際交流運営資金の援助対象事業のうち一部はオンラインでの開催も考えられることから、募集を行ったが応募はなかった。

(2) 教員・職員派遣（研究科等の経費）

新型コロナウイルスの感染拡大の影響による出入国制限のため海外派遣はなかった。

(3) 紫陽会グローバル人材育成資金

新型コロナウイルスの感染拡大の影響による出入国制限のため、募集は見送られた。

(国際交流委員会委員長 佐藤真行)

4.6. 海外研究者等の招聘・訪問

世界的な新型コロナウイルス感染症拡大の影響で海外からの渡航者はなかった。

※学術 WEEKS での招聘についてはその項を参照

(国際交流委員会委員長 佐藤真行)

4.7. 「英語による授業の実践—ESD 研究」

大学のグローバル化に対応して、英語で行われる授業を増やしていくことが期待されている。実態としては、英語の授業に対する学生からのニーズは乏しいものの、ESD（持続可能な開発のための教育）が地球規模での実践的な学際的交流を求めるものであることから、大学院に開設されたESDサブコースの授業科目のうち、「ESD研究1・2（ESD study 1・2）」は、英語で実施された。

本研究科の教員5名（太田和宏、津田英二、清野未恵子、稲原美苗、松岡広路）のコーディネートの下、毎回、履修生が英語でショートスピーチを行い、英語でグループディスカッションを行う、という形式である。一切日本語は使われない。履修生は10名で、うち中国人留学生3名、昨年度履修生のバングラデシュ人留学生（博士後期課程在籍）1名の参加も得た。

主なテーマは「How to think of the relationships with SDGs」で、参加者各自の問題意識・研究テーマ・方法論と持続可能な開発に関連する問題との関係が議論された。参加者からは「自分の専門の意義を英語で話せて楽しかった」「国際性を意識することができた」などの感想も得た。

夜間ということもあって履修院生数がやや少ない。人間発達専攻・人間環境学専攻の院生がバランスよく履修しているものの、持続可能な開発に関連する研究をしている院生の数は、この程度ではないはずである。次年度は、研究科内外により本授業の存在をアピールし、履修院生の拡大とともに、英語による授業の大切さを広めていく予定である。

(人間発達専攻 ESD 研究担当 松岡広路)

5. 教育

5.1. 教育課程

5.1.1. 今年度の特徴

令和2年度に新たに開始した取り組みや、本年度特記すべき事項などは以下のとおりである。

(1) ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの見直し

本研究科のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーが神戸大学のディプロマ・ポリシーと整合性があるかどうか確認作業を進め、必要箇所について修正を施した。

(2) ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの英訳

本研究科のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーの英訳を行った。

(3) 人間発達環境学研究科の講座改編にともなうカリキュラム改革

令和3年度からの人間発達専攻および人間環境学専攻の各講座の改編に伴い、これまでの共通科目を廃止し、専門性の高い協働型グローバル人材の育成を目指す科目「グローバルリサーチ演習 I, II」の新設を決定した。

(教務委員会委員長 野中哲士)

5.1.2. 研究科、専攻共通科目

(1) 人間発達総合研究 I

人間発達総合研究 I-1, I-2 は前期課程の共通科目として、人間発達専攻の学生が学問領域を超えた問題意識を共有することを目的としており、専攻内における研究テーマの広がりや視点の多様性を俯瞰できる内容となっている。人間発達総合研究 I および人間発達関連研究の運営を充実させるため、人間発達専攻各系講座から1名ずつ、計4名での共通科目運営委員会が組織されている。本年度は、新型コロナウイルス感染状況を考慮し、オンラインで各系講座の教員が授業を行い、各授業で学び得たことを基にして、また、学生自身の卒業研究の結果や修士論文の研究計画も考慮しながら、人間発達に関わる研究の方法および視点の多様性について学修することができた。

(人間発達総合研究主担当 谷冬彦)

(2) 人間発達総合研究 II

令和2年度の人間発達総合研究 II は、例年通り、人間発達専攻に在籍する博士後期課程1年次生の博士論文構想発表会として実施した。ただし、コロナ禍に応じて、ビデオ会議システムを用いた遠隔双方向開催とした。開催日は、令和2年7月10日であった。参加院生は、各自発表スライド・資料を提示しつつ、30分の発表(質疑込み)を行った。なお、資料などは事前に神戸大学 LMS の BEEF で共有した。発表会においては、院生相互の質疑なども活発であり、博士論文作成の出発点として有意義な機会を提供できたと考えられる。以下には、当日の発表課題 11 件を示す。

- ・同級生が受ける個別支援に対する周囲の児童の捉え方とその変容過程

- ・不安の高い発達障害児とその母親，双方の不安症状改善に向けた家族認知行動療法プログラムの構築と有効性の検討
- ・大正期の京都における日本オペラ会のローカルな展開
- ・多文化共生社会の創成に資する〈当事者性の邂逅〉理論の構築
- ・今井誉次郎における綴方教育論の研究
- ・小規模特任校制度の導入時における行政の政策意図と展開における教職員・地域住民の活動に関する研究
- ・ジュニアアスリートの身体能力における縦断的研究
- ・中国におけるeスポーツクラブの誕生と発展に関する研究
- ・バスケットボールのショット動作に関するバイオメカニクスの研究
- ・運動・スポーツ参与に影響を与えるフィジカルリテラシーに関する研究
- ・慣性センサを用いたスポーツ・運動能力のバイオメカニクスの評価法に関する研究

(人間発達総合研究主担当 稲垣成哲)

(3) 人間発達関連研究

人間発達関連研究は，人間発達専攻の前期課程の学生がみずからの修士論文の構想を発表し，互いの研究領域の問題を学び，切磋琢磨することを目的としている。例年は，ポスター発表を行っていたが，今年度は，新型コロナウイルス感染状況を考慮し，各自発表抄録を事前に執筆し，共有した上で，Zoomによって各自発表スライドを提示しつつ，12月11日に研究発表会が行われた。オンラインながら人間発達専攻所属教員も交えた活発な議論が行われ，修士論文に向けた自らの研究の深化をはかることができた。

(人間発達関連研究主担当 谷冬彦)

(4) 人間環境学関連研究

人間環境学専攻の多様な専門性を活かすべく，この授業は学生の研究プレゼンテーションに基づく多分野間の学際的な対話を行うことを目的としている。今年度は4教育研究分野32名の学生が履修した。今年度は新型コロナウイルス感染症による対応のため，オンライン形式での授業となった。それぞれがプレゼンテーション資料を作成し，オンデマンド形式で閲覧できるようにした。全員がプレゼンテーション資料に対する評価基準を自ら設定しながら各プレゼンテーションを評価した。その上で，担当教員が各プレゼンテーションとコメント，およびコメントに対する回答を評価した。また，ゲストスピーカー2名を招き，リアルタイム形式でキャリアパス，研究倫理に関する授業を実施した。例年と異なる授業形式のため，多分野間の議論・意見交換と相互評価は困難であったものの，自らの研究に対する異分野からの評価による気づきや自明視していた前提の再検討の契機を得るとともに，修士論文に向けた自らの研究の深化をはかることができた。

(人間環境学関連研究主担当 田畑智博)

(5) ヒューマン・コミュニティ創成研究

本年度は、オンラインによる講義を行った。例年どおりさまざまな領域で研究を志す院生が受講し、知を横断する対話の創出に力点を置く授業であった。オンラインによる哲学対話への挑戦であったが、受講生各人の研究関心をテーマにした意味ある対話を展開することができた。コーディネーターは稲原美苗准教授と津田英二教授が務めた。また、昨年度に引き続き、神戸大学附属中等教育学校の中川雅道教諭の助言を得た。

(ヒューマン・コミュニティ創成研究主担当 津田英二)

5.1.3. 教職教育

(1) 教育実習

令和2年度の教育実習の履修者(単位認定者)数は、幼稚園、小学校、中等教育、特別支援学校ともに0名であった。令和3年3月1日に附属校園との実習反省会を行い、令和2年度の実習に関する反省事項や次年度以降に向けての課題について意見交換を行った。

(2) 教員免許取得状況

本年度の教員免許実取得人数は一種免許状が3名、専修免許状が20名であった。

(3) 教職実践演習

本年度の「教職実践演習(幼・小)」は10月9日から1月22日の間に15回開講し、幼稚園、小学校、特別支援学校の現役教員及びゲストスピーカーによる授業を行った。

(教務委員会委員長 野中哲士)

5.1.4. 博物館学芸員資格

博物館学芸員資格専門委員会は、国際人間科学部の2、3年生ならびに大学院博士課程前期課程学生の学芸員養成課程における博物館実習の運営と、履修を終えた3年生以上に単位認定を行った。これらの活動に関連して、5回の委員会(メールでの持ち回り審議を含む、4月、6月、8月、11月、2月)をリモートにて開催した。

(1) 令和2年度博物館実習説明会と各実習の実施

- ① 全体事前指導：コロナ禍の状況を鑑み、2、3年生を対象とした博物館実習全体のカリキュラムについての説明を国際人間科学部のWEBに掲載し、申請期間を4月24日～5月20日(履修登録最終日まで)とした。
- ② 見学実習(夏期)：合同見学(7月11日)を石田圭子准教授が担当した。神戸市ゆかりの美術館で開催された「別荘博覧展」展を履修生全員で見学し、展覧会担当の学芸員より説明を受けた。自由見学では、各自任意の博物館・美術館・科学館等を選び、開催されている常設展と企画展を観覧したうえで展示方法に着目した見学実習を実施することとした。いずれもレポート提出を課した(10月2日締め切り)。
- ③ 学内施設「カフェ・アゴラ」における実務実習：9月7, 9, 23～25日：本年は学内施設「あーち」においての実務実習がコロナ禍の影響もあり困難であるため、学内施設

「カフェ・アゴラ」での開催となった。津田英二教授の指導の下、神戸大学附属特別支援学校と連携して、所属生徒の絵画作品の額装・展示・解説等を行った。今年度のテーマは「終わりのない芸術展」であった。(履修者数5名)

- ④ 館園実習：8月中旬から1月下旬にかけて、4年生が3館園，大学院博士課程前期課程2年生が1館園にて実習に参加した。公益財団法人白鶴美術館，竹中大工道具館，大阪市立科学館，兵庫県立美術館（各1名）で指導を受けた。
- ⑤ 全体・館園事後指導ならびに館園実習前事前指導（12月15日）：一昨年度来実施している通り，今年度も3年生以上を対象とした全体・館園事後指導と，2年生以上を対象とした館園実習前事前指導を合同で開催した（本年度はリモート開催）。事後指導対象の実習生が学外での博物館・美術館における館園実習の体験談や問題意識を口頭報告した。次年度に館園実習に赴く下級生が事前指導の一つとして聴いた。この報告会における質疑応答も含めて，事後指導履修生は博物館実習全体の総括を行った。事前指導履修生には別途，学外実習先の説明ならびに館園実習に向けての諸注意を行った。

(2) 令和2年度の博物館実習単位認定

博物館実習単位は2年間をかけて取得する。4年生3名，大学院前期課程2年生1名，計4名に対して博物館実習の単位認定を行った。

(3) 国際人間科学部の学芸員養成課程におけるプログラムの実施

発達科学部と国際文化学部との統合により開設された国際人間科学部における，学芸員養成課程の統合・改編を進めた結果，今年度で委員会活動が軌道に乗り，円滑に行われた。

(4) 今後の課題

国際人間科学部では，グローバル・スタディーズ・プログラム(GSP)における海外留学と博物館実習との時期的なバッティングが懸念される。また，博物館学芸員資格取得を希望する学生が，掲示板の見落としによる履修登録や実習参加の機会を逃す事例が増えてきた。そのため今年度は課題を従来よりも厳しく課した。より効果的な対応策を検討する必要がある。また近年，履修生の減少傾向がみられる，上記GSPとの関連も要因の一つとして挙げられるが，今後の対策も望まれる。具体的には，「新入生ガイダンス時にパワーポイント1枚程度の資料を配付し，教務委員長から説明してもらうこと」，「4月の全体事前指導の日程掲示を学芸員掲示板，ウェブサイト周知だけでなく，2年生，3年生のメーリングリストでメール周知すること」の2つを実施することである。

(博物館学芸員資格専門委員会委員長 岸本吉弘)

5.1.5. ESD サブコース

ESD (Education for Sustainable Development=持続可能な開発のための教育) をテーマとするこのコースは，学部を超えた領域横断型のコースとして，2008年度より開講されて

いる。2015年度より授業運営を担うESD 教育部会（部会長：清野未恵子）は、国際教養教育院に設置されたが、中核となっているのは、人間発達環境学研究科である。全学に配置されている同コース運営委員会の委員長は、松岡広路（人間環境学専攻教授）となっている。また、実務的には、松岡のみならず、総合コーディネーターの鴨谷真（学術研究員）や清野未恵子（人間発達専攻准教授）が、神戸大学の新しい教育モデル「ESD コース」の運営に当たっている。

今年度は、コロナウイルス禍にもかかわらず、「ESD 基礎 A・B」「ESD 論 A・B」「ESD ボランティア論」「ESD 生涯学習論 A・B」および「ESD 演習 I・II」を実施することができた。全学のESD関係教員の協力を得て、オンラインによる授業、ワークショップを中心とした授業を行った。それらの基幹にあるのは、本研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのヒューマン・ネットワークである。とりわけ、事務局を担うRCE兵庫-神戸のESD実践者にゲストスピーカーとして登壇してもらい、現場の臨場感をできるだけ学生が触れることができるように工夫した。基礎科目群と各学部で開講されている関連科目を履修したのち、ESD 演習で学びの総合化・交流を行う、という学びのシーケンスをもつESD コースは、新しいサービス・ラーニング（学校と社会サービスの連結した学習スタイル）のモデルであるが、今年度は、オンライン授業の可能性を探究する方向性も見出しえた。

参加部局が全部局に広がり、全学部参加のコースとして本格的に動き始めてきた。SDGs（持続可能な開発目標）が巷間知れ渡るようになり、社会・世界にその推進を担う人材づくりの方法論の提示が求められている。本コースの運営の母体である本研究科及びヒューマン・コミュニティ創成研究センターの役割は、ますます大きくなっているといえよう。

（人間発達専攻 松岡広路）

5.1.6. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント

(1) ゲストスピーカー

令和2年度は8万円（1件につき1万円）の予算配分のもとで、前期（第1, 2Q）2件、後期（第3, 4Q）6件の計8件が実施された。提出された実施報告書の点検を通じて、受講学生、招聘講師、担当教員のいずれからも良好な評価が得られており、高い教育効果を生んでいることが確認できた。

(2) ティーチング・アシスタント

優秀な大学院学生及び学部学生に対し、教育的配慮のもと教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導の実現や、学生に将来教員・研究者等の職に就くためのトレーニングの機会を提供し、これに対する手当支給により、学生の処遇の改善の一助とするためにティーチング・アシスタント制度を設けている。学部学生をスチューデント・アシスタント（SA—時給950円）、大学院生をティーチング・アシスタント（TA—前期課程：時給1200円、後期課程：1400円）、同後期課程学生をシニア・ティーチング・アシスタント（STA—時給1500円）とし、従事可能な業務内容につき差別化を行ったうえで任用した。実施報告書（学生用・教員用）からは、担当教員・学生のどちらからも高い評価を得

ていることが確認できた。平成 29 年度から発達科学部と国際人間科学部で同時開講の科目に関するティーチング・アシスタントは国際人間科学部の予算でまかなわれている。そのため、人間発達環境学研究科における令和 2 年度の予算配分は約 8 万円 (81,600 円) であり、昨年度比で 18.3%であった。当初の任用予定学生数は以下のとおりであるが、新型コロナウイルス感染防止のため、授業が遠隔での開講方法に変更されたり、海外からの招聘予定講師が渡航できず不開講になったことから、結果的に TA を雇用する必要がなくなったため、全員採用しなかった。

前期 SA 0 名 TA 2 名 STA 0 名 計 2 名

後期 SA 0 名 TA 0 名 STA 0 名 計 0 名

(教務委員会委員長 野中哲士)

5.2. 各専攻の講座の教育

5.2.1. 人間発達専攻

(1) 運営

各教員は、4つの系講座(こころ系, 表現系, からだ系, 学び系)に所属している。専攻の運営は、基本的に各系講座を中心に行われている。運営にあたっては、専攻長と各系講座の主任により構成された人間発達専攻運営会議を組織し、月1回の定例会議のほか、適宜臨時の会議やメール審議により、専攻に関わる重要案件(人事, 予算, 入試, 共通科目運営, 共通備品運用等)の審議等を行った。今年度は、特に新規採用助教人事における人事方針, 人事選考委員会の構成についての議論とコロナ禍の入学試験対応が議論の中心であった。

(2) 予算

予算は、専攻に配分されたものを従来通り各系講座に振り分けた。共通経費は設定していないが、例年、大型プリンタ運用経費については、各系講座より予算の一部を拠出している。また、この大型プリンタの経費については、その用途が共通必修科目におけるポスター発表に集中しているため(共通必修以外の学外学会発表での使用も可)、専攻長が実験・実習等に要する経費を申請して、系講座の拠出金と合算して対応している。本年度はからだ系講座が運用担当であり、原則、利用者には無料で使用させる予定であった。この大型プリンタについては、学外の学会等におけるポスターセッションの拡大、アクティブラーニングの普及などの観点から、その運用・維持管理について、研究科全体での体制に移行すべきであるとの意見が多く、また、今年度はコロナ禍のため、対面の講義や学会等が開催されなかったため、使用自体はほとんどなかった。次年度に向けて、大学院の再編の結果として、専攻共通必修科目としての人間発達関連研究が廃止されるので、研究科内のポスターセッションの機会が減少することもあり、この大型プリンタの位置付けや、その取り扱いについては、従来とは違うものになる可能性があるかもしれない。

(3) 入学試験

博士課程前期課程入試については、昨年度の課題であった定員確保問題が改善し、定員

より多い合格者（55名）を出すことができた。しかしその後、合格辞退が3名になり、最終結果として定員プラス1名の状況にある。辞退の主要な理由は、近年ほぼ同じ傾向であり、他大学院への合格による辞退である。有力大学大学院と併願する受験生が一定数存在することが理由に挙げられる。今後、この課題に対応するためには、本専攻の特徴や魅力などを確実に伝える広報活動等の継続的な強化が必要だろう。一方、博士課程後期課程入試については、従来通り、定員を充足するだけでなく、一定の倍率を確保することができている。

(4) 教育

共通必修科目として、人間発達総合研究 I/II、及び人間発達相関研究が設定されている。これらの科目は、コロナ禍でもあり、遠隔講義となった。人間発達総合研究 I は、専攻内における多様な研究関心とテーマの広がりや修得できる内容となっている。ここ数年、受講生の評価がいまひとつ低調である。一方、修士論文の構想発表の場である人間発達相関研究では、遠隔テレビ会議システムを利用して、遠隔双方向で実施した。さらに、博士論文の構想発表会を兼ねる人間発達総合研究 II では、同様に遠隔双方向で、それぞれの博士論文構想並びにその進捗状況が発表され、極めて充実したものとなった。それらは、5.1.2(1)～(3)にも報告されている。ただし、これらの共通必修科目は、次年度からの専攻再編によるカリキュラムの改革により廃止されることが決まった。以下、各系講座における特色を列挙する。

●こころ系講座

主要な教育面での活動は以下の通りである。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大のため、多くの学会がオンラインでの開催となった。また、ゲストスピーカーの招聘なども制限される中での教育活動であった。

1) 学生の国際学会発表

- Maho Komura (2021). Children's recognition of their friends' individualized support-Focusing on Justice and Intimacy Special Education, Individual Differences and Needs (ICSEIDN)
- 清原舞子 (D2) Maiko Kiyohara: A Case Study of An Artist Diagnosed with Schizophrenia-Using the Graphic Rorschach (Digital version) "GRD". XI V. INTERNATIONAL RESEARCH CONFERENCE (IRC2020). Oct 21 (Barcelone, Spain - Online)
- TORII, M., SOMEKI, F., NISHIO, Y., UMEDA, M., OGAWA, H., KONDO, T., & SHIKIBU, Y. (2020) Effectiveness of an Online Program Using Manga to Change Japanese High School Students' Attitudes Toward Individuals with Neurodevelopmental Disabilities, International Society for Autism Research Annual Meeting, Virtual

- Taniguchi, A., Yamane, T. (2020). Are lay theories about developmental disorders related to labeling others as having “developmental disorders” ? ISSID2019, 2020. 7. 30.
- Taniguchi, A., Yamane, T (2020) . Are lay theories about developmental disorders related to labeling others as having “developmental disorders” ?, International Society for Autism Research Annual Conference, Virtual

2) 学生の国内学会発表

- 王一然, 曹家偉, 加藤佳子 (2020) 大学生の食生活における自己制御尺度の信頼性と妥当性の検討, 日本健康心理学会第 33 回バーチャル大会
- 生田邦紘・赤木和重 (2021) 軽度知的障害のある青年の障害受容: 「ふつうにこだわっていた青年は, なぜ「ふつう」にこだわらなくなったのか 日本発達心理学会第 32 回大会 (オンライン)
- 呉文慧 (2020) 「特別なニーズ教育とケイパビリティアプローチの統合への試論—ナラティブ論を手掛かりに—」, 日本特別ニーズ教育学会第 26 回研究大会,
- 呉文慧 (2020) 「ASD のある生徒と合意形成する教師の実践的思考—実践当事者へのビデオ再生刺激法を用いた解釈的現象学的分析—」, 日本質的心理学会第 17 回大会
- 古村真帆 (2021). 小学生は級友に実施される個別支援をどのように捉えるのか? : 無関心を示す児童の理由の検討 日本発達心理学会第 32 回大会
- 片岡美華・古村真帆・金丸彰寿 (2020). 自己と他者の視点から障害理解を促す教育的支援を考える 日本 LD 学会第 29 回大会自主シンポジウム
- 周雄正傑・古谷真樹 (2020) 自動思考が寝つきおよび睡眠の質に及ぼす影響 日本健康心理学会大会第 33 回バーチャル大会
- 曹家偉, 王一然, 加藤佳子 (2020) 大学生の首尾一貫感覚と知覚されたストレスおよび健康に関する生活の質, 日本健康心理学会第 33 回バーチャル大会ポスター発表
- 谷口あや, 鈴木田英里, 野上慶子, 黒田晶子, 山根隆宏 (2020) 幼児をもつ父母ペアデータによる子育てと子どもの問題行動との関連 (2): 反抗行動に対する認知が養育スタイル及び子どもの問題行動に与える影響の検討, 日本心理学会第 84 回大会 (オンライン)
- 谷口あや・山根隆宏 (2021) 「他者への「発達障害」ラベリングがスティグマに及ぼす影響に関する検討—社会的距離との関連から—」, 日本発達心理学会第 32 回大会
- 西あかね, 西野恵子, 高塚倫子, 村中泰子, 鳥居深雪 (2021) 高校通級と大学移行支援の統合の試み—大学進学を希望する高校生への通級指導モデル—, 日本発達心理学会第 32 回大会自主シンポジウム (オンライン)
- 野上慶子・谷口あや・山根隆宏 (2021) 「幼児の反抗的行動に対する母親の認知要因—子どもの問題行動から育児不安, 親の認知様式へのモデル検証—」, 日本発達心理学会第 32 回大会 (オンライン)

3) 学生の論文

- ・呉文慧（印刷中）「我が国の特別支援教育や特別ニーズ教育において「教育的ニーズ」概念はどのように議論されてきたかー英国の動向に位置付けてー」, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要
- ・古村真帆(2021). 特別な支援が必要な児童に対する通常学級での個別支援に関する研究動向 神戸大学発達・臨床心理学研究, 20, 12-20.

4) ゲストスピーカーの招聘

- ・講師：川添文子（一般財団法人神戸市地域医療振興財団西神戸医療センター心理士）
題目：医療現場における臨床心理士の役割と連携
日時：令和2年12月1日（火）
実施授業：臨床心理学検査特論演習2
- ・神戸・子どもと教育ネットワーク 代表 池見宏子 《「命をつなぐイベント」 in 神戸》「語り部体験」プロジェクト呼びかけ団体
題目：災害時に必要な心理に関する支援「戦争体験の語り部活動を通して」
日時：2021年2月15日

5) 学術講演の開催

- ・2020年8月11日（火）山田剛史氏（横浜市立大学）「信頼区間，効果量，メタ分析～標本分布，標準誤差を基礎として」

6) 学生の学術論文

- ・吉岡拓真・伊藤雅隆・大屋藍子（2021）「大学生の掻破行動に対する習慣逆転法の効果の検討ー拮抗行動の選択機会による効果の検討ー」 対人援助学研究, 第11巻, 60-70. [審査付き]

●表現系講座

大学院教育においては、学生の学位論文指導を軸にしながら、その周辺に関連する学術情報・知的活動を配置することに努力している。表現行為を媒介にして人びとが集うことを重要な契機のひとつとする当系講座の教育だが、本年度の指導や研究発表はウェブミーティングを主体とせざるを得なかった。そのことは、新入生にとっては不本意だったはずだが、それでも、学生・教員ともにその利用に慣れるにつれて、そこに新たな可能性を見出し、成果をあげることができたと感じている。

以下に今年度の事例のうちから代表的なものをあげる。

1) 学生の査読付き論文

- ・肥山紗智子，（大田美佐子と共著），日本の三文オペラ試論(1)-黎明期における三文熱を

- めぐって, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 14(1), 37-53, (2020)
- ・小田智美, 京都新京極における浅草歌劇の流行-京都日の出新聞の調査を通じて, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 14(2), 3月発行予定 (2021)
- ・鈴木彩希, 戦後日本における着物の改良をめぐる流行創出の試み: 田中千代の「ニュー・きもの」を中心に, 服飾美学 66, 57-76(2020)

2) 学生の学会発表

- ・小田智美, 地域展開する浅草オペラ—京都日の出新聞の分析を通じて, 日本音楽学会第71回全国大会, 2020年11月15日, オンライン(開催校:武蔵野音楽大学), 査読あり
- ・小田智美, 京都・新京極周辺の歌劇界:大正8年から大正10年までを中心に, 日本音楽学会西日本支部第51回定例研究会(通算402回)オンライン
- ・李雅心, 日本による再占領期中の青島における音楽活動(1938年-1945年), 日本音楽学会第71回全国大会, 2020年11月14日, オンライン(開催校:武蔵野音楽大学), 査読あり
- ・青井郁美, 座位獲得以前の乳児が日常場面において自発的に手を動かして触れた環境内の対象, 日本生態心理学会第8回大会, 2021年3月22日, オンライン開催
- ・中澤剛, 歩行者が街中でナビゲーションを行った時に見られる視線, 日本生態心理学会第8回大会, 2021年3月21日, オンライン開催
- ・中澤剛, 歩行者が街中でナビゲーションを行った時に見られる視線, 日本認知科学会第37回大会, 2020年9月17日, オンライン開催
- ・木崎圭介, 正確さが必要とされる熟練伝統技能における視覚運動協調: 扇子づくりの目もみ技能の検討, 日本認知科学会第37回大会, 2020年9月17日, オンライン開催
- ・炭谷将史, ワクワク・ドキドキがある園庭をつくる, 日本認知科学会「身体, システム, 文化」研究文科会, 2020年10月24日, オンライン開催
- ・鈴木彩希, 戦後日本における着物の価値形成の試み:『美しいキモノ』を中心に, 意匠学会第243回研究例会(オンライン)2020年11月14日

3) 学術 WEEKS

- ・「オンラインならではの音楽・アートの発信方法の実践」2021年2月27日(土)15:00～youtubeライブ配信(谷正人)
- ・ギャラリー・ヘロルド・ブレイメン:地域とアーティスト・コミュニティ(野中ゼミ)

4) ゲストスピーカー

- ・音楽と記憶の継承 - 市民公募「ひろしまのうた」から見えてくるもの, 能登原由美(大阪音楽大学講師, 「広島と音楽」委員会委員長)(音楽文化史ゼミ, 大田美佐子, 5月8日オンライン実施)
- ・音楽民族学特論演習A(イランの伝統楽器タールとイラン音楽のリズム理論についての解説。および周辺諸国との違いについての講演:北川修一氏 2020/11/16)

- ・音楽民族学特論演習 B (インド音楽のリズムについての解説・講演：立岩潤三氏 (1月18日))
- ・『瀕死の白鳥』バレエ版：舞踊譜を読み解き踊る，若林絵美 (バレエ講師／薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタント・キュレーター) (舞踊表現特論演習 1・コンテンポラリーダンス 1 合同，関典子，10月20日)
- ・マイム・レクチャー・ワークショップ，いいむろなおき (演出家／マイム俳優) (舞踊表現特論演習 2・コンテンポラリーダンス 2 合同，関典子，12月8日)

5) インターン等

- ・日本音楽即興学会第12回大会運営(2020年10月31日-11月1日) (M1 大森響介，M1 森妃菜乃)
- ・日本音楽即興学会第12回大会研究発表司会(2020年10月31日-11月1日) (D5 石原興子)

●からだ系講座

からだ系講座は自然科学から人文・社会科学分野までの多岐にわたる学問分野を含んでいるので，これらの学際的観点から解析する方法や枠組みを習得し，課題解決のための柔軟な思考能力や洞察力を涵養することを目的に，大学院生それぞれの分野の学会やセミナーでの発表することのみならず，学内での各種発表会・研究会などの実質的な計画・準備・運営に参画し，積極的参加を推奨している。

しかし，今年度は新型コロナウイルス感染症拡大により，各種の学会大会や研究会，シンポジウム等が中止となったり，WEBまたは誌上開催となったこと，また，感染防止対策の一環として，学内への立ち入りの禁止や，調査や実験そのものが実施できなくなったために，十分な研究活動を行うことができなかった。しかしそのような状況下でも，国内外での学会等で研究発表を行い，積極的な研究活動を展開している。そのリストの一部を以下に示した。

1) 学会発表

島津大地

- ・令和2年度兵庫体育・スポーツ科学学会第31回学会大会 口頭発表 (誌上開催)
- ・2020 横浜スポーツ学術会議 ポスター発表 (Web 開催)

Tomoya Kakizawa (柿澤友哉)

- ・International Society of Electrophysiology and Kinesiology XXIII Virtual Congress, July 12-14, 2020

Wataru Oyanagi (大柳航)

- ・International Society of Electrophysiology and Kinesiology XXIII Virtual

Congress, July 12-14, 2020

岩佐貫太

- ・兵庫体育・スポーツ科学学会第31回大会 兵庫体育・スポーツ科学学会 2020年6月
- ・日本人間工学会第61回大会の誌上開催に参加

安芸祐作

- ・兵庫体育・スポーツ科学学会第31回大会 兵庫体育・スポーツ科学学会 2020年6月

岩井勇樹

- ・兵庫体育・スポーツ科学学会第31回大会 兵庫体育・スポーツ科学学会 2020年6月

Koichiro ICHITANI (市谷浩一郎)

- ・The 2020 Yokohama Sport Conference, International Council of Sport Science and Physical Education 2020年9月

Kazutaka MURATA (村田和隆)

- ・The 2020 Yokohama Sport Conference, International Council of Sport Science and Physical Education 2020年9月

2) 助成金等

- ・KIM Nahyun (研究生)
公益財団法人 SOMPO 福祉財団 2020年度福祉諸科学事業「ジェロントロジー研究助成」採択
- ・関山紗英 (博士前期課程) トビタテ留学採用
- ・竹内真純 (博士後期課程) RPD 採用

●学び系講座

本年度は感染症拡大により研究・教育の推進に大きな困難がある中で、次のような成果が挙げられ、また新たな課題も見えてきた。

学び系講座では、2013年以来「教育基礎研究道場」特別講義シリーズを開講してきており、関係教員、特別講師、参加院生における協同体制で、それぞれの当該専門分野の最新の知見について議論してきている。2020年度は、計8件の特別講義を実施した。内容は、教育方法学、理科・科学教育学を中心に多岐に渡っており、その概要は研究科HPに掲載されている (<http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/6412>)。

一方、学生の学術的活動の主要なものを以下に示しているが、学会誌・研究科紀要への論文投稿・掲載、(遠隔を主とした)国際・国内学会発表等として多数の成果が表れている。学生の受賞も2件みられる。

今年度の特徴は、人的交流や渡航が困難な中、遠隔通信技術が急速に普及した状況をむしろ生かして、学術 WEEKS におけるオンライン国際シンポジウム開催やオンライン研修プログラム開発などにおける学生の活躍が特筆される。次年度は、こうした新たな傾向を院生の教育・研究のツールとして積極的に活用し、国際的な研究展開の力量形成を目指す計画・設計が求められる。以下、学び系講座における学生の業績を示す。

1) 査読付き論文

- ・高橋あおい・山口悦司・稲垣成哲（印刷中）「国立科学博物館の展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」の理念」『科学教育研究』第 45 巻，第 1 号。
- ・高橋あおい・神山真一・山口悦司（印刷中）「小学校理科の指導法に関する科目における遠隔会議システムを利用した教員養成実地指導講師による講義の実践的検討」『教育科学論集』第 24 号。
- ・松本圭朗（2020）「教育的なるもの，あるいは政治的なるものとしての教育的価値—勝田一の教育的価値論に着目して」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 14 巻 1 号，pp. 27-36。
- ・瀬川千裕（2021）「馬場四郎のカリキュラム論の特質—「総合的な学習の時間」への示唆—」『教育科学論集』第 24 号，pp. 13-22。
- ・亀崎美沙子，子育て支援の葛藤における保育士の意識構造—保育士の語りの質的分析から—，十文字学園女子大学紀要，第 50 号，pp. 85-97，2020。
- ・稲原美苗・藤原雪・山川哲，大学院生が企画運営する哲学カフェの社会教育学的実践～地域コミュニティでの対話の場作り～，思考と対話，第 2 号，pp. 88-94，2020。
- ・Aoki, R., Shingai, Y., Inagaki, S., Mizoguchi, H., Takeda, Y., Kusunoki, F., Yamaguchi, E., Funaoi, H., & Sugimoto, M. (2020). The “Satoyama Management Game” for Teaching about the Conservation of the Satoyama Environment: User Evaluation with Elementary School Students Based on Eye Tracking. In Proceedings of EdMedia + Innovate Learning (pp. 663-668). Online, The Netherlands: Association for the Advancement of Computing in Education (AACE).
- ・神山真一（2020）「アーギュメントを理科授業に導入することに対する教師の信念に影響する要因の検討：McNeill らの研究に着目して」『理科教育学研究』第 61 巻，第 2 号，pp. 193-205。
- ・神山真一・山本智一・稲垣成哲（2020）「教員志望大学生のアーギュメント指導に対する信念に影響する要因の検討：アーギュメントを小学校理科授業に導入するための学修プログラムを通して」『理科教育学研究』第 61 巻，第 1 号，pp. 31-44。
- ・俣野源晃・山本智一・山口悦司・坂本美紀・神山真一（印刷中）「複数の証拠を利用するアーギュメント構成能力の育成：小学校第 5 学年「電流がつくる磁力」の事例」『理科教育学研究』第 62 巻，第 1 号。
- ・Tokura, S., Yamaguchi, E., Sakamoto, M., Yamamoto, T., Inagaki, S.,

Wakabayashi, K., & Matano, M. (2020). Investigating perspective-taking on socioscientific issues among Japanese primary school students. In Levrini, O. & Tasquier, G. (Eds.), *Electronic Proceedings of the ESERA 2019 Conference*, Part 8 (co-ed. Laherto, A., & Rybska, E.), (pp.949-974). University of Bologna.

2) 学生の査読なし論文

- ・高橋あおい・山口悦司 (2021) 「小学校理科の指導法に関する科目における遠隔会議システムを利用した模擬授業の実践的検討」『日本科学教育学会研究会研究報告』第35巻, 第3号, pp.9-14.
- ・星川佳加 (2020) 「戸田唯巳の教育実践に関する証言 (その2) 元教え子 T さんへのインタビュー記録」『研究論叢』第26号, pp.33-47.
- ・松本圭朗 (2021) 「雑誌『教育静岡』総目次 (1)」『教育科学論集』第24号, pp.59-87.
- ・松本圭朗 (2021) 「『糸賀一雄著作集』・『福祉の道行』に至る編纂過程をさぐる一田中昌人アーカイブ作業による史料の発掘」渡部昭男・國本真吾・垂髪あかり編『糸賀一雄研究の新展開—ひとと生まれて人間となる』三学出版, pp.255-273.
- ・瀬川千裕 (2020) 「『奈良作文の会』の歩み——谷山清の綴方教育論を中心にして——」『作文奈良』第62号, pp.1-12.
- ・瀬川千裕 (2020) 「『食』分野の教材——こんだてづくりに焦点をあてて——」『今日からはじめる楽しい授業づくり』第9号, pp.62-69.
- ・勝治友紀子・眞藤拳・西あかね・蓑毛智樹・岸本佳奈美・徐楽瑤・川地亜弥子 (2021) 「意志あるところに道は開ける: ロンドン補習授業校における国語教育——学術 Weeks2020 シンポジウム報告——」『教育科学論集』第24号, pp.53-57.
- ・川地亜弥子・勝治友紀子 (2021) 「教育・子育て支援に関する日英比較オンライン研修——GSP の教育目標分析に基づくプログラム開発——」『教育科学論集』第24号, pp.45-52.

3) 国際会議等発表

- ・Ohyama, M., Baba, H., & Yoshinaga, J. (2020). Construction of Debriefing Designed for Applying Experiences of History Game to Contemporary Issues. In Ma, M., Fletcher, B., Göbel, S., Hauge, J.B., Marsh, T (Eds.), *Serious Games, Proceedings of Joint International Conference, JCSG2020* (pp.263-275). Springer. (遠隔発表)
- ・Ito, M., Kusunoki, F., Inagaki, S., & Matsuoka, K. (2020). Manga method for supporting explanation of exhibit in science museums: a case study of the Toyohashi Museum of National History. 13th annual International Conference of Education, Research and Innovation (ICERI2020), pp.1671-1677, November 9-10 (遠隔発表)

- Kamiyama, S., Yamamoto, T., & Inagaki, S. (2021). Effects of mock lesson on pre-service teachers' beliefs regarding the introduction of argumentation into classes. Paper session presented at the International Organization for Science and Technology Education, Kyungpook National University, Daegu, KOREA. (遠隔発表)

4) 国内学会発表

- 高橋あおい・山口悦司・稲垣成哲 (2020) 「国立科学博物館における幼年期を対象とした展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」開発の指針」『日本理科教育学会全国大会発表論文集』第 18 号, p. 302.
- 高橋あおい・山口悦司・稲垣成哲 (2020) 「幼年期の科学教育に特化した国立科学博物館の展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」の理念と展示手法：親子のコミュニケーション促進を事例として」『日本科学教育学会第 44 回年会論文集』 pp. 421-422.
- 坂本美紀・山口悦司・山本智一・玉井僚馬・俣野源晃 (2020) 「科学技術の社会問題を取り上げた小学生向け教育プログラムの改善 (2)：提案型意思決定能力の獲得に関する評価」『日本科学教育学会第 44 回年会論文集』 pp. 467-468.
- 坂本美紀・山口悦司・山本智一・玉井僚馬・俣野源晃 (2020) 「科学技術の社会問題を取り上げた小学生向け教育プログラムの改善 (3)：科学に対する態度に関する評価」『日本教育心理学会第 62 回総会発表論文集』 p. 148.
- 高橋あおい・山口悦司・稲垣成哲 (2020) 「国立科学博物館の展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」における課題：親子のコミュニケーション促進を事例に」『日本理科教育学会近畿支部大会発表論文集 2020 年度』 p. 29.
- 神山真一・豊永結依・笹村里緒・山本智一・稲垣成哲 (2020) 「小学校理科教科書に記載された情報を活用したアーギュメント指導方略の検討」日本理科教育学会第 70 回全国大会 (2020 年 8 月 22 日・23 日) 岡山大学
- 神山真一・佐伯健太・山本智一・稲垣成哲 (2020) 「理科におけるアーギュメントの構成を阻害する要因：現職教員の主観的評価に着目して」日本科学教育学会第 44 回年会 (2020 年 8 月) 兵庫教育大学
- 山本智一・神山真一 (2020) 「アーギュメントの段階的指導をめざす教師教育プログラムの評価：適切かつ十分な証拠を利用するアーギュメントの評価能力に着目して」日本科学教育学会第 44 回年会 (2020 年 8 月) 兵庫教育大学
- 星川佳加 (連名) 「実習・実習指導を通じた保育士養成の現状と課題」日本保育学会第 73 回大会自由研究発表, 2020 年 5 月, 奈良教育大学ウェブ開催。
- 星川佳加 (連名・筆頭) 「実習・実習指導を通じた保育士養成の現状と課題 (2) — 『教育課程論』の在り方を中心に—」日本保育学会第 73 回大会自由研究発表, 2020 年 5 月, 奈良教育大学ウェブ開催。
- 星川佳加 (連名) 「実習における指導計画立案の現状と課題—教育課程論との授業連携

のあり方を中心に」日本保育学会第73回大会自由研究発表，2020年5月，奈良教育大学ウェブ開催。

- ・星川佳加「宮坂哲文の生活指導論に関する一考察——「仲間づくり」に焦点をあてて——」日本教育学会第79回大会自由研究発表，2020年8月，神戸大学ウェブ開催。
- ・助田弥央・北野幸子・大島菜苗・田中孝尚・松本法尊「好きな遊びの時間における一人ひとりの子どもの行動の実態—位置測位データを活用して—」2020年11月，日本乳幼児教育学会
- ・大島菜苗・北野幸子・田中孝尚・松本法尊・助田弥央「生活発表会を通じた子どもの育ちや学びと保育者の専門性について—K 幼稚園の生活発表会の実践を通して—」2020年11月，日本乳幼児教育学会
- ・藤掛絢子・北野幸子「小学校1年生の保護者は，幼稚園での音遊びをどのように認識しているのか—「音楽通信」を活用した家庭との連携の意義—」2020年12月，日本乳幼児教育・保育者養成学会
- ・松本圭朗「勝田守一の教育課程論に関する一考察」日本カリキュラム学会第31回大会，2020年6月，琉球大学ウェブ開催。
- ・瀬川千裕「今井誉次郎におけるリアリズム論の特質」日本教育方法学会第56回大会，2020年10月，宮崎大学ウェブ開催。
- ・瀬川千裕「今井誉次郎におけるロマンチズム論の検討——リアリズム論との関係をめぐって——」関西教育学会第72回大会，2020年11月16日～22日，神戸親和女子大学ウェブ開催。
- ・瀬川千裕「今井誉次郎の生活綴方論における目標」教育目標・評価学会第31回大会，2020年12月，宮城教育大学ウェブ開催。
- ・青木良太・新階幸也・稲垣成哲・溝口博・武田義明・楠房子（2020）「「里山管理ゲーム」における樹木情報の表示に関する評価」日本理科教育学会第70回全国大会（2020年8月）岡山大学。
- ・青木良太・新階幸也・稲垣成哲・溝口博・武田義明・楠房子（2020）「複数の里山に対応した「里山管理ゲーム」での情報探索の実態：得点の増減と視線移動との関連に着目した事例研究」2020年度日本理科教育学会近畿支部大会（2020年11月）神戸大学。
- ・高橋あおい（2020）日本理科教育学会近畿支部大会学生賞（2020年11月28日）
- ・青木良太（2020）日本理科教育学会近畿支部大会学生賞（2020年11月28日）

5) 受賞

- ・高橋あおい（2020）日本理科教育学会近畿支部大会学生賞（2020年11月28日）
- ・青木良太（2020）日本理科教育学会近畿支部大会学生賞（2020年11月28日）

（人間発達専攻長 稲垣成哲）

5.2.2. 人間環境学専攻

(1) 運営

専攻に関する意思決定は、例年どおり、人間環境学専攻運営会議において行った。本運営会議は、専攻長と各コースの主任の5名から構成される。今年度は、定例会議を6回開催し、予算配分、人事、入試、教務等に関わる重要案件を審議し、決定した。

今年度は、若手教員採用の学域方針に沿って、専攻としての人事運営方針を立てるため、9名(専攻長含)の委員からなる将来構想委員会を8回開催し、専攻全体会議も3回開催し、専攻の将来構想に関して議論を重ねた。人間環境学セミナーも4回開催し、研究内容の議論も行った。その結果として、助教採用人事の検討と選考を6件行った。2名の助教が2020年4月、1名の助教が2021年10月、1名の助教が2021年4月より採用が確定している。残り4件は学域会議において人事選考委員会の設置を認められ、現在、選考を進めている。

(2) 予算

各コースの学生の下記の所属人数に応じて配分した。(休学を0.5としてカウント)

	博士課程	
	前期	後期
自然環境論	35.5	10
数理情報環境論	9	
生活環境論	16.5	6
社会環境論	12.5	3.5

(3) 入試

前期課程入試ならびに後期課程入試とも2回行った。本年度は遠隔入試を実施した。前期課程入試(9月, 12月)では、試験区分ごとに専門科目について口述試験を行った。

後期課程入試(8月, 2月)に関しては、「受験生のプレゼンテーションに対し、主論文等審査委員と論文等審査委員が所見を述べ、各コースから口述試験委員が採点する」という方式を引き続き採用した。なお、後期課程入試I期は対面、II期は遠隔で行った。

博士後期課程入試については、応募者が定員を上回った。一方、博士前期課程入試については、定員を充足することができなかった。

(4) 教育

大学院生は修士論文、博士論文の作成を中心目標として勉学・研究を進めることから、学生に対する指導はそれぞれの指導教員に負うところが大きい。共通の教育として、博士前期課程1年生に対して、専攻共通科目「人間環境学相関研究」を行った。本年度は、通常に対面方式から遠隔授業へと大幅な変更が迫られたが、BEEFを活用することで滞りなく教育指導を行うことができた。この科目では、実践的な研究提案能力を養成するために、研究発表ならびに研究計画調書を作成させた。「大学院生のキャリア形成と文理融合」「研究マネジメントから見た研究者として知っておくべき基礎知識」という題目で計2名のゲストスピーカーからの講演を企画運営した。

(5) 広報

博士課程前期受験検討者に対し、オープンラボの期間が設けられ、受験相談を行った。博士課程前期オープンラボ実績 自然4名、生活2名であった。

(6) 学外研究者を招いての国際講演・シンポジウム等

本年度はなし

(7) 学生の受賞

専攻講座の大学生ならびに大学院生等が以下のように受賞した。

受賞者：酒井恵祐（人間環境学専攻博士課程前期課程2年，指導教員：大串健一）

賞の名称：学生発表賞ポスター学生部門

受賞対象：「最終氷期以降の北西太平洋における底生有孔虫の OMZ 変動に対する生物応答」

受賞年月：令和2年12月27日

受賞理由：日本第四紀学会2020年オンライン大会でのポスター発表が優秀であると評価されたため。

受賞者：嶋田仁（人間環境学専攻博士課程前期課程2年，指導教員：谷篤史）

受賞名：第30回日本MRS年次大会奨励賞

受賞対象：口頭発表「In-situ Monitoring of Tetra-n-butylammonium Bromide Semiclathrate Hydrate Formation Process by AC Impedance Method」

受賞日：令和3年1月18日

受賞理由：上記の口頭発表が優秀であると評価されたため

受賞者：森井沙衣子（人間環境学専攻博士課程後期課程2019年3月修了，現在，兵庫県立大学助教，当時の指導教員：白杉直子）

賞の名称：2020年度日本調理科学会 奨励賞

受賞対象：「炊飯における浸漬に関する研究」

受賞年月：令和2年5月18日

受賞理由：米の浸漬状態と炊飯後の米飯との関係性を追求するため研鑽を重ねた一連の研究成果が優秀であると評価され，今後の活躍が期待されるため。

受賞者：小畑芙優子（環境共生学科4年生，指導教員：太田和宏）

賞の名称：外務省第36回「国際問題プレゼンテーション・コンテスト」優秀賞

受賞対象：提言「日本のMANGAで世界を救う」

受賞年月：令和3年3月6日

受賞理由：国際問題プレゼンテーション・コンテストの共通論題「私の提言：今だからこそ

日本が世界のためにできること」に対し『日本の MANGA で世界を救う』と題する提言を行った。コロナ禍で深刻化する世界各国の献血不足問題を日本の漫画コンテンツ配信システムを用いた集客で解決するというアイデアの独創性と、その前提となる人間の行動分析が評価されたため。

(人間環境学専攻長 近江戸伸子)

6. 進路

6.1. キャリア形成支援

6.1.1. キャリアサポートセンター

人間発達環境学研究科キャリアサポートセンター（鶴2 CSC）は、発達科学部及び国際人間科学部の学部生と人間発達環境学研究科の大学院生を対象に、学生のキャリア形成を実践的にサポートする活動を行った。これらは、就職活動支援とキャリア形成支援の2つに大別される。以下、各支援活動に関し詳述する。

(1) 就職活動支援

例年通り、就職活動中の学生を対象に、下記の個別相談（カウンセリング）を行った。

- ・自己分析支援
- ・エントリーシート作成支援
- ・模擬面接
- ・就活・キャリアに関する相談
- ・大学院進学に関する相談

個別相談の総人数は410人であり、その内訳は、発達科学部：10人、人間発達環境学研究科：84人、国際人間科学部：292人、国際文化学部（院含む）：2人、理学部（院含む）：7人、文学部：9人、経営学部（院含む）：3人、工学部（院含む）：2人、農学部：1人、であった。

さらに、下記のセミナー・説明会を開催した。

- ・就職活動全般（就活スケジュール、自己PR、志望動機、業界・仕事研究、グループディスカッション練習会等）
- ・教員採用試験対策（公立、私立）
- ・自治体教育委員会による説明会
- ・心理・福祉職に焦点を当てた公務員試験対策

セミナーのタイトルは、下記の一覧を参照されたい。セミナーの総数は32で、総参加人数は703人であった。なお、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、前期に予定していた30件のセミナーを中止した。

上記に加え、今年度も、発達科学部・人間発達環境学研究科のOBOG訪問のアレンジ、大学推薦の求人票の案内、他大学の大学院募集情報の案内を行った。

また、昨年度と同様、「内定者獲得紹介システム」を運用した。本紹介システムは、鶴2CSC

の仲介により、就職先の内定獲得あるいは合格を果たした発達科学部・人間発達環境学研究所に在学中の学生に対し、同じ就職先を志望する学生が直接会って、当該就職先に向けての就職活動に関する情報（例えば、具体的な採用選考内容）を得ることを目的とするものである。具体的な実績値は以下の通りである。

- ・内定獲得者の登録人数：87
- ・内定先（企業か官公庁等）の数：156
- ・下級生（就活生）の登録人数：30
- ・面談回数：40

(2) キャリア形成支援

- ①前述の個別相談で個々の学生に対し、進路・キャリアに関するカウンセリングを継続的に実施した。
- ②人間発達環境学研究所に所属する外国人留学生に対し、教員と連携し、鶴2CSCで実施している就活支援内容のガイダンスを行った。

【今年度開催したセミナー一覧】※すべてオンラインで実施

1. 4月24日（金）キャリア教育「国際人間科学部3年生限定プレミアムセミナー」
2. 4月28日（火）キャリア教育「国際人間科学部3年生限定プレミアムセミナー」
3. 9月23日（水）キャリア教育「夏休みオンラインキャリアセミナー・発達コミュニティ」
4. 9月25日（金）キャリア教育「夏休みオンラインキャリアセミナー・環境共生」
5. 9月28日（月）キャリア教育「夏休みオンラインキャリアセミナー・子ども教育」
6. 9月29日（火）キャリア教育「夏休みオンラインキャリアセミナー・グローバル文化」
7. 10月6日（火）就職活動支援「就職活動スタートアップ講座」
8. 10月14日（水）就職活動支援「業界／企業研究」
9. 10月19日（月）就職活動支援「エントリーシート の書き方」
10. 11月5日（木）教員採用試験対策「神戸市教育委員会教採セミナー」
11. 11月10日（火）就職活動支援「説明会を活用した”超”仕事研究講座」
12. 11月11日（水）就職活動支援「業界研究セミナー（専門商社）」
13. 11月13日（金）教員採用試験対策「スタートガイダンス」
14. 11月16日（月）就職活動支援「動画面接・動画選考対策講座」
15. 11月17日（火）教員採用試験対策「京都府教育委員会教採セミナー」
16. 11月19日（木）教員採用試験対策「私立学校教員」
17. 11月25日（水）公務員試験対策「心理・福祉系公務員，家裁調査官を目指そう」
18. 11月26日（木）就職活動支援「各業界の現状と課題を知る！業界・企業研究講座＜発展編＞」
19. 11月30日（月）教員採用試験対策「大阪府教育委員会教採セミナー」
20. 12月4日（金）公務員試験対策「大阪府福祉専門職説明会」

21. 12月7日(月) 就職活動支援「今だからできる就職活動準備講座(国人2年生向け)」
22. 12月16日(水) 就職活動支援「社会人基礎力と働く心がまえ(国人2年生向け)」
23. 1月7日(木) 就職活動支援「自己分析入門(国人2年生向け)」
24. 1月18日(月) 就職活動支援「GD練習会」
25. 1月20日(水) 就職活動支援「民間企業と公務員の違い(国人2年生向け)」
26. 1月22日(金) 教員採用試験対策「私立学校教員」
27. 1月26日(火) 就職活動支援「GD練習会」
28. 1月27日(水) 就職活動支援「面接対策講座」
29. 1月28日(木) 公務員試験対策「家庭裁判所調査官の仕事を知る」
30. 1月29日(金) 就職活動支援「業界研究(カーエレクトロニクス)」
31. 2月10日(水) 就職活動支援「GD練習会」
32. 2月19日(金) 就職活動支援「GD練習会」

実績の数字は、全て2月25日時点の値。

(キャリアサポートセンター運営委員会委員長 澤宗則)

6.1.2. 学振特別研究員申請支援

学生委員会の主催の「学振特別研究員への応募のススメ」と題したセミナーを令和2年4月15日(水)にZoomによるWeb開催で実施した。

まずは、青木茂樹研究科長より特別研究員制度の概要についての説明、ついで佐藤春実教授より審査委員経験を踏まえた申請書作成などに関するアドバイスがなされた。その後、人間発達環境学研究科で採用されている特別研究員2名により、採用に至る経験談や申請や審査に関わる留意点などの紹介がなされた。Zoomによるセミナー参加者は講演者を含めて23名であった。参加者から、申請書の書き方やヒアリング時の自己PRの方法に関して活発な質疑応答が行われた。また、本学学術研究推進室(URA)の平田充宏氏によるZoom個別面談が5月11日～15日の間で行われた。個別面談希望者は14名と多くの応募があった。なお、令和3年度特別研究員DC採用者は、新規で6名(DC1が3名、DC2が3名)、RPDが1名であった。DC採用者の内3名はセミナー・ワークショップ参加者であった。ZoomによるWeb開催であったが、参加者も多く、その後の個別面談も好評であった。

○「学振特別研究員への応募のススメ」

・日時:4月15日(水)13時00分～14時30分 ・ZoomによるWeb開催

13:00 - 13:10 開会の辞(学生委員長 佐藤春実)

プログラムの説明と講師紹介(学生委員長 佐藤春実)

13:10 - 14:25 特別研究員制度の概要と本研究科の現状(研究科長 青木茂樹 教授)

審査・選考の実際-審査経験者の立場から(佐藤春実 教授)

(質疑応答)

申請の実際-応募者の立場から(1) (人間環境学専攻社会環境論コース)
申請の実際-応募者の立場から(2) (人間環境学専攻自然環境論コース)
(質疑応答)

URAの支援による「Zoom個別面談」の案内

14:25 閉会の辞

(学生委員会委員長 佐藤春実)

6.2. 卒業・修了後の進路

令和2年度の発達科学部卒業生・国際人間科学部卒業生の就職状況は、概ね良好であった。博士課程前期課程修了生も企業や公務員への就職者数や進学者数は例年通りであった。博士課程後期課程は学部や博士課程前期課程と異なり、公募による就職が主となるため年度毎に様相が異なるが、令和2年度の就職内定者が3名であった。なお、進路状況、産業別就職者数、大学院進学者数などの詳細は『資料編』に記載した。

(学生委員会委員長 佐藤春実)

7. 研究

7.1. 今年度の特長

7.1.1. 研究動向

(1) 本研究科教員の研究活動

本研究科における過去6年間の研究活動の実績は、下表のとおり、概ね順調に推移してきている。令和2年度の活動(KUIDをもとに調査)は、「論文」326件、「著書」63件となり、ここ数年の値と同等であるが、「研究発表等」については新型コロナウイルスの影響と思われるが282件と例年の3分の2程度にとどまった。

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
論文	311	371	396	310	319	326
著書数	75	73	67	79	53	63
研究発表等	419	547	432	474	440	282

(2) 研究科ミッションの実現に向けた共同研究への支援

本研究科では、研究科のミッションの実現に向けた研究の推進・発展を図ることを目的として、「研究推進支援経費」を継続的に設定してきた。

すなわち、複雑・重層化する国内外の社会的課題を克服し、多世代・多様な人々の安全・安心で豊かな生活(well-being)を実現するためには、課題解決の基盤となるコミュニティにおける社会関係資本(社会的ネットワークにおける人間関係や信頼関係、社会的結束力)の構築や持続可能な環境共生社会の形成が急務である。このことを踏まえ、「研究

推進支援経費」は、人間発達環境学研究科がこれまで蓄積してきた研究教育活動の成果を活かした先端的かつ独創的な研究（人間発達環境学研究科の機能強化に資する研究）をより一層推進することを目的として、領域横断的型プロジェクト研究や文理融合型プロジェクト研究、国際共同研究に重点配分するとともに、若手教員による積極的な申請を奨励した。

令和2年度に研究推進委員会にて選定した共同研究は、以下のとおりである。

- ① 研究課題：Effect of COVID-19 on older adults: Risk perception, behavior and well-being among three Asian countries

研究代表者：片桐 恵子

共同研究者：増本 康平，岡田 修一，近藤 徳彦，長ヶ原 誠，原田 和弘，平山 洋介，井上 真理，齊藤 誠一，田畑 智博，村山 留美子，Soondool Chung, Vivian Lou

決 定 額：1,000 千円

- ② 研究課題：新型コロナウイルス・パンデミックによる人々の行動・生活環境変化の実態調査とポストコロナ社会での well-being 支援—こころのケア-遠隔（オンライン）による心理支援の実態—

研究代表者：伊藤 俊樹

共同研究者：山根 隆宏，安達 友紀，加藤 佳子，津田 英二，長坂 耕作，吉田 圭吾，河崎 佳子，相澤 直樹

決 定 額：600 千円

- ③ 研究課題：新型コロナウイルスの感染拡大下での都市の生態系サービスとその評価

研究代表者：丑丸 敦史

共同研究者：佐藤 真行，源 利文，平山 洋介，片桐 恵子，村山 留美子

決 定 額：1,000 千円

（人間発達環境学研究科長 青木茂樹）

7.1.2. 学生の受賞

令和2年度における大学院生の受賞は以下の通りである。

- 1) 受賞者：青木良太（人間発達専攻博士課程前期課程2年）

賞の名称：日本理科教育学会近畿支部大会学生賞

受賞対象：複数の里山に対応した「里山管理ゲーム」での情報探索の実態：得点の増減と視線移動との関連に着目した事例研究

受賞年月：2020年11月28日

2) 受賞者：高橋あおい（人間発達専攻）

賞の名称：日本理科教育学会近畿支部大会学生賞

受賞対象：国立科学博物館の展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」における課題：親子のコミュニケーション促進を事例に

受賞年月：2020年11月28日

3) 受賞者：酒井恵祐（人間環境学専攻博士課程前期課程2年）

賞の名称：学生発表賞ポスター学生部門

受賞対象：「最終氷期以降の北西太平洋における底生有孔虫のOMZ変動に対する生物応答」

受賞年月：令和2年12月27日

受賞理由：日本第四紀学会2020年オンライン大会でのポスター発表が優秀であると評価されたため。

4) 受賞者：嶋田仁（人間環境学専攻博士課程前期課程2年）

賞の名称：第30回日本MRS年次大会 奨励賞

受賞対象：口頭発表「In-situ Monitoring of Tetra-n-butylammonium Bromide Semiclathrate Hydrate Formation Process by AC Impedance Method」

受賞日：令和3年1月18日

受賞理由：上記の口頭発表が優秀であると評価されたため

（学生委員会委員長 佐藤春実）

7.2. 学術 WEEKS

学術 WEEKS は、平成 20 年より大学院 GP(正課外活動の充実による大学院教育の実質化)を契機とし、本研究科の国際交流推進の一環として実施されている。学術 WEEKS2020 にあっても、これまでの基本方針を継承し、国内外の学術交流活動を通して、大学院生・学部学生の視野を広げ、研究会の企画・運営・発表などの技能習得に資することを目的とした。また、多様な研究領域を擁する本研究科の特色を生かし、教員・大学院生・学部学生を交えた領域横断的な学術交流の場を提供するものである。

本年度は新型コロナウイルスが流行し、例年のような対面での企画の実行が不可能であったため、企画件数は減少した。しかしながら、オンラインの特徴をいかしたグローバルな視点での企画、アーカイブ配信の企画、また、コロナ禍に関する企画も実施され、企画者の工夫によって、これまでとは異なる新たな形態での企画の可能性が示された点は評価できる。個別の企画内容に関しては以下を参照していただきたい。

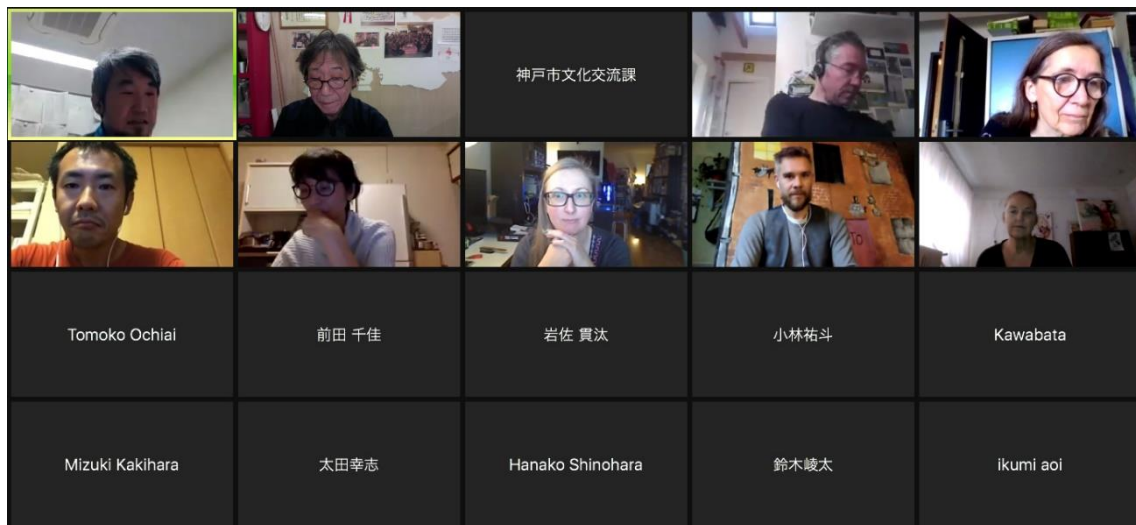
（学術 WEEKS2020WG 主査 増本康平）

7.2.1 学術 WEEKS の各事業・セミナー

(1) ギャラリー・ヘロルド・ブレイメン：地域とアーティスト・コミュニティ

【日程】2020年10月22日（木）17:50～19:20 【参加者】約30名

【概要】ブレーメン中央駅の隣にある巨大アートハウス、ギューターバンホフにはアトリエ、劇場、ボルダリングジムやアートギャラリーなどが集まり、独自のコミュニティを形成している。この企画では、ブレーメン（朝）と神戸（夜）をリアルタイムでつなぎ、ギューターバンホフとギャラリー・ヘロルドの運営に関わる2人のドイツ人アーティスト、ノーベルト・パウアー氏、マリオン・ボーゼン氏を迎え、彼らのコミュニティとギューターバンホフの仕組みについて報告してもらった。神戸からは神戸のC.A.P（芸術と計画会議）代表の下田展久氏と、神戸大学の学生が参加し、活発なディスカッションが行われた。



（人間発達専攻 野中哲士）

(2) Where there is a will, there is a way: Current status and issues of education in England（意志あるところに道は開ける：イギリスの教育の現状と課題）

講演会・対談

【日程】2020年11月15日（日） 日本時間21:00～24:30

【参加者】約71名（日本側48名、イギリス側23名）

【概要】パンデミックの状況であったが、多くの方がオンライン研究会に親しむようになったという利点を生かし、日英両国で参加を呼びかけ、Google Meet上で開催した。司会はイギリス側から Junko Hotsuki Grant氏が、日本側から勝治友紀子氏（人間発達専攻博士課程前期課程）が、コーディネーターは川地が務めた。運営は勝治を含む院生6名で行った。第1部講演「ロンドン補習授業校での国語教育の実践を通じて」では、年間40回の日本語（「国語」）の授業について、継承語の教育として日本語学習への動機を重視していること、他者への共感（「怒（じょ）」）を基本に置いていることが語られた。第2部対談「イギリスのメインストリームの学校におけるインクルージョンの経験」では、イギリスにおける地域の学校でのインクルージョンの実態や教員の関わりについて語られた。質疑応答では、場所を共有すればそれではよいのではなく、一人一人が互いに協力することの重要性や、平等と公正、障害の社会モデルについて議論を深め、実り多い会合となった。

なお、第1部講演については録画視聴希望があり、後日視聴会を開催した（12月13日、12名参加）。加えて、企画者の院生を中心に記録をまとめ「意志あるところに道は開ける：ロンドン補習授業校における国語教育—学術Weeks2020シンポジウム報告—」として『教育科学論集』第24号（2020年度末刊行予定）に掲載し、神戸大学学術成果リポジトリKernelにおいて公開予定である。

（人間発達専攻 川地亜弥子）

（3）高校生・私の科学研究発表会 2020

【日程】11月23日【参加者】89名（高校生58名、高校教員13名、大学関係者11名（うち学生8名）、その他7名）

【概要】科学課題研究に取り組む高校生に対して、サイエンスショップと兵庫県生物学会との共催により、研究発表・交流会を開催した。今回は、新型コロナウイルス感染症への対応として、オンラインにより実施した。この会は、高等学校における研究・探求活動の発展を支援するとともに、サイエンスショップの理念である市民の科学に関わる活動の広がりにつなげることを目的としている。高校生による発表は23件で、事前に音声記録されたプレゼンテーションの動画ファイルの提出を求め、当日はそれを再生した後に、質疑応答を行った。

参加高等学校は13校で、内訳は兵庫県から8校、大阪府3校、岡山県2校であった。発表内容は、生物、地学、物理、化学、環境、生活科学など多領域にわたり、発表に対して高校生同士の質疑応答や、高校・大学の教員、大学生などから質問や助言がなされた。なお、サイエンスショップより、生物分野以外の領域の優れた発表として、兵庫県立姫路東高等学校の「自作の高い分解能をもつ簡易分光器による電子レンジプラズマの分光」に優秀賞が授与された（生物分野については兵庫県生物学会が表彰した）。

（人間環境学専攻 伊藤真之）

（4）寿命観と貯蓄行動

【日程】2020年11月27日【参加者】30名

【概要】新型コロナウイルスの流行に伴い、多くの人々の生活・消費パターンが変わったが、寿命観の変化についてはあまり注目されていない。貯蓄は大きく経済成長に影響するため、貯蓄行動の変化は、マクロ経済成長に大きな影響を及ぼす。本企画では、主観的余命の貯蓄行動への影響について、経済学、心理学の観点から情報共有し、今後の研究に向けて議論をおこなった。衣笠智子氏（神戸大学大学院経済学研究科）、安田公治氏（青森公立大学）には、経済学の視点からライフサイクル理論に基づいた主観的余命と貯蓄行動についての話題提供を、企画者の増本から、高齢期の主観的余命が人の判断や意思決定にどのような影響を及ぼすのか話題提供を行った。その後、出席者を交えて、本テーマにおける経済学と心理学の学際研究への発展の可能性について議論した。

（人間発達専攻 増本康平）

(5) 自閉スペクトラム症と知的障害で「私」の発達は異なるのか？ ～心理療法と発達研究の視点から～

【日程】2020年12月6日13:00～15:00（オンライン開催）

【参加者】約120名

【概要】当日は岐阜大学の松本拓真氏、東海大学の中島由宇氏、奈良女子大学名誉教授の浜田寿美男氏をお招きし、話題提供とディスカッションを行った。心理職や福祉職、大学院生など合計120名ほどが参加した。知的障害者と自閉症者の抱える「私」や自己を巡る様々な問題や、その違いや共通性などについて話題提供があり、浜田氏より自己の発達や発達心理学の観点から指定討論があった。知的障害者や自閉症者の主体が軽視されてしまいやすい問題や同調的な関わりが彼ら彼女らの主体を脅かしてしまう危険性をはらむものであるなどが議論された。知的障害や自閉症における「私」や自己に関して、今後の臨床実践や研究の方向性について、参加者を交えて議論することができた。

（人間発達専攻 山根隆宏）

(6) オンラインならではの音楽・アートの発信方法の実践

【日程】2021年2月27日（土）15:00～ YouTubeにて生配信

配信アカウントおよびアーカイブ：

<https://www.youtube.com/user/tanimasato>

コロナ禍で苦しむ音楽家やアーティストたちの新しい表現方法として、音楽やアートの魅力をライブ配信ならではの方法で発信するための実験的な場を学生とともに企画した。生演奏では視聴不可能なアングルに加え、そこに写真やライブペインティング、舞踊とのコラボレーションをスイッチングマシーンにて様々な切り替えながら魅せてゆく手法について多くを考え学ぶことができる機会となった。生配信では30人以上が視聴し、アーカイブの再生回数は300回を超えた（2021/03/19時点）。youtubeのチャット機能を使い質疑応答も行った。全てアーカイブから確認できる。

（人間発達専攻 谷正人）

7.3. 研究科支援プロジェクト研究

(1) Effect of COVID-19 on older adults: Risk perception, behavior and well-being among three Asian countries

1. 研究目的の概要 全世界的な広がりを見せるCOVID-19は様々な対象に多面的な影響が指摘されている。本研究はCOVID-19の感染リスクと下げるために外出自粛等の強く求められている不活発な日常が高齢者に与える影響について国際比較研究を行う。

2. 研究組織

① 代表者 片桐恵子（人間発達専攻）社会老年学・社会心理学

② 共同研究者 増本康平（人間発達専攻）認知心理学

岡田修一（人間発達専攻）身体運動科学

近藤徳彦（人間発達専攻）応用生理学
長ヶ原誠（人間発達専攻）レジャー・スポーツ老年学
原田和弘（人間発達専攻）老年行動学
平山洋介（人間環境学専攻）生活空間計画
井上真理（人間環境学専攻）衣環境学・感性工学
齊藤誠，（人間発達専攻）発達心理学
田畑智博（人間環境学専攻）環境システム工学
村山留美子（人間発達専攻）環境リスク学・環境保健学
Soondool Chung (Ewha Womans University, Ewha Institute for Age
Integration Research) 社会福祉学
Vivian Lou (The University of Hong Kong, Sau Po Centre on
Ageing) 社会福祉・社会政策

3. 研究実績の概要

① 調査フレームワークの作成・調査項目の作成

文献レビューと電子メール・Web ミーティングによる協議を行い、COVID-19 に関連する高齢者のリスク認知と行動変化などに関する調査フレームワークを策定した。

② 調査の実施・データ収集

日本、ソウルは調査を実施，香港は調査を開始し現在も継続中である。

③ 研究成果発表

神戸アクティブエイジング研究センター主催，神戸大学国際交流促進事業助成金，日本心理学会研究集会助成金を得て，国際シンポジウム (online) “COVID-19 and the older adults in Asia” を実施し，研究成果発表を行った。④ 日本学術振興会の研究拠点形成事業に申請をした。

(研究代表者 片桐恵子)

(2) 新型コロナウイルス・パンデミックによる人々の行動・生活環境変化の実態調査とポストコロナ社会での well-being 支援—こころのケア-遠隔 (オンライン) による心理支援の実態—

1. 研究目的の概要

本研究の目的は，新型コロナウイルス感染症が心理支援に与える影響を実態調査し，それをもとにしたポストコロナ社会での人々の well-being を支援する方法を検討することである。具体的には，コロナ禍における遠隔通信技術を用いたカウンセリングや心理支援等の実態と可能性を検討するものである。

2. 研究組織

① 代表者 伊藤俊樹（人間発達専攻）臨床心理学

② 共同研究者 山根隆宏（人間発達専攻）発達障害児家族支援
安達友紀（人間発達専攻）臨床心理学

加藤佳子（人間発達専攻）健康心理学
津田英二（人間発達専攻）生涯学習論
長坂耕作（人間環境専攻）計算機代数
吉田圭吾（人間発達専攻）臨床心理学
河崎佳子（人間発達専攻）発達臨床心理学
相澤直樹（人間発達専攻）臨床心理学

3. 研究実績の概要

① 調査フレームワークの作成・調査項目の作成

- (1) オンラインミーティングによる協議を行い、遠隔心理支援の実態調査に関する調査項目を作成した。
- (2) オンラインカウンセリングを実施している臨床心理士・公認心理師に行う構造化面接のインタビュー項目を作成した。

② 調査の実施・データ収集

- (1) 各地域の臨床心理士会等を通してメールを送付し、オンライン調査への回答を依頼し、データを収集した。
- (2) 15名の臨床心理士・公認心理師にインタビューを行った。

③ データ統合・分析

- (1) オンライン調査により得られたデータを集約し、統計的な分析をおこなった。
- (2) インタビュー調査によって得られた結果を質的に分析した。

④ 研究成果発表

心理学の国際会議 32nd International Congress of Psychology 2021 で量的研究・質的研究ともに研究成果を発表予定である。また、量的研究は「人間発達環境学研究科紀要」に、質的研究は「教育メディア研究」に投稿予定である。

⑤ 大型科研費を含む複数の科研費の申請

コロナ禍での遠隔心理支援に関する国際共同比較研究を行うため、科研費の国際共同研究強化 (B) に申請予定である。

(研究代表者 伊藤俊樹)

(3) 新型コロナウイルスの感染拡大下での都市の生態系サービスとその評価

1. 研究目的の概要

2020年の4-5月に新型コロナウイルスによる緊急事態宣言が発令された中で、個々人の活動制限とくに長距離移動を制限され、商用施設などの利用なども自粛が必要となる状況下において、身近な自然(自宅から歩いてアクセスできる距離にある自然)の生態系サービス(ここでは文化サービス)は、平時比べて増加するという仮説を立て、その検証を社会(調査アンケート調査)のデータ解析から行うことを目的とした。解析では、どのような人が、よりこれらの生態系サービスを求めているのかも明らかにすることも目的とした。

2. 研究組織

- ①代表者 丑丸敦史（人間環境学専攻）都市生態学
- ②共同研究者 佐藤真行（人間環境学専攻）環境経済学
源利文（人間環境学専攻）水域生態学
平山洋介（人間環境学専攻）都市計画学
片桐恵子（人間発達専攻）社会心理学
村山留美子（人間環境学専攻）環境保健学

3. 研究実績の概要

- ①本プロジェクト構成メンバーの佐藤を代表とし、同一の研究課題で神戸市の研究助成「大学発アーバンイノベーション神戸」に応募し、採択され、さらなる研究予算を獲得した。
- ②研究支援経費と神戸大学先端融合研究環開拓プロジェクトの研究費、大学発アーバンイノベーション神戸の研究費を合わせて利用し、神戸市、東京23区、大阪市、横浜市の市民を対象に、緊急事態宣言下での山、海、川、農地、都市緑地の利用状況に関するWebアンケート調査を外部の調査会社に委託し、実施した。
- ③11月中旬にアンケート調査結果を得て、4-5月の緊急事態宣言下の生態系利用の変化、緊急事態宣言解除の利用状況の変化、どのような個人特性が生態系利用の頻度と関係しているのか解析を行った。
- ④研究成果は、山の利用、海・川の利用、農地・都市緑地の利用に関する論文、また緊急事態宣言下の心身と生態系利用と関係についての論文等に分割し、学術雑誌に投稿することを予定している。
- ⑤本研究課題に関する研究課題で、科研費（基盤研究（B）（一般））へ応募した。

（研究代表者 丑丸敦史）

7.4. 高度教員養成プログラム

2013年に教育連携推進室の開設以降、その開発研究部門において高度教員養成プログラムを企画・運営している。本プログラムは、グローバル化する知識基盤社会において、教育実践のアクション・リサーチを含む理論的・実践的研究に主導的に携わり、かつ、国際的にも通用する高度な教育能力および研究能力を備えた教員養成を行うことを目的とし、本学附属学校部と連携しながら実施した。参加者は人間発達環境学研究科博士課程前期課程の大学院生であり、教員専修免許取得希望者6名が参加し、また博士課程後期課程の大学院生5名がサポーターとして参入した。なお、例年は6月からの開始となるが本年度は新型コロナウイルス感染拡大をうけて、10月から7回のセミナーを実施した。なお、7回のうち、6回は遠隔（Zoom）による開催、1回は面談による開催となった。（セミナー報告の詳細は次のサイトにある。<https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/6251>）参加院生には不十分ながら国内学会等への参加発表支援を当該プログラム予算から行った。参加院生の研究業績は、学術論文9編（審査付き7編）学会発表14件、受賞1件であった。

(1) 高度教員養成プログラムセミナー

第1回 高度教員養成プログラムへ参加するために：附属学校部と大学院人間発達環境学
研究科の連携による本プログラムに関するガイダンス

講師 山口 悦司，本学附属学校部担当者

日時 2020年10月9日（金）15:10～16:40

会場 遠隔（Zoom）

第2回 幼小接続期の子どもの「数」の認識に基づく援助・指導を考える

講師 中橋 葵（京都文教大学・講師）

日時 2020年11月13日（金）17:00～18:30

会場 遠隔（Zoom）

第3回 教育実践につながる基礎研究の位置づけの工夫

講師 辻 弘美（大阪樟蔭女子大学・教授）

日時 2020年12月3日（木）13:00～14:30

会場 遠隔（Zoom）

第4回 子どもの足脚部の発育発達と障害

講師 上田 恵子（畿央大学・准教授）

日時 2020年12月4日（金）16:30～18:00

場所 遠隔（Zoom）

第5回 特別支援学校の進路指導の蓄積と課題

講師 平井 威（明星大学・客員教授）

コメンテーター 黒川 陽司（神戸大学附属特別支援学校・教諭）

日時 2020年12月28日（月）13:00～15:00

場所 F264（対面開催）

第6回 変動する大学入試：資格か選抜か

講師 伊藤 実歩子（立教大学・教授）

日時 2021年1月22日（金）15:10～16:40

会場 遠隔（Zoom）

第7回 リサーチ報告会

講師 西森 年寿（大阪大学・教授）

日時 2021年2月5日（金）17:00～19:00

会場 遠隔（Zoom）

(2) 学術論文

1. Aoki, R., Shingai, Y., Inagaki, S., Mizoguchi, H., Takeda, Y., Kusunoki, F., Yamaguchi, E., Funaoi, H., & Sugimoto, M. (2020). The “Satoyama Management Game” for Teaching about the Conservation of the Satoyama Environment: User Evaluation with Elementary School Students Based on Eye Tracking. In Proceedings of EdMedia + Innovate Learning (pp. 663-668). Online, The

Netherlands: Association for the Advancement of Computing in Education (AAACE). [査読付]

2. 神山真一 (2020) 「アーギュメントを理科授業に導入することに対する教師の信念に影響する要因の検討: McNeill らの研究に着目して」『理科教育学研究』第 61 巻, 第 2 号, 193-205. [査読付]
3. 神山真一・山本智一・稲垣成哲 (2020) 「教員志望大学生のアーギュメント指導に対する信念に影響する要因の検討: アーギュメントを小学校理科授業に導入するための学修プログラムを通して」『理科教育学研究』第 61 巻, 第 1 号, 31-44. [査読付]
4. 川地亜弥子・勝冶友紀子 「教育・子育て支援に関する日英比較オンライン研修: GSP の教育目標分析に基づくプログラム開発」『教育科学論集』第 24 号. [査読なし]
5. 川地亜弥子・勝冶友紀子・眞藤拳・西あかね・蓑毛智樹・岸本佳奈美・徐楽瑤 (印刷中) 「意志あるところに道は開ける: ロンドン補習授業校における国語教育一学術 Weeks2020 シンポジウム報告一」『教育科学論集』第 24 号. [査読なし]
6. 侯野源晃・山本智一・山口悦司・坂本美紀・神山真一 (印刷中) 「複数の証拠を利用するアーギュメント構成能力の育成: 小学校第 5 学年「電流がつくる磁力」の事例」『理科教育学研究』第 62 巻, 第 1 号. [査読付]
7. 松本圭朗 (2020) 「教育的なるもの, あるいは政治的なるものとしての教育的価値: 勝田守一の教育的価値論に着目して」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 14 巻, 第 1 号, 27-36. [査読付]
8. 下村岳人 (2020) 「算数科授業における数学的知識の構成にみる協定の特徴に関する一考察: Searle の言語行為論に基づく交渉を捉える記述枠組みの構築」『数学教育学論究』第 101 巻, 114 号, 3-17. [査読付]
9. 下村岳人・岡部恭幸・下村勝平 (印刷中) 「数学的知識の協定過程における数学的交渉にみる発言の意図に関する一考察: 第 6 学年「分数の除法」単元を事例として」『科学教育研究』第 44 巻, 第 4 号. [査読付]

(3) 学会発表

1. 青木良太・新階幸也・稲垣成哲・溝口博・武田義明・楠房子 (2020) 「「里山管理ゲーム」における樹木情報の表示に関する評価」日本理科教育学会第 70 回全国大会 (2020 年 8 月 22 日・23 日) 岡山大学 [査読なし]
2. 青木良太・新階幸也・稲垣成哲・溝口博・武田義明・楠房子 (2020) 「複数の里山に対応した「里山管理ゲーム」での情報探索の実態: 得点の増減と視線移動との関連に着目した事例研究」2020 年度日本理科教育学会近畿支部大会 (2020 年 11 月 28 日) 神戸大学 [査読なし]
3. Kamiyama, S., Yamamoto, T., & Inagaki, S. (2021). Effects of mock lesson on pre-service teachers' beliefs regarding the introduction of argumentation into classes. Paper session presented at the International Organization for

Science and Technology Education, Kyungpook National University, Daegu, KOREA. [査読付]

4. 神山真一・豊永結依・笹村里緒・山本智一・稲垣成哲 (2020) 「小学校理科教科書に記載された情報を活用したアーギュメント指導方略の検討」日本理科教育学会第70回全国大会 (2020年8月22日・23日) 岡山大学 [査読なし]
5. 神山真一・佐伯健太・山本智一・稲垣成哲 (2020) 「理科におけるアーギュメントの構成を阻害する要因：現職教員の主観的評価に着目して」日本科学教育学会第44回年会 (2020年8月25日) 兵庫教育大学 [査読なし]
6. 松本圭朗 (2020) 「勝田守一の教育課程論に関する一考察」日本カリキュラム学会第31回研究大会 (2020年6月28日発表) 琉球大学 Web 開催 [査読なし]
7. 大島菜苗・北野幸子・田中孝尚・松本法尊・助田弥央 (2020) 「生活発表会を通じた子どもの育ちや学びと保育者の専門性について—K 幼稚園の生活発表会の実践を通して—」日本乳幼児教育学会第30回大会研究発表 (2020年11月14日公開) オンライン開催 [査読なし]
8. 瀬川千裕 (2020) 「今井誉次郎におけるリアリズム論の特質」日本教育方法学会第56回大会 (2020年10月10日発表) 宮崎大学 [査読なし]
9. 瀬川千裕 (2020) 「今井誉次郎におけるロマンチズム論の検討」関西教育学会第72回大会 (2020年11月16日～11月22日発表) 神戸親和女子大学 [査読なし]
10. 瀬川千裕 (2020) 「今井誉次郎の生活綴方論における目標」教育目標・評価学会第31回大会 (2020年12月13日発表) 宮城教育大学 [査読なし]
11. 助田弥央・北野幸子・大島菜苗・田中孝尚・松本法尊 (2020) 「好きな遊びの時間における一人ひとりの子どもの行動の実態—位置測位データを活用して—」日本乳幼児教育学会第30回大会研究発表 (2020年11月14日・15日発表) オンライン開催 [査読なし]
12. 戸川晴菜 (2020) 「小学校算数「速さ」の理解に関する研究」近畿数学教育学会第69回例会ポスター発表 (2021年2月6日発表) オンライン開催 [査読なし]
13. 山本智一・神山真一 (2020) 「アーギュメントの段階的指導をめざす教師教育プログラムの評価：適切かつ十分な証拠を利用するアーギュメントの評価能力に着目して」日本科学教育学会第44回年会 (2020年8月25日) 兵庫教育大学 [査読なし]
14. 南原圭吾，國土将平 (2021) 「運動におけるリズム 力測定のためのリズムジャンプの提案」日本発育発達学会第19回大会 (2021年3月13日・14日発表) オンライン開催 [査読あり]

(4) 受賞

1. 青木良太 (2020) 日本理科教育学会近畿支部大会学生賞受賞，2020年度日本理科教育学会近畿支部大会，2020年11月28日表彰，対象研究：複数の里山に対応した「里山管理ゲーム」での情報探索の実態：得点の増減と視線移動との関連に 着目した事例研

究.

(教育連携推進室長 國土将平)

7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続研究

「神戸大学ー附属中等教育学校高大接続研究」

神戸大学が、「グローバルキャリア人の育成」を教育目標に掲げる附属中等教育学校を活用した高大連携・接続の在り方に関して行う研究に対し、人間発達環境学研究科の教員が積極的に協力した。具体的な連携事業としては、「根源を問い革新を生む国際的科学技術人材育成挑戦プログラム (ROOT プログラム)」といった人間発達環境学研究科が実施するグローバルな課題に関するプログラム等に、附属中等教育学校生徒に参画 (参加) してもらった。

また、附属中等教育学校生徒が卒業研究として取り組む「課題研究」に、SS 研究アドバイザーである人間発達環境学研究科の教員が、研究の進め方や分析のしかたについての助言や講評などを行った。さらに、附属中等教育学校の数学科校内研究会に、人間発達環境学研究科の教員が授業見学と指導助言を行った。その他に、人間発達環境学研究科の教員の科学研究費 (基礎研究 (B)) に研究分担者として、「ヒューマンコミュニティ創成研究 A」「同 B」の授業に協力者として、それぞれ附属中等教育学校の教員が参加した。さらに、ヒューマン・コミュニティ創成研究センター・サテライト施設の「のびやかスペースあーち」で、人間発達環境学研究科の教員と附属中等教育学校の栄養教諭がそれぞれの専門性を生かした話題提供やプログラムを行っている

(神戸大学附属中等教育学校 SS 研究アドバイザー 林創)

7.6. 研究推進

7.6.1. 研究推進委員会

本委員会は研究科長，副研究科長，専攻長，発達科学部学科長及びその他研究科長が必要と認めた者として国際人間科学部学科長 (グローバル文化学科長を除く) を加えた 10 名で構成され、研究科における共同研究の推進，研究シーズの発見と育成，外部資金の獲得に向けた組織的対応等について議論を行った。

令和 2 年度の検討事項は以下のとおりである。

	検討事項
第 1 回(4 月 3 日)	1. 令和 2 年度研究支援経費について 2. 令和 2 年度科研採択数について 基盤研究 A・B・C，若手研究，挑戦的研究 3. 学振特別研究員 DC の申請支援の取り組みについて
第 2 回(5 月 1 日)	1. 2019 年度研究支援経費報告書 2. 学振特別研究員 DC の申請支援の取り組みについて
第 3 回(6 月 5 日)	1. 令和 2 年度「研究支援経費」応募にかかる審査について

	2. 平成 30 年度研究支援経費 成果報告書について
第 4 回(9 月 11 日)	1. 科研費申請に向けて 2. 大学発アーバンイノベーション神戸 3. 「部局年次計画等に関するヒアリング」(11 月 18 日)
第 5 回(10 月 16 日)	1. 外部資金の採択 2. 学振特別研究員 3. 外部資金獲得のインセンティブ予算配分ルールの見直し

(研究推進委員会委員長 青木茂樹)

7.6.2. 研究倫理審査委員会

本年度は117件の新規申請があり、68件が承認、37件が条件付承認、1件が変更の勧告、取り下げ1件であった。まだ審議中のものが5件残っている状況である。2016（平成28）年度の新規申請が71件、2017（平成29）年度は69件、2018（平成30）年度は59件と、件数としては漸減していたが、2019（令和元年）は95件と増加に転じ、本年度はさらに大幅に増加したと言える。

平成27年4月1日から「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」が施行された。平成29年には「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」の一部改正、「個人情報保護法等の改正に伴う研究倫理指針」の改正、「個人情報保護法等の改正に伴う研究倫理指針」の改正もなされている。そうした動きに対応して、本審査委員会では昨年度改正した研究倫理審査申請書（様式第1号）を本年度6月に微修正、併せて研究計画を変更した際の倫理申請の変更手続きを委員会にて検討し、教授会への報告を経て、研究再審査申請書（様式第4号）を策定した。本研究科の研究倫理審査の質を保ちつつ、申請者にとっても審査申請書の作成がより容易になったと考えている。

(研究倫理審査委員会委員長 片桐恵子)

7.6.3. 研究紀要編集委員会

令和2年度研究紀要編集委員会は、緊急事態宣言発出に伴い、在宅勤務中心になったことから、会議はオンライン実施またはメール審議となった。そのような厳しい状況下ではあったが、「神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要」第14巻第1号、第2号の編集・刊行を行った。第14巻第1号は、研究論文5編（査読あり）、研究報告7編（査読なし）で、2020年9月30日付けで刊行した。第14巻第2号は、研究論文6編（査読あり）、研究報告5編（査読なし）を、2021年3月31日付けで刊行予定である。また、このような状況に鑑み、全ての投稿をメール送信で行うこととし、併せて執筆要領を改訂した。

(研究紀要編集委員会委員長 鳥居深雪)

7.7. 各専攻の研究

7.7.1. 人間発達専攻

以下、系講座別に研究の概要を示す。

●こころ系講座

(1) 国際共同研究

研究代表(本専攻教員)：加藤佳子

共同研究者：鳥居深雪，山根隆宏，古屋敷智之，Adrien Rigó, Roswith Roth

研究資金：2018年度国際共同研究加速基金(国際共同研究(B))

研究課題：心の健康の保持増進のための国際支援プログラム評価指標の開発

研究概要：心の支援を必要とする者の支援関係者がそのストレスにうまく対処し、心の健康を保持増進し、生きがいを促進する機序について探求し支援関係者の心の健康・生きがい増進モデルを構築する。そのために歴史的にも先進的な心理支援に取り組み、一定の効果を上げている海外の地域(オーストリア)に中核共同研究拠点を置き国際ネットワークを構築する。

本専攻研究者：古谷真樹

共同研究者：Rosie Gibson (Massey University), Mirjam Münch (Massey University)

Mikaela Carter (Massey University), Ramil Adhikari (Massey University), Harshi Shetty (Massey University), Kenji Hall (Kobe University)

研究課題：Caring around the clock: Providing a framework for improving sleep health of family carers.

研究資金：Lotteries Health Research projects (代表：Rosie Gibson)

研究概要：COVID-19期間中における在宅介護者の睡眠とWell-beingに対する社会的・身体的影響について検討し、よりよい支援方法を提案する。

研究代表(本専攻教員)：林創

研究課題：子どもの社会的な心の国際比較に関する発達心理学的研究

研究資金：国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(A))

研究概要：幼児期から児童期の子どもを対象に、社会性の発達の程度を表す指標となりうる「嘘」と「道徳判断」の発達について、普遍性と文化的独自性を検討することを目的とする。

(2) 国内共同研究等

本専攻研究者：相澤直樹

共同研究者：石橋正浩(大阪教育大学)，齋藤大輔(金沢大学)，内海千種(徳島大学)，牧田潔(愛知学院大学)，平石博敏(金沢大学)

研究課題：自己制御課題としてのロールシャッハ法の神経基盤の探求

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（代表：石橋正浩）課題番号 16K04358
研究概要：fMRI を用いてロールシャッハ法課題実施時の脳機能を自己制御課題の観点から検討する。

研究代表(本専攻教員)：相澤直樹

研究課題：青年期における対人恐怖傾向（社交不安）ならびに自己愛傾向の心理

研究資金：令和2年度科学研究費助成事業 学術成果公開促進費〈学術図書〉（申請者：相澤直樹） 課題番号 20HP5181

研究概要：青年期男女を対象とした質問紙調査により対人恐怖傾向（社交不安）ならびに自己愛傾向の心理の解明を目指す。なお，本年度は上記の研究資金を得て，下記の学術専門書を出版した。

研究代表(本専攻教員)：赤木和重

研究課題：小学生は授業スタンダードをどのようにとらえているか

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究C（代表：赤木和重）

研究概要：小学生が授業スタンダードについてどのように認識しているのかを明らかにする。

研究代表(本専攻教員)：赤木和重

研究課題：新型肺炎感染拡大における放デイの実践内容の把握と職員のストレス症状：インターネットを介した速報調査（代表：赤木和重）

共同研究者：木下孝司（本専攻），川地亜弥子（本専攻）

研究資金：明治安田こころの健康財団研究助成

研究概要：放課後デイ職員のストレス状況について，調査を通して明らかにする。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：対話的事例シナリオを核とした教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発研究

共同研究者：山田康彦（三重大学），森脇建彦（三重大学），根津知佳子（日本女子大学）

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究C（代表：山田康彦）

研究概要：教員養成課程の大学の授業カリキュラムについて，対話的事例シナリオを用いた実証的研究を通して明らかにする。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：障害者の文化芸術活動の実践分析に基づくエンパワメント評価及び支援システム開発研究

共同研究者：津田英二（本専攻），稲原美苗（本専攻），松岡広路（本専攻），岡崎香奈（本専攻），大田美佐子（本専攻），清野未恵子（本専攻）

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究B（代表：津田英二）

研究概要：障害者の文化芸術活動の実践活動に注目して、エンパワメント評価の支援方法について検討を行う。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：知的障害、発達障害の教育目標・教育評価に関する研究—資質・能力論の観点から

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究C（代表：三木裕和）

研究概要：知的障害・発達障害を対象とした特別支援教育における教育目標・評価について、実践記録などを対象に、検討を行う。

研究代表(本専攻教員)：安達友紀

研究課題：慢性神経障害性疼痛に対する痛み焦点化催眠と催眠認知療法の効果検証

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究

研究概要：慢性神経障害性疼痛患者への催眠療法と催眠認知療法の効果を検証する

本専攻教員：安達友紀

共同研究者：細越寛樹（関西大学）、岩佐和典（就実大学）、福森崇貴（徳島大学）、高岸百合子（駿河台大学）、大江悠樹（杏林大学）、平子雪乃（明治学院大学）、柴田正彦（奈良学園大学）、堀越勝（国立精神・神経医療研究センター）

研究課題：慢性痛に対する認知行動療法の無作為化比較試験による効果検証とその普及に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（代表：細越寛樹）

研究概要：慢性疼痛に対する認知行動療法の有効性を無作為化比較試験により検証する

研究代表(本専攻教員)：伊藤俊樹

共同研究者：吉田圭吾、河崎佳子、加藤佳子、津田英二、相澤直樹、山根隆宏、長坂耕作、安達友紀

研究課題：新型コロナウイルス・パンデミックによる人々の行動・生活環境変化の実態調査とポストコロナ社会での well-being 支援—こころのケア-遠隔（オンライン）による心理支援の実態—

研究資金：研究推進支援経費（60万）

研究概要：コロナ禍におけるオンラインカウンセリングに関する現状の把握と分析

研究代表(本専攻教員)：伊藤俊樹

研究課題：消費者の深層心理を探求するための技法の実証的研究及びその確立～コラージュ法に焦点を当てて～

研究資金：神戸大学イノベーションファンド(390万)

研究概要：コラージュ法を用いた消費者の深層心理を探る技法の開発

研究代表(本専攻教員)：加藤佳子

共同研究者：黒川通典(大阪樟蔭女子大学) 黒川浩美(大阪青山大学)

研究課題：行動科学を活用する食習慣改善支援ツールの開発

研究資金：2019年度 基盤研究(C)

研究概要：行動科学を活用した食習慣改善支援が必要とされている。ところが我が国では行動科学が食習慣改善支援に導入されて、いまだ初期段階の状況にあり十分な成果を上げることができていない。この課題を解決するために食習慣改善支援促進モデルを構築し、食習慣改善支援促進ツールを開発する。

本専攻研究者：河崎佳子

研究課題：乳幼児期手話言語獲得支援における映像教材の開発、ならびに動画配信のもたらす効果の実証

研究資金：神戸大学イノベーションファンド研究成果展開事業(社会還元加速プログラム(SCORE) 大学推進型)

研究概要：聴覚障害をもつ乳幼児を中心に、手話言語の獲得を必要とする子どもたちとその家族を対象に映像教材を作成する。完成した映像教材をテスト配信によって、大阪府乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」に参加する家族に提供し、アンケート調査や聞き取り調査をとおして評価を得て、改善に役立てる。開発した映像教材は、DVD化やインターネット配信によってその商品化を目指す。

本専攻研究者：河崎佳子

研究課題：手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト

研究資金：日本財団

研究概要：(NPO)手話言語獲得習得支援研究機構(NPO こめっこ)が実施主体となり、日本財団の助成(2020~2025年度)を得て大阪府と連携しながら実施する、聴覚障害児支援に係る手話の重要性に関する多領域共同研究(心理、脳機能・言語、学習)に参加。大阪府障害者施策推進協議会条例に基づく研究分科会の総括研究責任者を務めてきた。

研究代表(本専攻教員)：齊藤誠一

共同研究者：濱田綾(大阪大学)

研究課題：老いることに向き合う準備期間として60代のライフタスクモデルの検討

研究資金：公益財団法人 前川ヒトづくり財団 研究助成

研究概要：定年退職によりそれまでの就労が剥奪された環境における生活満足感や充実感、時間的展望、健康寿命後における心身的変化や死に対する態度、人生最後の期間に対する生き方や不安を明らかにし、60代の移行期としてのライフタスクを構築する。

研究代表(本専攻教員)：齊藤誠一

共同研究者：吉田圭吾(本専攻教員)、池田忠義(東北大学)、岡本英生(奈良女子大学)、則定百合子(和歌山大学)

研究課題：東日本大震災の心理的影響と支援のあり方に関する継続的研究—放射線被爆不安と新型コロナウイルス感染不安との複合的影響の検討—

研究資金：2020年度 東北大学等との連携による震災復興、並びに災害科学分野における学術研究の支援経費

研究概要：放射線被害により生活制限を受けてきた経験をもつ住民が、未だに漠然とした放射線被爆不安を有する上に、新型コロナウイルスの不安が加わり、二重の不安による心理的影響を受けているものと考えられ、こうした被災者特有の心理状況を明らかにし、そこで求められる支援のあり方を検討する。

研究代表(本専攻教員)：坂本美紀

共同研究者：山口悦司(本専攻)、伊藤真之(本専攻)、松河秀哉(東北大学)、益川弘如(静岡大学)

研究課題：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシーの教師教育

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)(一般)(代表：坂本美紀)

研究概要：市民の科学離れを解消し、市民の科学への主体的な参加・支援を促進するという観点から、オープンサイエンス・リテラシーの科学教育に関する指導理論・指導法・評価法を体系化し、それらを踏まえた教師・指導者教育プログラムについて、科学教育の専門家と学習科学等の研究者による学際的な共同研究によって開発・検証することを目的とする。

研究代表(本専攻教員)：坂本美紀

共同研究者：山口悦司(本専攻)、伊藤真之(本専攻)、松河秀哉(東北大学)

研究課題：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モデル開発

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究(萌芽)(代表：坂本美紀)

研究概要：科学に対する関心・関与を持続的に保持しながら、科学へ主体的に参加・支援するための資質・能力・態度の総体を「オープンサイエンス・リテラシー」と定義し、エンゲージメント理論を応用して、その理論化を行うとともに、市民の科学への主体的な参加・支援を促進する教育モデルを開発することを目的とする。

本専攻研究者：鳥居深雪

共同研究者：岡田智(北海道大学) 大谷和大(北海道大学)

研究課題：発達障害特性の影響因を加味した知能検査解釈システムの構築

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（代表：岡田智）

研究概要：ウェアラブル知能検査の再検査信頼性，生態学的情報，検査行動，測定値の関連を調査し，知能検査解釈システムの構築に取り組んでいる。

本専攻研究者：鳥居深雪

共同研究者：村中泰子（神戸大学キャンパスライフ支援センター），森麻友子（和歌山大学）

研究課題：発達障害者の職場コミュニケーションにおける合理的配慮 研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（代表：村中泰子）

研究概要：発達障害のある学生が就労に際して最も困難を感じるのは職場コミュニケーションである。職場コミュニケーションにおける合理的配慮の在り方について検討する。

研究代表(本専攻教員)：中村晴信

共同研究者：甲田勝康（関西医科大学），藤田裕規（近畿大学），小原久未子（近畿大学）

研究課題：体組成測定による骨・筋・脂肪の量・分布の可視化が成長期の食行動変容に及ぼす影響

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)（代表：中村晴信）

研究概要：小中学生に対する二重エネルギーエックス線吸収法による正確な体組成結果を材料として，食行動の変容に及ぼされる影響を検討する。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：甲田勝康（関西医科大学），伊木雅之（近畿大学），藤田裕規（近畿大学）

研究課題：体脂肪分布が臓器機能障害におよぼす影響についての大規模疫学研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)（代表：甲田勝康）

研究概要：二重エネルギーエックス線吸収法による住民ベースの体脂肪分布のデータから，体脂肪分布の多様性が心血管疾患や内分泌代謝疾患等の臓器機能障害に及ぼす影響について検討する。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：間瀬知紀（京都女子大学）

研究課題：幼児における体格・体組成と生活習慣因子との関連性

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(C)（代表：間瀬知紀）

研究概要：幼児を対象として食事・身体活動を中心とした生活習慣因子と体格・体組成の変化との関連性を評価することにより，幼児期の脂肪の急増および体組成の変化に影響を及ぼす生活習慣因子について解明する。

本専攻研究者：中村晴信

共同研究者：青柳潔（長崎大学），有馬和彦（長崎大学），前田隆浩（長崎大学），西村貴孝（長崎大学），安部恵代（長崎大学）

研究課題：日本人における性ホルモン・骨代謝回転・骨量間関連の生理的・遺伝的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)（代表：青柳潔）

研究概要：欧米人とは遺伝的背景が異なる一般日本人中高年男女において，性ホルモンや骨代謝回転マーカーと骨量との関連を体格，遺伝子多型，さらにライフスタイルといった環境的要因を含め検討する。

研究代表(本専攻教員)：林創

研究課題：子どもの社会性を支える「察する」心の発達心理学的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(C)

研究概要：幼児期から児童期の子どもを対象に，特に向社会的行動の発達について実証的な視点から着目することで，これらが人間の社会性を支える「察する」心の発達に重要な意味をもつことを明らかにする。

本専攻研究者：古谷真樹

共同研究者：岡靖哲（愛媛大学），林光緒（広島大学），樋口重和（九州大学），田村典久（広島大学），高田律美（人間環境大学），田中秀樹（広島国際大学），山本隆一郎（江戸川大学），笹澤吉明（琉球大学），綾部直子（秋田大学）

研究課題：睡眠教育プログラムの教育現場における実証研究

研究課題研究資金：科学研究補助金・基盤研究（B）（代表：岡靖哲）

研究概要：心身の発達に重大な影響をもたらす成長期の睡眠の問題を早期に見出し，睡眠マネジメントを行う上で大きな役割を果たす睡眠教育をどのように実施し，教育現場にどのように生かしていくかを検討する。児への教育のみならず，教育・医療関係者や保護者，さらには将来子どもを育む世代も含めた多面的なアプローチとして，未就学児～大学生までの全年齢層を通じた継続的な睡眠教育を教育現場において実証的に検討することを目的とする。

研究代表(本専攻教員)：山根隆宏

研究課題：自閉症児の親におけるオンラインソーシャルサポートの実態と有効性に関する縦断的検討

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究（代表：山根隆宏）

研究概要：自閉症児の親におけるオンラインソーシャルサポートの利用実態と，その有効性について縦断的な調査を通して検討するものである。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：石本雄真（鳥取大学）、松本有貴（徳島文理大学）

研究課題：放課後等デイサービスにおける支援機能向上に資する複層的な支援リソースの開発と検証

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究C（代表：石本雄真）

研究概要：放課後等デイサービスで実施可能でかつ、発達障害児の不安の問題に介入できるプログラムを開発すること、および効果的な研修システムの開発とその効果検証を行うものである。

(3) 国際共著論文 (Web of Science 収録論文) ★は10%論文

★NCD Risk Factor Collaboration (NCD-RisC) (including Nakamura H).

Height and body-mass index trajectories of school-aged children and adolescents from 1985 to 2019 in 200 countries and territories: a pooled analysis of 2181 population-based studies with 65 million participants.

Lancet. 396(10261):1511-1524, 2020 (Science Citation Index Expanded)

★NCD Risk Factor Collaboration (NCD-RisC) (including Nakamura H).

Repositioning of the global epicentre of non-optimal cholesterol.

Nature. 582(7810):73-77, 2020 (Science Citation Index Expanded)

Nóra Román, Adrien Rigó, Yoshiko Kato, Zsolt Horváth, Róbert Urbán, Cross-cultural comparison of the motivations for healthy eating scale: investigating the validity and invariance of the motivation for healthy eating scale (2020).
Psychology & Health

Yoshiko Kato, Yukari Shimomura, Yoshihiro Takada, Tomoyuki Furuyashiki
Correlation between lactic acid bacteria beverage intake and stress resilience.
(in press) Kobe Journal of Medical Sciences

Yoshiko Kato, Chenghong Hu, Yiran Wang, Ami Kojima, Psychometric validity of the motivation for healthy eating scale (MHES), short version in Japanese (in press)
Current psychology

NCD Risk Factor Collaboration (NCD-RisC) (including Nakamura H).

Heterogeneous contributions of change in population distribution of body mass index to change in obesity and underweight. Elife. 9;10:e60060, 2021 (Science Citation Index Expanded)

Kouda K, Iki M, Fujita Y, Nakamura H, Hamada M, Uenishi K, Miyake M, Nishiyama T. Trunk-to-peripheral fat ratio predicts a subsequent blood pressure in normal-weight pubertal boys: a 3-year follow-up of the Kitakata Kids Health Study. *Environ Health Prev Med.* 25(1):41, 2020 (Science Citation Index Expanded)

Fujita Y, Kouda K, Ohara K, Nakamura H, Iki M. Maternal pre-pregnancy underweight is associated with underweight and low bone mass in school-aged children.

J Bone Miner Metab. 38(6):878-884, 2020 (Science Citation Index Expanded)

Kouda K, Iki M, Fujita Y, Nakamura H, Uenishi K, Ohara K, Nishiyama T. Calcium Intake and Bone Mineral Acquisition during the Pubertal Growth Spurt: Three-Year Follow-Up of the Kitakata Kids Health Study in Japan.

J Nutr Sci Vitaminol (Tokyo). 66(2):158-167, 2020 (Science Citation Index Expanded)

Ohara K, Nakamura H, Kouda K, Fujita Y, Momoi K, Mase T, Carroll C, Iki M. Psychometric properties of the Japanese version of the Dutch Eating Behavior Questionnaire for Children.

Appetite. 151:104690, 2020 (Science Citation Index Expanded)

Hayashi, H., & Ban, Y. (2020). Children's understanding of unintended irony and unsuccessful irony. *European Journal of Developmental Psychology*, 18, 230-256.

(4) 国際共著論文

Toshiki Ito & Junichi Osada : RELATIONSHIP BETWEEN HUMAN-ROBOT INTERACTION, ROBOT DESIGN AND PSYCHOLOGICAL IMAGES TOWARDS ROBOT - A psychological qualitative analysis of children's drawings of robot. *Journal of Science of Design.* (印刷中 巻号未定)

Takizawa, Y., Murray, J., Bambling, M., Matsumoto, Y., Ishimoto, Y., Yamane, T., Edirippulige, S. (in press). Online training for psychotherapists in Asian contexts: Advantages, challenges, and effective features. *Asia Pacific Journal of Contemporary Education and Communication Technology.*

Ishimoto, Y., Yamane, T., Matsumoto, Y., & Kobayashi, K. (2020). The Impact on Children's Mental Health of School Closures to Prevent the Spread of the Novel

Coronavirus (COVID-19). Preprints 2020, 2020060006 (doi: 10.20944/preprints202006.0006.v1).

Yoshiko Kato, Yukari Shimomura, Yoshihiro Takada, Tomoyuki Furuyashiki
Correlation between lactic acid bacteria beverage intake and stress resilience.
(in press) Kobe Journal of Medical Sciences

Sakamoto, M., Yamaguchi, E., Yamamoto, T., Inagaki, S., Wakabayashi, K., & Tokura, S. (2020). An intervention study on student's decision-making using trade-offs to resolve socio-scientific issues. In Levrini, O. & Tasquier, G. (Eds.), *Electronic Proceedings of the ESERA 2019 Conference, Part 5* (co-ed. Papadouris, N., & Testa, I.), (pp.722-729). University of Bologna.

Tokura, S., Yamaguchi, E., Sakamoto, M., Yamamoto, T., Inagaki, S., Wakabayashi, K., & Matano, M. (2020). Investigating perspective-taking on socioscientific issues among Japanese primary school students. In Levrini, O. & Tasquier, G. (Eds.), *Electronic Proceedings of the ESERA 2019 Conference, Part 8* (co-ed. Laherto, A., & Rybska, E.), (pp.949-974). University of Bologna.

(5) 国際学会発表

TORII, M., SOMEKI, F., NISHIO, Y., UMEDA, M., OGAWA, H., KONDO, T., & SHIKIBU, Y., (2020) Effectiveness of an Online Program Using Manga to Change Japanese High School Students' Attitudes Toward Individuals with Neurodevelopmental Disabilities, International Society for Autism Research Annual Meeting, Virtual

(6) 著書

(単著)

相澤直樹 (2021) 青年期における対人恐怖傾向と自己愛傾向に関する心理発達の研究, 風間書房

赤木和重 (2021) 子育てのノロイをほぐしましょう, 日本評論社

鳥居深雪 (2020) 改訂 脳からわかる発達障害, 中央法規出版

(分担執筆)

赤木和重 (2020) アメリカの小さな学校から考えるインクルーシブ教育 宇野宏幸・一般社団法人LD学会 第29回大会実行委員会 (編) 『学びをめぐる多様性と授業・学校づく

り』 金子書房 (pp128-139)

赤木和重 (2020) 発達障害のある生徒の発達 心理科学研究会 (編)『中学・高校教師になるための教育心理学 第4版』有斐閣 (pp56-63)

赤木和重 (2021) インクルーシブ教育:「みんなちがって, みんないい」の陰で/石井英真 (編)『流行に踊る日本の教育』東洋館出版社 (pp121-143)

赤木和重 (2021)『アメリカの教室に入ってみた: 貧困地区の公立学校から超インクルーシブ教育まで (DVD付特別版)』ひとなる書房

赤木和重 (2021) 多重知能理論 西岡加名恵・石井英真 (編)『教育評価重要用語事典』明治図書 (p. 71)

赤木和重 (印刷中) 生徒を変えるのではなく, 関係を変える: 人間の発達の動きだしについて 時岡晴美・大久保智生・岡田涼・平田俊治 (編) 印刷中 地域と協働する学校: 中学校の実践から読み解く思春期の子どもと地域の大人のかかわり 福村出版

赤木和重・呉文慧 (印刷中) 発達障害の理解と支援: 自閉症スペクトラム障害を中心に/田中真介ほか (編)「応用心理学ハンドブック」福村出版

鳥居深雪 (2020) 学びの多様性をふまえたインクルーシブ教育, 宇野宏幸 (編) 学びをめぐる多様性と授業・学校作り, 金子書房

鳥居深雪 (2020) 今こそ知りたい特別支援教育の基礎知識 なるほど! 発達障害 Part2 自閉スペクトラム症, 月刊特別支援教育研究, 東洋館出版, 29-31

林創(2020). 認知発達 糸井尚子・上淵寿 (編)『教師のための教育学シリーズ5 教育心理学』学文社 pp. 41-53.

林創(2021). うそ 他計 11 項目 子安増生・丹野義彦・箱田裕司 (監修)『有斐閣 現代心理学辞典』有斐閣 p. 50 他.

古谷真樹 (2020) 小児の睡眠健康指導 (乳幼児から6歳まで) 宮崎総一郎・千葉伸太郎・中田誠一 (編)『小児の睡眠呼吸障害マニュアル第2版』全日本病院出版会 pp12-15.

古谷真樹 (2020) 長時間睡眠者と短時間睡眠者 日本睡眠学会 (編)『睡眠学第2版』朝倉書店 pp376-379.

古谷真樹 (2020) 朝型と夜型 日本睡眠学会 (編) 『睡眠学Ⅱ第2版』朝倉書店 pp. 380-383.

(7) 論文

鳥居深雪 (2020) 学びの多様性をふまえたインクルーシブ教育, LD 研究 研究と実践, 29(3), 165-169

鳥居深雪 (2020) 共生社会の実現に向けた特別支援教育の充実, 兵庫教育, 838, 4-7

鳥居深雪, 梅田真理, 染木史緒, 近藤武夫, 小川修史, 式部陽子, 西尾祐美子 (印刷中) 発達障害に対する高校生のスティグマの実態とオンラインによる障害理解教育の有効性, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要

古谷真樹 (2020) 親子でチャレンジ「早ね早起き朝ごはん」—睡眠教育指導者を育成するプロセス— 睡眠と環境, 15, 46-52.

榎本聖香・安達友紀・佐々木淳 (2020) 「不眠症状を伴う慢性疼痛のクライアントに対する認知行動療法の適用」 心理臨床学研究 38, 97-106.

榎本聖香・安達友紀・高橋紀代・西上智彦・柴田政彦 (2020) 「発症契機に他者の落ち度を感じている慢性疼痛患者の初診時ならびに6ヵ月後の質問票スコアについて：後ろ向き研究」 日本運動器疼痛学会誌 12, 22-31.

藪田小百合・林創 (2021). 自己と他者の関係に着目した幼児の自己調整機能の発達 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 14 (2), 147-156.

野上慶子・山根隆宏 (印刷中). 自閉スペクトラム症と注意欠如・多動症児の不安症状に対する家族認知行動療法の研究動向. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 14(2).

大塚あかり・加藤弘通・山根隆宏 (印刷中). 集団での協同課題場面における集団への評価と自己評価との関連. 神戸大学発達・臨床心理学研究, 20.

野上慶子・谷口あや・石井美優・米原優奈・奥野七海・山根隆宏 (印刷中). 就学前児の反抗的行動に対する母親の否定的・被害的認知の要因：育児不安, 子どもの問題行動, ソーシャルサポートに注目して. 神戸大学発達・臨床心理学研究, 20.

山根隆宏・石本雄真・松本有貴・辻井正次 (2020). 自閉症スペクトラム障害児の感情調整に関する介入プログラム (PEACE) の開発—支援合宿における予備的検討. 自閉症スペクトラム研究, 18(2), 1-9.

谷口あや・山根隆宏 (2020). 診断名の提示が自閉症スペクトラム障害に対するスティグマに及ぼす影響：知識との関連から. 発達心理学研究, 31, 130-140.

(8) 受賞

受賞者：安達友紀, 山田恵子, 藤野陽生, 榎本聖香, 柴田政彦

受賞名：公益社団法人日本心理学会学術大会優秀発表賞

題目：一次性慢性痛における怒り関連変数：系統的レビューとメタ分析

受賞日：2020年10月20日

受賞者：加藤佳子

受賞名：牛乳乳製品健康科学会議 優秀賞

受賞題目：心のしなやかさを育む牛乳乳製品の摂取

受賞年月日：2020年9月

受賞者：中村晴信

受賞名：一般社団法人日本生理人類学会 日本生理人類学会賞

受賞年月日：2021年3月7日

受賞者：林創

受賞名：第38回村尾育英会学術奨励賞

受賞対象：嘘（欺き）と道徳性についての子どもの社会的な心の発達に関する心理学的研究

受賞年月日：2021年3月6日

(9) こころ系講座の研究の総括と課題

2020年度は、COVID-19感染拡大に伴い、研究活動も大きく制限された中であつたが、本研究科教員は積極的な研究活動を行い、成果も上げてきた。また、COVID-19が人の心理や生活に及ぼす影響に関する研究も取り組まれていることは、研究者としての社会への使命を果たすものとして高く評価したい。

●表現系講座

(1) 国際共同研究

本専攻研究者：大田美佐子

共同研究者：Carol J. Oja (Harvard University)

研究課題：20 世紀における米日音楽交流（占領期を中心に）

研究資金：JSPS (2017), Harvard University (Reischauer Institute of Japanese Studies 2018)

研究概要：2017 年の JSPS による招聘を契機に始まった米日両国間の音楽文化交流に関する研究。2019 年度は American Music に査読論文掲載。2020 年度は占領期の音楽文化交流の出版準備。2021 年度はミシガン大学出版から共著書が出版予定。

本専攻研究者：野中哲士

共同研究者：Enora Gandon (University College London), Raphael Sonabend (University College London), John A. Endler (Deakin University), Reinoud J. Bootsma (Aix Marseille Universite), Thelma Coyle (Aix Marseille Universite)

研究課題：Individual variations and cultural evolution: the pottery wheel-throwing skill as a case study

研究資金 The Marie Sklodowska-Curie grant agreement No 793451 (EU) to Enora Gandon

研究概要：陶芸における「文化伝承」現象の実証的研究

本専攻研究者：野中哲士

共同研究者：Thomas A. Stoffregen (University of Minnesota)

研究課題：Social interaction in the emergence of toddler' s mealtime spoon use

研究資金科学研究費助成事業 基盤研究(C) 特設分野研究

研究概要：乳児の日常生活技能獲得場面をとりまく乳児－養育者間共同行為の実証的検討

(2) 国内共同研究等

研究代表者（本専攻教員）：岸本吉弘

共同研究者：なし

研究課題：オールオーバー絵画の萌芽期における研究－ジャクソン・ポロック「壁画」を中心に－

研究機関：2020 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究は、アメリカ抽象表現主義の旗手であるジャクソン・ポロックの円熟期のオールオーバー絵画以前の萌芽期・形成期の作品を対象とする。なかでも 1940 年前半の代表作品「壁画」に着眼し、通史的・美学的な解釈に留まらず、技法・材料的な視点による分析を加え、その上で完成度の高い「再現制作」を試みることで制作プロセスを再現（追体験）することが大きな特徴である。初年度である本年は予定していたアメリカでの現地調査がコロナ禍の影響で困難となったが、ポロック・クラブナー財団が所有する関

係資料の閲覧を軸に文献調査と整理を行った。

本専攻研究者：岸本吉弘

研究協力者：大島徹也（多摩美術大学准教授）、吉川民仁（武蔵野美術大学教授）、小川佳夫（ロゾー絵画教室主宰）小池隆英（画家）

研究課題：現代美術（絵画）におけるフォーマリズムの可能性

研究資金：構成員の個人研究費及びロゾー絵画教室（民間企業）

研究概要：現代における本格的な抽象美術（絵画）の有り様や可能性を追求すべく、研究会「Studio 138」を昨年度に結成した。表現者や美術評論家、美術史家等で構成される研究会で、岸本は創立メンバーである。第2回研究会（2020年7月11日：東京・神楽坂のロゾー絵画教室）、第3回研究会（2020年11月14日：東京・神楽坂のロゾー絵画教室）が開催され、今後も定期的な研究発表会、展覧会、機関誌刊行などが予定される。

本専攻研究者：岸本吉弘

共同研究者：大船光洋、加藤悦郎、真木智子

研究課題：垂直線のもつ意義について

研究資金：ギャラリー白（民間企業）

研究概要：関西近県の活動する抽象画家が集い、拠点であるギャラリー白（大阪・西天満）において中型作品の展示と同時に、トークイベントも併載し、抽象絵画における垂直構造である「垂線」がもつ意義や魅力やその可能性を探る試みを実施した。

研究代表者（本専攻教員）：岡崎香奈

研究課題：日本におけるノードフ・ロビンス音楽療法士養成教育の展開

研究資金：個人研究費

研究概要：本研究は、即興を中心とした主要音楽療法アプローチでもある「ノードフ・ロビンス音楽療法士」の養成を日本で可能にするために、全国の音楽療法士養成教育に携わる大学教育者・研究者と共に実践的なプランを練るものである。日本の現状に即した養成内容や臨床形態などを検証し、具体的な養成プログラム案を英文で作成（Proposal for Japanese Nordoff-Robbins Music Therapy Training Program）して、International Trust for Nordoff-Robbins Music Therapy に提出した。

研究代表者（本専攻教員）：谷正人

研究課題：文化環境との関わりからみた即興演奏技能の発達—イラン音楽を事例として

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究分担者（本専攻教員）：谷正人

研究課題：中東少数派の音文化に関する研究—共有と非共有に着目して—

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(B)

飯野りさ（代表者）、谷正人、米山知子

本専攻研究者：野中哲士

共同研究者：伊藤精英

研究課題：アクティブタッチ技能の獲得過程の解明：身体の触運動ダイナミクスからの検討

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：視覚障害をもつ子どもたちにおける点字を「触って読む」技能の発達研究

研究代表者（本専攻教員）：平芳裕子

研究課題：思想としてのファッション-20世紀後半の芸術における身体表象との関係から

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究は、20世紀後半の芸術における身体表象の変容が、日本における「思想としてのファッション」の生成に与えた影響を明らかにすることによって、現代アートにおけるファッションの価値化、ミュージアムにおけるファッション展の発展、アカデミズムとしてのファッション研究成立の歴史的文脈を検証するものである。

本専攻研究者：関典子

共同研究者：三浦栄里子（ピアニスト）、井上大志（映像作家 Leo Labo 主宰）、金子彰宏（音響 兵庫県立芸術文化センター）

研究課題：『瀕死の白鳥』映像作品としての再創造

研究資金：ひょうごアーティスト動画配信事業「がんばろうひょうご！つながろうアート！」（公益財団法人 兵庫県芸術文化協会）

研究概要：コロナ禍で長期間の自粛を余儀なくされている状況下、兵庫県ゆかりのアーティストによる動画作品のインターネット配信により多くの人々が芸術文化に触れる機会とアーティストの発表の場を提供する事業。無観客の兵庫県立芸術文化センター大ホールにて、復活の願いを込め、ピアノ演奏によるソロ・ダンス『瀕死の白鳥』の再創造を実施した。

本専攻研究者：関典子

共同研究者：藤巻佐和子（公益財団法人 尼崎市文化振興財団）

研究課題：薄井憲二バレエ・コレクション特別展「バレエ・リュスと美術家たち」

研究資金：公益財団法人 尼崎市文化振興財団

研究概要：兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」特別展として、尼崎市総合文化センター（5階）美術ホールにて「バレエ・リュスと美術家たち」を開催（2020年11月21日～12月13日）。衣装・ポスター・プログラム・写真・絵画など約180点を展示し、約1100人を動員。展示およびリーフレットの監修を務めた。

本専攻研究者：梅宮弘光

共同研究者：矢代眞己、大川三雄、野澤正光、堀越哲美

研究課題：山越邦彦の建築思想と活動実践に関する研究

研究資金：山越悠子基金

研究概要：遺品資料にもとづいて、山越邦彦の思想と活動を建築歴史学、建築意匠・設計論、環境工学の各面から明らかにすると同時に、遺品中の一次資料のデジタルアーカイブス化を進める。

(3) 論文 (Web of Science 収録) * (10%論文にはマークを付す)

Nonaka, T., & Stoffregen, T. A. (2020). Social interaction in the emergence of toddler's mealtime spoon use. *Developmental Psychobiology*, 62(8).

<http://dx.doi.org/10.1002/dev.21978>

Gandon, E*, Nonaka, T*, Endler, J. A., Coyle, T., & Bootsma, R. J. (2020).

Traditional craftspeople are not copycats: Potter idiosyncrasies in vessel morphogenesis. *PLoS ONE*, 15(9), e0239362.

<https://doi.org/10.1371/journal.pone.0239362>

*共同筆頭著者

Gandon, E., Nonaka, T., Sonabend, R., & Endler, J. A. (2020). Assessing the influence of culture on craft skills: A quantitative study with expert Nepalese potters. *PLoS ONE*, 15(10), e0239139.

<https://doi.org/10.1371/journal.pone.0239139>

(4) 論文 (Web of Science 未収録)

田畑暁生「新しい「地域情報化計画」」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』14(1), 101-110. (2020)

大田美佐子, 肥山紗智子, 日本の三文オペラ試論 (1) - 黎明期における三文熱をめぐって, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 14(1), 37-53, (2020)

岸本吉弘, 制作ノート—立体制作を通じて, Studio138 紀要, 1号, 20-25, 2021年3月

野中哲士. (2020). 書字技能の発達：字を書く身体と環境. 『バイオメカニズム学会誌』, 44(4). pp. 203-210.

関典子, 身体を回る力～私とダンスと重力～, 武庫川女子大学生生活美学研究所紀要第30号, 1-25, (2020).

関典子, 舞台芸術としてのバレエ・リュス他, 薄井憲二バレエ・コレクション特別展「バレエ・リュスと美術家たち」リーフレット, 1-8, (2020).

梅宮弘光「図解の人, 川喜田煉七郎」『TEMPOLOGY Version 特別号, 2020年5月, pp. 3-5

梅宮弘光「日本初の円形校舎・金城学園校舎(1953年)にみる円形校舎ブームの初発」『日本建築学会2020年度大会学術講演梗概集』2020年8月, pp. 217-218

(5) 著書

(単著)

谷正人『イラン伝統音楽の即興演奏—声・楽器・身体・旋法体系をめぐる相互作用』スタイルノート, 132頁, 2021年1月

(分担執筆)

谷正人「イランの音楽」(『浜松市楽器博物館総合案内図録2020』浜松市楽器博物館, 2020年5月)

谷正人「イランの音楽」pp. 474-475 (鈴木董, 近藤二郎, 赤堀雅幸, 岡田保良(編)『中東・オリエント文化事典』丸善出版, 2020年11月)

谷正人「第4章「イラン音楽—即興における書かれるものと書かれないもの」pp. 404-405 (美学会(編)『美学の事典 Encyclopedia of aesthetics』丸善出版, 2020年12月)

平芳裕子「近代アメリカ女性に見る針仕事と階級の関わり」pp. 175-178 (上羽陽子, 山崎明子(編)『現代手芸考 ものづくりの意味を問い直す』フィルムアート社, 2020年9月)

梅宮弘光「表現から構成へ—川喜田煉七郎におけるリアリティの行方」pp. 476-492 (田路貴浩(編)『分離派建築会—日本のモダニズム建築誕生』京都大学出版会, 2020年10月)

(6) 訳書

(共訳) 岡崎香奈(八重田美衣, 生野里花) 林庸二監訳 ケネス・E・ブルーシア『即興音楽療法の諸理論(下)』人間と歴史社, 2020年4月

(7) 国際会議等発表

Kana Okazaki-Sakaue, “Nordoff-Robbins Music Therapy -Theory and Practice-“, Workshop, Korean Government Project for Music Therapy Training, 9.27.2020, Jeonju University, Korea. (Online)

Kana Okazaki-Sakaue, “Clinical Improvisation in Music Therapy - Case studies and Workshop”, Lecture and Workshop, Annual Meeting of the Nordoff-Robbins Music Therapy Program, 12.13.2020, Korean Center for Nordoff-Robbins Music Therapy, Korea. (Online)

Tetsushi Nonaka, “How do we control the encounters with the environment?”, 54th Annual Philosophy Colloquium - What’s Next!? - Embodiment and the Future, 2.28. 2021, University of Cincinnati (招待講演, オンライン参加)

(8) 表現系講座の研究の総括と課題

人間発達研究における表現領域をどのように設定し、専門分野を相互にいかに関連させるかは、当系講座の長年にわたる課題である。教育においてはその相乗作用に一定の成果をあげているが、研究においてはそれぞれの専門性の深まりにともなって、そこに一律に適用できる評価指標を見出すことは難しいと言わざるをえない。しかし一方、当系講座の教員は、それぞれの分野では独自で顕著な研究活動を展開しており、すでに高い評価を得ていることも事実である。そのことは当年度の業績にも現れていよう。こうしたことをふまえるならば、各分野の連携や協同を安易に言うのではなく、その実効性を求め、学術・文化全体の本質でもある多様性は担保しながら、「表現」を核にした学術研究分野としての組織的フィッティングの模索が課題となろう。

●からだ系講座

(1) 国際共同研究

研究代表者：石原暢

共同研究者：Eric S. Drollette (University of North Carolina at Greensboro), Sebastian Ludyga (University of Basel), Charles H. Hillman (Northeastern University), Keita Kamiyo (University of Tsukuba)

研究課題：The effects of physical activity on executive functions in children: Moderation role of baseline cognitive performance and executive function demands
研究概要：Findings regarding the effects of regular physical activity on cognition in children are inconsistent due to a number of demographic factors and experimental considerations. The present study is designed to examine baseline cognitive performance and executive function demands, as possible factors underlying the lack of consensus in the literature, by investigating the moderating role of those factors on the effects of physical activity on cognition.

研究代表者：石原暢

共同研究者：Eric S. Drollette (University of North Carolina at Greensboro), Sebastian Ludyga (University of Basel), Charles H. Hillman (Northeastern University), Keita Kamijo (University of Tsukuba)

研究課題：The effects of acute aerobic exercise on cognitive function: A systematic review and meta-analysis of individual participant data

研究概要：The aim of the present study is to investigate whether the effects of acute exercise on cognitive performance would be moderated by executive function conditions and pre-test performance. The present individual participant data meta-analysis further extend our understanding of the general versus specific nature of the effects of acute exercise by investigating of the moderating roles of executive function conditions and pre-test performance simultaneously.

研究代表者：石原暢

共同研究者：Sebastian Ludyga (University of Basel), Uwe Pühse (University of Basel), Atsushi Miyazaki (Waseda University)

研究課題：The relationship of physical activity to executive function via brain structure and function in children with and without mental disorders

研究概要：The project investigate the prediction of changes in executive function by baseline physical activity and body mass index in children and adolescents with a mental disorder. It is further examined whether brain function and structure mediate this association. Screen time, sleep, stress, socioeconomic status, pubertal status and other confounders are accounted for in the cross-lagged panel models.

研究代表者：石原暢

共同研究者：Mitchell Turner (Edith Cowan University), Philipp Beranek (Edith Cowan University), Kate Turner (Edith Cowan University), Job Fransen (University of Technology Sydney), Philipp Born (German Sport University Cologne), Travis Cruickshank (Edith Cowan University)

研究課題：The influence of age and maturation on the association between tennis experience and cognitive function in junior tennis players

研究概要：The aim of this study is to determine the association between tennis experience and cognitive measures, moderated by age and maturation, in Australian and German junior tennis players. Furthermore, this study aim to establish at what age tennis experience had the greatest influence on cognitive performance.

研究代表者：近藤徳彦

共同研究者：Dr. Toby Mundel, Massey Univ. NZ

研究課題：身体機能調節の統合的視点による熱中症リスク評価とその予防

研究概要：地球温暖化の影響で、日本では熱中症が大きな社会的課題となっている。この課題解決には体温と血圧の両調節から統合的に検討することが重要となる。しかし、これまでの予防対策は前者からのアプローチが多く、予防を検討する上では不十分である。本研究では身体の調節機能を統合的にみることで、これまでの熱中症予防の指針に新たな視点を加える。

研究代表者：近藤徳彦

共同研究者：Dr. Glen Kenny, University of Ottawa, Canada

研究課題：発汗と皮膚血流調節に関連する末梢機構の解明

研究概要：人の熱放散調節機構（発汗と皮膚血流調整機構）は、人の生体内の恒常性維持には欠かせない。発汗と皮膚血流調節にはアセチルコリンやノルアドレナリンなど神経伝達物質が関わっているが、これ以外にも多くの物質がその調節に影響している。この研究では発汗と皮膚血流調節に関連する末梢機構を神経伝達物質から解明する。

研究代表者：近藤徳彦

共同研究者：Dr. Nicola Gerrett, Vrije Universiteit, Amsterdam, the Netherlands

研究課題：年齢と暑熱順化が汗腺でのイオン再吸収能力に及ぼす影響

研究概要：汗腺では汗が皮膚表面に出てくるまでに、汗のイオン（塩分など）が皮内で再吸収されている。この機能は血液の恒常性維持や皮膚の健康にとって重要である。本研究では年齢とともにこの機能がどのように変化するのか、また、高齢者の暑熱順化によりこの機能が変化することを検討する。

研究代表者：長ヶ原誠

研究課題：ワールドマスターズゲームズ開催地におけるレガシー創出効果の検証とレガシー活性化指標の開発

共同研究者：国際マスターズゲームズ協会

研究代表者：長ヶ原誠

研究課題：五輪大会とワールドマスターズゲームズの連続開催による相乗効果モニタリング指標の開発

共同研究者：国際マスターズゲームズ協会

研究代表者：片桐恵子

共同研究者：Boston College, Harvard University 他

研究課題：Justice, Equity, and Inclusion for Older Workers

研究代表者：片桐恵子

共同研究者：Dublin City University

研究課題：Comparative concept of lifelong learning for senior citizens and its effects: International comparative study of Japan and Ireland

研究代表者：片桐恵子

共同研究者：Ewha Womans University, The University of Hong Kong

研究課題：Pursuit for Social Engagement in Post-corona Society

研究代表者：片桐恵子

共同研究者：Ewha Womans University 他

研究課題：Age integration: Building a new social paradigm in aged society

(2) 科研費による研究（代表分）

研究代表者：原田和弘

研究課題：心理学的要因が退職に伴う高齢夫婦の健康変化に及ぼす影響

研究資金：科学研究費補助金・若手研究（A）

研究概要：高齢者の健康的な生活習慣づくりを支援し、健康増進を目指すことの社会的意義は自明である。本人のみならず配偶者の生活習慣もリセットされる人生有数の出来事であるため、多くの高齢者夫婦にとって、健康的な生活習慣づくりのターニングポイントは退職である。研究では、健康心理学と老年心理学の理論に基づき、どのような心理学的要因が、退職に伴う高齢夫婦の生活習慣・健康状態の変化に影響を及ぼしているのかを明らかにする。

研究代表者：原田和弘

共同研究者：村上晴香（立命館大学スポーツ健康科学部）

研究課題：ドーパミンシステム系遺伝子多型に基づく運動習慣のオーダーメイド支援の可能性

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：本研究では、快感情や意欲に関する遺伝特性である、ドーパミンシステム系遺伝子多型によって、感情モチベーションが運動の習慣化に及ぼす影響力の強さが異なるかを明らかにする。本研究は、遺伝特性による“運動習慣のオーダーメイド支援”の実現を目指す芽生え期の研究であり、「どうすれば、運動の習慣化を効果的に支援できるようになるのか？そこに、遺伝要因をどう活かすのか？」という疑問に答えることに挑戦する。

研究代表者：石原暢

研究課題：身体活動が認知機能を改善・発達させる神経ネットワークの同定

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要：身体活動は、加齢に伴う認知機能の衰退予防だけでなく、子どもから青年期においても認知機能を改善，発達させるための1つの手段となり得ることが報告されている。しかし，身体活動が脳構造や機能に与える効果に関する知見は乏しい状況にある。磁気共鳴画像（MRI）を用いた研究により，身体活動は前頭前野背外側部や海馬の体積を増大させることが報告されているものの，脳の機能レベルで身体活動の効果を理解するためには，脳領域間の解剖学的ならびに神経活動レベルでの繋がりの変化を調べる必要がある。本研究は，20歳から60歳の健常者を対象に身体活動量と認知機能の成績に関わる脳の構造・機能的領域間結合の関連を詳細に検討し，身体活動が認知機能を改善，発達させる背景にある神経ネットワークの変化を明らかにする。

研究代表者：近藤徳彦

共同研究者：天野達郎，井上芳光，西保岳

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（B）

研究課題：運動と遺伝子が高温下での運動パフォーマンスに関係する汗イオン濃度調節に及ぼす影響

研究概要：運動と汗腺の構造に関連する遺伝子が汗イオン調節に及ぼす影響を明らかにし，それをもとに高温下での運動パフォーマンス低下の予防について検討する。

研究代表者：増本康平

共同研究者：佐藤幸治・原田和弘・塩崎麻里子（近畿大学）

研究課題：エンド・オブ・ライフにおける感情調整機能の機序と役割

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）

研究概要：本研究は，「高齢期の感情調整機能はなぜ低下せず，向上するのか？」また，「感情調整機能は高齢期の人間関係，社会的役割，健康の喪失にどのように影響するのか？」この二つの学術的問いを解明することを目的とする。

研究代表者：増本康平

共同研究者：原田和弘・塩崎麻里子（近畿大学）

研究課題：高齢者の自律支援に最適化された情報提示方法の確立

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：高齢者の自由意志を阻害しない，かつ，高齢者が後悔しない判断を支援するための，高齢者の意思決定時の認知バイアスを考慮した情報提示のあり方を確立するのが本研究の目的である。

研究代表者：近藤徳彦

研究資金：特別研究員奨励費

研究課題：高温高湿環境下での暑熱順化と脱順化が汗腺機能と皮膚血管拡張に及ぼす影響
研究概要：高温高湿・高温低湿環境下での暑熱順化と脱順化がどのように異なるのかを、汗腺機能と皮膚血管拡張機能から検討する。また、日本における夏の適応（季節変化）も加え、高温高湿環境下での暑熱順化特性を総合的に明らかにする。

研究代表者：岡田修一

研究課題：健康増進に資する社会的ネットワーク可視化手法の開発と地域介入の効果検証
共同研究者：近藤徳彦・増本康平・原田和弘・谷口隆晴（神戸大学システム情報学研究科）

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（開拓）

研究概要：地域コミュニティにおける人とのつながりを定量的に測定するデバイスと測定されたデータからつながりを可視化する統計手法の開発、及びこれらを用いた地域介入研究の効果検証を目的とする。

研究代表者：木村哲也

研究課題：手で軽い荷物を持つことによるトレッドミル歩行の安定化・効率化の確立

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（C）

研究概要：本研究は、手で軽い荷物を持つことによる歩行動作時のバランス安定化と機械的効率向上を、トレッドミル歩行において基礎的に確立することを目的としている。

研究代表者：河辺章子

研究課題：運動が苦手な人をなくすための運動制御能力テストの開発と習得支援への展開

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）

研究概要：身体運動の制御能力を構成する基本的要素を明確にするため、今までの研究とは逆の観点から運動が苦手な人の動作を詳細に分析し、随意運動制御の基本要素を明らかにした上で、運動の制御能力テストを開発し、運動が苦手な人への習得支援へと結びつける。

研究代表者：秋元忍

研究課題：1914年以前のイギリスにおける女性のホッケーの普及過程に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）

研究概要：1914年以前のイギリスにおける女性のホッケーのゲーム普及過程について、1) 組織化以前のゲームの実施状況、2) 女性単独の統括組織の設立、3) 組織化以降のゲーム普及過程、の3課題を設定し、検討を行う。

(3) 科研費による研究（分担者）

共同研究者：佐藤幸治

研究課題：ビタミンDと運動併用による筋肥大メカニズムの解明と新たなサルコペニア予

防法の開発（研究代表者：藤田聡）

研究資金：科学研究費補助金 基盤研究（B）

研究概要：高齢者における，ビタミンD摂取と，レジスタンス運動が，筋力・筋量・筋機能に及ぼす影響を生化学的解析により，メカニズムを明らかにすることを目的としている。

共同研究者：佐藤幸治

研究課題：エンド・オブ・ライフにおける感情調節機能の機序と役割（研究代表者：増本康平）

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）

研究概要：感情を調節する遺伝子多型（セロトニンレセプター等）の分析を行い，多型による感情調節機能との関係を解析する。

共同研究者：増本康平・溝口博（東京理科大学）・生田目美紀（筑波技術大学）・楠房子（多摩美術大学）・小川義和（国立科学博物館）・小林真（筑波技術大学）・加藤伸子（筑波技術大学）・杉本雅則（北海道大学）・江草遼平（明治学院大学）

研究課題：科学系博物館におけるユニバーサルデザイン手法の開発と実践モデルの提案（研究代表者：稲垣成哲）

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）（2018-2021）

研究概要：博物館におけるユニバーサルデザインの開発と実践を目的としたもの。

共同研究者：増本康平・木村哲也・佐藤幸治・坂本美紀・杉本雅則（北海道大学）・望月俊男（専修大学）

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発（研究代表者：山口悦司）

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）（2020-2022）

研究概要：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発

共同研究者：片桐恵子，木村忠正，森康俊，北村智，是永論

研究課題：日本人の情報行動，その四半世紀にわたる変遷と超高齢社会における課題の検討（研究代表者：橋元良明）

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）

研究概要：四半世紀にわたる日本人の情報行動の変化を捉えるとともに，高齢者まで含めた情報行動を初めて把握し，その課題を明らかにする。

(4) 地方自治体，神戸大学等

研究代表者：原田和弘

共同研究者：増本康平

研究課題：新型コロナウイルス感染症流行下における高齢者の運動不足解消支援の効果検証

研究資金：神戸市役所・大学発アーバンイノベーション神戸

研究概要：新型コロナウイルス感染症の流行は、高齢者の運動不足をもたらし、彼らの健康リスクを高めることが懸念されている。運動は、健康に大切と分かっているにもかかわらず習慣化に挫折しがちな行動の代表格のため、運動不足の健康リスクや自宅での運動法などの情報を発信するだけでは、運動不足を解消できない。一方、申請者らの実績では、高齢者の運動の習慣化には、運動の自己管理スキル(自己調整)を高める支援が有効である。そこで本研究では、運動の自己管理スキルを高める情報を中心としたリーフレット教材を開発し、週1回・7週、灘区での募集に応じた高齢者へ郵送することで、同感染症流行下でも彼らの運動時間を増大できるかを検証する。今後、本教材を神戸全体で提供することで、高齢者の運動不足解消と健康リスク低減を期待できる。

研究代表者：佐藤幸治

研究課題：性ステロイドホルモン増大による新規2型糖尿病予防法の開発～免疫調節システムに着目した基礎的メカニズムの解明～

研究資金：神戸大学イノベーションファウンド研究助成

研究概要：免疫調節システムである OSM の遺伝子を骨格筋細胞でノックアウトさせ、性ステロイドホルモンを増大させる栄養成分であるジオスゲニンを追加した時の糖代謝調節経路の応答・活性を解析することで、新規の糖代謝調節経路の解明を行う。

(5) 民間研究助成

研究代表者：原田和弘

共同研究者：増本康平，岡田修一

研究課題：グループ運動中の交流の量と質が高齢者のメンタルヘルス向上に及ぼす影響

研究資金：明治安田厚生事業団・若手研究者のための健康科学研究助成

研究概要：高齢者のメンタルヘルス向上には、一人で行うよりも、グループで運動を行ったほうが効果的である。ただし、グループ運動中の交流の程度には個人差が大きい。そこで本研究では、高齢者約150名へグループ運動介入を行い、介入中の交流の程度の違いによって、メンタルヘルスの向上効果が異なるかを検討する。本研究は、社会的な観点から、高齢者のメンタルヘルス向上に最適な運動様式の解明を目指す研究と位置づけられる。本研究から、グループ運動中にどのような交流を持つことが、メンタルヘルス向上により効果的であるのかを示唆できる。

研究代表者：佐藤幸治

研究課題：女子大学生の各性周期における運動刺激に対する生理・生化学的応答の解明

研究資金：戸部眞紀財団研究助成

研究概要：女子大生における卵胞期・黄体期・月経期における運動がエネルギー代謝や免疫機能に及ぼす影響を検討し、さらに栄養学的観点から月経随伴症状の原因及び予防法を検討する。

研究代表者：木村哲也

研究課題：間欠的な視覚情報が静的立位制御系に与える効果の検証

研究資金：木下基礎科学研究基金助成事業

研究概要：本研究は、ヒト静的立位のバランス制御系における、視覚情報処理の間欠性について基礎的に検討することを目的としている。

研究代表者：石原暢

共同研究者：森田憲輝（北海道教育大学）、紙上敬太（筑波大学）、高岸治人（玉川大学脳科学研究所）

研究課題：児童期の体力と「空気を読む力」の関係

研究資金：北海道体育学会 70 周年兼第 60 回大会記念「研究助成」

研究概要：他者に気を配る、他者の意図に沿って行動をするといった向社会性、いわば「空気を読む力」は円滑な社会生活を送る上で重要である。スマートフォンやインターネットの急速な流行に伴い、他者との面と向かった関わりが減少している現代社会において、向社会性の発達を解明する研究は重要度を増している。児童期の習慣的運動による体力向上は、身体的健康リスクを低下させるに留まらず、高次認知機能の発達を促し、学力を向上させることが示されている。この高次認知機能は学力だけでなく、向社会性とも関わることが示唆されている。したがって、児童期の体力は向社会性の発達とも関わっている可能性がある。本研究は、これまでに注目されてこなかった児童期の体力と向社会性の関係を明らかにする。

(6) 共同研究（企業）

研究代表者：近藤徳彦

研究課題：檜が人の生体反応や行動・発達に及ぼす影響の解明

研究資金：丸紅木材・株、有・新宅善廣商店（2020-2021）

研究概要：檜の匂いが生体の生理学的や精神的な機能に及ぼす影響を明らかにする。

(7) Web of Science 収録論文

Harada K, Masumoto K, Fukuzawa A, Touyama M, Sato K, Kondo N, Okada S. Social interaction in walking groups and affective responses among Japanese older adults. *Journal of Aging and Physical Activity*, 2020;28:287-293.

Bae S, Harada K, Lee S, Harada K, Makino K, Chiba I, Park H, Shimada H. The

effect of a multicomponent dual-task exercise on cortical thickness in older adults with cognitive decline: a randomized controlled trial. *Journal of Clinical Medicine*, 2020; 9: e1312.

Fukuzawa A, Katagiri A, Harada K, Masumoto K, Chogahara M, Kondo N, Okada S. Social networks as a factor in volunteering among elderly Japanese with lower socioeconomic status. *Japanese Psychological Research*, 2020; 62: 206-214.

Ishihara, T., Morita, N., Nakajima, T., Yamatsu, K., Okita, K., Sagawa, M., & Keita Kamijo. (in press). Differential effects of changes in cardiorespiratory fitness on worst- and best- school subjects. *npj Science of Learning*.

Ishihara, T., Yamazaki, K., Araki, A., Teraoka, Y., Tamura, N., Hikage, T., Omiya, M., Mizuta, M., & Kishi, R. (2020). Exposure to radiofrequency electromagnetic field in the high-frequency band and cognitive function in children and adolescents: A literature review. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 17 (24), 9179.

Ishihara, T., Miyazaki, A., Tanaka, H., & Matsuda, T. (2020). Identification of the brain networks that contribute to the interaction between physical function and working memory: An fMRI investigation with over 1,000 healthy adults. *NeuroImage*, 221, 117152.

Ishihara, T., Nakajima, T., Yamatsu, K., Okita, K., Sagawa, M., & Morita, N. (2020). Relationship of participation in specific sports to academic performance in adolescents: A 2-year longitudinal study. *Scandinavian Journal of Medicine and Science in Sports*, 30 (8), 1471-1482.

Ishihara, T., Nakajima, T., Yamatsu, K., Okita, K., Sagawa, M., & Morita, N. (2020). Longitudinal relationship of favorable weight change to academic performance in children. *npj Science of Learning*, 5 (4).

Shinohara, M., Kuroda, Y., Tomabechei, N., Ishihara, T., & Mizuno, M. (2020). Effects of milk intake combined with exercise on upper respiratory tract infection in older adults during winter. *Gazzetta Medica Italiana Archivio per le Scienze Mediche*, 179(6), 386-392

Amano T, Fujii N, Kenny GP, Nishiyasu T, Inoue Y, Kondo N. (2020) The relative contribution of α - and β -adrenergic sweating during heat exposure and the influence of sex and training status.

Exp Dermatol. Dec;29(12):1216-1224. doi: 10.1111/exd.14208. Epub 2020 Oct 21.

Amano T, Fujii N, Kenny GP, Inoue Y, Kondo N. (2020) Does α 1-adrenergic receptor blockade modulate sweating during incremental exercise in young endurance-trained men?

Eur J Appl Physiol. May;120(5):1123-1129. doi: 10.1007/s00421-020-04351-3. Epub 2020 Mar 27.

Ohashi T, Gerrett N, Shinkawa S, Sato T, Miyake R, Kondo N, Mitsuzawa S. (2020) Fluidic Patch Device to Sample Sweat for Accurate Measurement of Sweat Rate and Chemical Composition: A Proof-of-Concept Study. Anal Chem. Dec 1;92(23):15534-15541. doi: 10.1021/acs.analchem.0c03466. Epub 2020 Nov 10.

Amano T, Fujii N, Kenny GP, Okamoto Y, Inoue Y, Kondo N. (2020) Effects of L-type voltage-gated Ca²⁺ channel blockade on cholinergic and thermal sweating in habitually trained and untrained men.

Am J Physiol Regul Integr Comp Physiol. Nov 1;319(5):R584-R591. doi: 10.1152/ajpregu.00167.2020. Epub 2020 Sep 23.

Amano T, Sekihara S, Fujii N, Kenny GP, Inoue Y, Kondo N. (2020) Does the iontophoretic application of bretylium tosylate modulate sweating during exercise in the heat in habitually trained and untrained men?. Exp Physiol. Oct;105(10):1692-1699. doi: 10.1113/EP088797. Epub 2020 Aug 18.

Kanako Hamaguchi, Toshiyuki Kurihara, Masahiro Fujimoto, Koji Sato, Motoyuki Iemitsu, Takafumi Hamaoka, Kiyoshi Sanada (2020) Associations among Bone Mineral Density, Physical Activity and Nutritional Intake in Middle-Aged Women with High Levels of Arterial Stiffness: A Pilot Study. International journal of environmental research and public health 17(5)

Takumi Yokokawa, Koji Sato, Ryoko Narusawa, Kohei Kido, Risako Mori, Nobumasa Iwanaka, Tatsuya Hayashi, Takeshi Hashimoto (2020) Dehydroepiandrosterone activates 5' -adenosine monophosphate-activated protein kinase and suppresses lipid accumulation and adipocyte differentiation in 3T3-L1 cells. Biochemical

and Biophysical Research Communications 528(3) 614 - 620.

Masumoto, K., Harada, K., & Shiozaki, M. (2021, early view) Effect of Emotion Regulation on Mental Health of Couples in Long-term Marriages: One-year Followup Study. Japanese Psychological Research. <https://doi.org/10.1111/jpr.12325>

Masumoto K, Shiozaki M, Taishi N (2020) The impact of age on goal-framing for health messages: The mediating effect of interest in health and emotion regulation. PLoS ONE, 15(9), e0238989. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0238989>

Harada, K., Masumoto, K., Katagiri, K., Fukuzawa, A., Touyama, M., Sonoda, D., Chogahara, M., Kondo, N., & Okada, S. (2020). Three-year effects of neighborhood social network intervention on mental and physical health of older adults. *Aging & Mental Health*, 1- 11.

R Naruse, C. Taki, M Yaegashi, Y Sakaue, N Shiozawa, T Kimura. (2021) Attenuated spontaneous postural sway enhances diastolic blood pressure during quiet standing. *European Journal of Applied Physiology*. 121(1): 251-264.

A Nakata, M Kaneko, C Taki, N Evans, T Shigematsu, T Kimura & K Kiyono. (2021) Assessment of long-range cross-correlations in cardio-respiratory and cardiovascular interactions. *Philosophical Transactions of the Royal Society A*. In press.

Matsumura, Y. and Chogahara, M, (2020) Facilitative factors on career patterns of sports participation in middle-aged and older adults: A comparative study. *International Journal of Sport and Health Science*, <https://doi.org/10.5432/ijshs.2020>

(8) 国際共著論文

Ishihara, T., Drollette, E.S., Ludyga, S., Hillman, C.H., & Kamiyo, K. (2020). Baseline cognitive performance moderates the effects of physical activity on executive function in children. *Journal of Clinical Medicine*, 9(7), 2071.

Fujii N, Kenny GP, McGarr GW, Amano T, Honda Y, Kondo N, Nishiyasu T. (2020) TRPV4 channel blockade does not modulate skin vasodilation and sweating during

hyperthermia or cutaneous post-occlusive reactive and thermal hyperemia. *Am J Physiol Regul Integr Comp Physiol.* Oct 21. doi: 10.1152/ajpregu.00123.2020. Online ahead of print.

Schlader ZJ, Che Muhamed AM, Zheng H, Stannard SR, Kondo N, Cotter JD, Mündel T. (2020) Differences in dry-bulb temperature do not influence moderate-duration exercise performance in warm environments when vapor pressure is equivalent. *Eur J Appl Physiol.* Apr;120(4):841-852. doi: 10.1007/s00421-020-04322-8. Epub 2020 Feb 18.

Gerrett N, Amano T, Inoue Y, Kondo N (2021) The sweat glands' maximum ion reabsorption rates following heat acclimation in healthy older adults. *Exp Physiol.* Jan;106(1):302-315. doi: 10.1113/EP088486. Epub 2020 Oct 13.

(9) Web of Science 未掲載論文

Ishihara, T., Morita, N., Takagishi, H., & Kamiyo, K. (2020) Impulsive selfish behavior and contemplated prosocial behavior in children: A role of cognitive control and decision time. PREPRINT available at Research Square, DOI: 10.21203/rs.3.rs-142408/v1

T Matsumoto, M Egawa, T Kimura, T Hayashi (2021) Comparison between retrospective premenstrual symptoms and prospective late-luteal symptoms among college students. *Gynecological and Reproductive Endocrinology & Metabolism.* In press.

塩崎麻里子・佐藤望・増本康平 (2020) 認知症高齢者の家族介護者が代理意思決定場面で経験した後悔に関する質的調査研究. *老年社会科学*, 42, 200-208.

松村雄樹, 長ヶ原誠 (2020) 中高齢者における運動・スポーツ活動の実現要因に関する研究. *生涯スポーツ学研究*, 17(1), 1-11.

竹内真純・片桐恵子 (2021) エイジズム研究の動向とエイジング研究との関連: エイジズムからサクセスフル・エイジングへ. *心理学評論*, 63(4). 印刷中.

竹内真純・片桐恵子 (2021) 自己の将来としての高齢者と他者としての高齢者の生活イメージの比較. *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, 14(2). 印刷中

(10) 著書

- ・ Itoh, Y., Hikoji, K. and Chogahara, M. (2020) Baseball heritage in Japan: A case of the Masters Koshien. In G. Ramshaw, & S. Gammon, Baseball: Heritage, heroes, and home. University Press of Florida.
- ・ 秋元忍「スポーツ史から見た e スポーツ」, 青山学院大学総合研究所研究ユニット「五輪 e スポ」編, 川又啓子, 笈誠一郎, 川口洋司, 原田美穂, 大島正嗣, 秋元忍, 丸山信人著, 『e スポーツ産業論』, 同友館, 2020年6月, pp. 98-119.
- ・ 秋元忍「ホッケーの技術・戦術史」, 新井博, 小谷究編, 『スポーツ技術・戦術史』, 流通経済大学出版会, 2021年3月, pp. 219-238.

(11) 招待講演

近藤徳彦 (神戸大学) 「進化の過程で獲得した汗の調節機構」, 第28回日本発汗学会総会, 2020年11月7日, 東京医科歯科大学 (Zoom)

(12) 受賞

受賞者: 増本康平

受賞名: 第38回村尾育英会 学術賞

受賞理由: これまでに実施してきた一連の「おいへの適応に関する認知心理学的研究」が評価された。

受賞者: 長ヶ原誠

受賞名: 第23回秩父宮記念スポーツ医・科学賞

受賞理由: 「マスターズ甲子園」開催を通じた生涯スポーツ推進プロジェクト研究グループ代表

(13) からだ系の総括と課題

新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言下においても, できうる範囲での研究活動を教員各自が活発に行っており, 本年度も研究資金獲得を伴う研究の進展とその成果は着実に挙げられている。また, 今までの研究活動を評価されて, 増本准教授が村尾育英会学術賞, 長ヶ原教授が秩父宮記念スポーツ医・科学賞を受賞した。国際共同研究も拡大しつつあり, 来年度以降にその成果が表れてくるものと考えられる。

今後は各研究分野における更なる研究の進展とともに, 外部資金の獲得にも注力しつつ, 国際的な共同研究をさらに推進したい。また, 大学院生の研究活動について, 一層の指導と活動支援を行うことが課題である。

●学び系講座

(1) 国際共同研究

研究代表(本専攻教員)：山口悦司

共同研究者(海外)：クラーク=A=チン(ラトガース大学, USA)

共同研究者：坂本美紀(本専攻研究者), 増本康平(本専攻研究者), 木村哲也(本専攻研究者), 佐藤幸治(本専攻研究者)

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究(萌芽)

研究概要：高度な科学関連情報について、専門的知識を持たない市民であっても、情報について信頼できるかどうかの規準を持ち、複数の情報の真偽判断のみならず比較・統合するなどの高次の資質・能力・態度の総体を「科学関連情報評価能力」と暫定的に定義し、近年の学習科学で国際的に着目されている「エピステミック学習理論」を応用し、高度情報化社会に対応した科学関連情報評価能力の理論化を行い、その育成手法と実践モデルの開発に取り組む。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：望月俊男(専修大学)

共同研究者(海外)：クラーク=A=チン(ラトガース大学, USA), ランディ=M.=ジーマン(ラトガース大学, USA)

研究課題：一見矛盾する事実から真実を導き出す能力を育む協調学習環境の開発と実践的評価

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)(一般)

研究概要：認識的認知(Epistemic Cognition)の研究をもとに、複数の矛盾する事実の産出プロセスについて、汎用的に使える認識的規準を用いて適切に評価する能力の獲得を支援する協調学習環境を実現し、その実践的に取り組む。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：望月俊男(専修大学)

共同研究者(海外)：クラーク=A=チン(ラトガース大学, USA)

研究課題：ポスト真実社会の情報信頼再構築に向けた認識的能力育成に資する学習環境デザイン(継続)

研究資金：(公財)電気通信普及財団・研究調査助成

研究概要：ポスト真実社会の情報信頼再構築に向けた認識的能力育成に資する学習環境デザインを開発した。

(2) 国内共同研究等

本専攻研究者：稲垣成哲，山口悦司

研究代表者：野上智行（神戸大学名誉教授）

研究課題：幼年期における科学的素養醸成のための科学コミュニケーションに関する学際的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（A）（一般）

研究概要：幼年期の科学コミュニケーションを促進する実践プロトタイプの開発と評価，科学系博物館・動物園等の社会教育施設における実践モデルの実証を行っている。

本専攻研究者：稲垣成哲，山口悦司

研究代表者：武田義明（神戸大学名誉教授）

研究課題：生物多様性の実感的学習を可能とする SDGs を志向した里山環境保全教育プログラム

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）（一般）

研究概要：生物多様性の実感的学習を可能とする SDGs を志向した里山環境保全教育プログラムを開発している。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：坂本美紀（本専攻研究者）

共同研究者：伊藤真之（人間環境学専攻研究者）

研究課題：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシーの教師教育

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）（一般）

研究概要：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシーの教師教育モデルを開発している。

本専攻研究者：川地亜弥子，赤木和重

研究代表者：三木裕和（鳥取大学）

研究課題：知的障害，発達障害の教育目標・教育評価に関する研究：資質・能力論の観点から

研究資金：基盤研究（C）（一般）（課題番号 18K02366）

研究概要：現代日本のコンピテンシー論について教育目標・評価研究を通じて批判的に検討する。本年度は特に現代的な研究を行った。

本専攻研究者：川地亜弥子，赤木和重，勅使河原君江

研究代表者：川地亜弥子（神戸大学）

研究課題：日英における「意味深さの評価」の理論と実践に関する研究

研究資金：基盤研究（C）（一般）（課題番号 17K04549）

研究概要：日英の理論調査をもとに、意味深さの評価の理論と実践について検討した。本年は英国のレッスン・スタディ研究者との交流をオンラインで行った。

本専攻研究者：川地亜弥子，赤木和重，勅使河原君江，中谷奈津子

研究代表者：川地亜弥子（神戸大学）

研究課題：英国の初等教育におけるオーラシー育成——教育目標・評価，指導の実際，環境デザイン

研究資金：基盤研究（C）（一般）（課題番号 20K02516）

研究概要：英国初等教育におけるオーラシー（話す・聞くことによって育つ力）の教育について，文献収集・分析を行った。

本専攻研究者：川地亜弥子

研究代表者：植田健男（花園大学）

研究課題：「学習指導要領体制」の構造的変容に関する総合的研究

研究資金：基盤研究（A）（一般）（課題番号 20H00103）

研究概要：戦後初期の学習指導要領（1947，1951年版）の意義と内容について，その到達点を現代的観点から分析した。

本専攻研究者：渡邊隆信

研究代表者：宮本健市郎（関西学院大学）

研究課題：新教育運動期における自然保護運動の昂揚と環境教育の起源に関する比較的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究の目的は，新教育を主張した人物の思想，または新教育を実施した学校において，自然保護のための教育がどのような形で構想され，実施されたのかを確認し，それが人間中心（子ども中心）の教育を超える視点があったかどうかを考察する。

研究代表者（本専攻教員）：木下孝司

研究課題：幼児期における「内容と目的に応じた教示行為」の発達とその認知的基盤

研究資金：科学研究費助成事業基盤研究(C)

研究概要：幼児が，他者に教える内容と目的に応じて，教示行為を調整するプロセスを明らかにして，その能力と認知発達の間接的関連を検討した。

研究代表者（本専攻教員）：中谷奈津子

研究課題：保育所等における生活困難家庭に対する組織的支援と実践理論の構築

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：保育所等において生活困難を抱える家庭を早期に発見し，対応するための方策

を検討し、それを可能とする組織的特性、子どもへの影響を明らかにする。

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：稲垣恭子（京都大学）

研究課題：戦後日本における政治家・財界人の教育観に関する教育社会学的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（課題番号：17H02679）

研究概要：戦後日本の教育界に影響力を行使してきた政治家および財界人の教育観や教育政策との関係について、教育審議会等の検討を通して明らかにする。

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：土居安子（一般財団法人大阪国際児童文学振興財団）

研究課題：明治・大正期における児童文学・児童文化史の研究—巖谷小波未発表資料の検討を通して

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（課題番号：20K00335）

研究概要：巖谷小波が明治・大正期の児童文学・児童文化の分野で果たした役割について、小波の未発表資料を中心に明らかにするとともに、未発表資料のデータベース化を通して小波研究の研究基盤を整備する。

研究代表(本専攻教員)：稲原美苗

本専攻研究者：松岡広路，津田英二，稲原美苗（本研究科研究者：村山留美子）

研究課題：哲学プラクティスと当事者研究の融合：マイノリティ当事者のための対話と支援の考察

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（課題番号：19H01185）

研究概要：哲学・倫理学，当事者研究，ジェンダー学，社会教育学，環境リスク学などの領域の多様な知見を取り入れ，対話実践を支援に繋げることを目的とする研究である。

研究代表者：村上旬平（大阪大学）

本専攻研究者：稲原美苗

研究課題：障害者の親のQOLを高めるための歯科治療における包括的家族支援プログラムの開発

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究(萌芽)（課題番号：18K18601）

研究概要：障害者歯科の利用者の保護者を対象とし，歯科学，臨床哲学，ジェンダー学，臨床心理学，社会福祉学，看護学の見地から家族支援のあり方を考察する学際的研究である。

研究代表(本専攻教員)：清野未恵子

研究課題：腸内細菌を用いたニホンザル農地依存度の把握と加害レベル判定手法の確立

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：腸内細菌叢の相違から、野生のニホンザルで農地に出没する性質がある群れの科学的な判別手法の開発を行った。

研究代表(本専攻教員)：津田英二

共同研究者：稲原美苗・清野未恵子・赤木和重・岡崎香奈・大田美佐子・松岡広路

研究課題：障害者の文化芸術活動の実践分析に基づくエンパワメント評価及び支援システム開発研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (B) (代表：津田英二)

研究概要：障害者の文化芸術活動を対象として、1)それらがどのような効果をもたらえるものであるのか、2)その効果を把握する現実的な評価方法はいかなるものであるべきか、3)多様に展開されている障害者の文化芸術活動を社会や行政はいかに支援しえるか、という3点を明らかにする共同研究である。

研究代表(本専攻教員)：松岡広路

共同研究者：ヒューマン・コミュニティ創成研究センター (清野未恵子, 津田英二, 太田和宏, 井口克郎, 稲原美苗) およびESD推進ネットひょうご神戸 (国連大学 RCE)

研究課題：ESDプラットフォーム創成の方法と課題

研究資金：ESDプラットフォーム WILL 基金・神戸大学基金等

研究概要：SDGs/ESD を促進する「当事者性の交差」の具体的な場を研究開発し、その有効性を評価することを目的とする。マルチステークホルダーの多様な観点および多様な指標の観点で、具体的な教育装置の効果を検討し、ESDに資するプラットフォーム学習論のモデル化を図るものである。

研究代表(本専攻教員)：稲垣成哲

共同研究者：増本康平, 野中哲士, 溝口博 (東京理科大学), 楠房子 (多摩美術大学), 生田目美紀 (筑波技術大学), 加藤伸子 (筑波技術大学), 小林真 (筑波技術大学), 小川義和 (国立科学博物館)

研究課題：科学系博物館におけるユニバーサルデザイン手法の開発と実践モデルの提案

研究資金：基盤研究 (A) (一般) (課題番号 18H03660)

研究概要：各種科学系博物館におけるユニバーサルな課題を検討するとともに、その解決のためのデザイン手法を開発している。

本専攻研究者：稲垣成哲

研究代表者：杉本雅則 (北海道大学)

研究課題：実世界センシングデータからの行動 - 学習モデルの構築と学習支援環境の設計

研究資金：基盤研究 (B) (一般) (課題番号 19H04222)

研究概要：実世界センシングにより学習者の行動を常時取得し、構築される大規模時空間データを利活用するための研究を行っている。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：三村真弓（広島大学）

研究課題：音楽科固有の資質・能力の基礎となる音楽的感覚及び音楽能力育成カリキュラムと指導法

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：音楽的感覚及び音楽能力育成カリキュラムと指導法について開発した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：埋橋玲子（同志社女子大学）

研究課題：「音と声」に注目した保育者研修プログラム－ECERS 及び音環境調査に基づいて

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：ECERS 及び音環境調査による保育者研修プログラムを開発した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：寺見陽子（神戸松蔭女子学院大学）

研究課題：家庭養育と乳児保育の質の向上を促す家庭と乳児保育の連携プログラムの開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：0-3 歳児を中心とした家庭と園の連携に関するプログラムの国内外の実態調査を行った。

(3) 産学官共同研究等

研究代表(本専攻教員)：津田英二

共同研究者：赤木和重，大田美佐子，岡崎香奈，川地亜弥子，清野未恵子，稲原美苗，伊藤真之，河南勝，黒崎幸子，藤田雅子，多田千景

研究課題：地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築

研究資金：文部科学省「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」（代表：津田英二）

研究概要：知的障害者に大学教育を開くことをめぐる理論的・実践的課題を明らかにし、大学教育プログラムを開発・実施する実践的なモデル開発研究，及び兵庫県内の障害者の生涯学習機会創出のモデル開発を行う研究である。

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：就学前教育の質的充実に向けた調査研究

研究資金：文科省令和2年度「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」

「ICTや先端技術の活用などを通じた幼児教育の充実の在り方に関する調査研究」「位置測位データを活用した個々の幼児の育ちと学びの理解の深化と、教師の省察、家庭との連携の充実につながるICTの活用方法に関する調査研究」

研究概要：ICTを活用した、保育者の幼児理解の深化と実践、家庭との連携方法を開発した。

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究～公開保育と実践検討を中心に～

研究資金：令和2年度神戸市共同研究

研究概要：神戸市の乳幼児教育の保育者の専門性を研究するもの。特に本年度は200以上の事例検討、遠隔での公開保育、交流会等を、全市をあげて実施した。

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：保育のICT環境に関する実態調査と保育者支援システム創りに関する研究

研究資金：令和2年度 大学発アーバンイノベーション神戸

研究概要：神戸市の乳幼児教育施設のICT環境および活用状況の実態を調査した。また地域における研修および保育者支援拠点システムを開発した。

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：ICTを活用したドキュメンテーションツールの開発～「おうちえん」についての機能強化、新展開に関わる共同研究～

研究資金：産官学共同研究（神戸大学・(株)神戸大学イノベーション・(株)スマートエデュケーション）

研究概要：産官学連携による園と家庭との連携ツールを開発した。附属幼稚園における「おうちえん」の実証研究を踏まえ、ドキュメンテーションツールを開発した。

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：0歳児から6歳児までの保育・教育を考える－非認知的能力はどのようにして育まれるのか－

研究資金：令和2年度大阪府私立幼稚園連盟共同研究 寄付金

研究概要：0歳児から6歳児までの非認知的能力の育成方法についての実践開発を行った。同研究の成果を書籍化出版した。

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の視点から子どもの育ちをとらえる

研究資金：令和2年度福井県私立幼稚園・認定こども園協会共同研究 寄付金

研究概要：幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿に基づく、教育実践開発を行った。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：岩橋道世（こども園るんびにい）

研究課題：3歳未満児における保育内容の評価に関する研究～人的環境，物的環境，言語環境の研究から見えてきたものを土台として～

研究資金：令和2年度厚生労働省 日本保育協会保育科学研究所「指定研究」

研究概要：こども園における0-3歳児保育の内容評価について，実態調査を行いその現状を明らかにした。

(4) 国際会議発表論文 (Web of Science 収録国際会議論文)

Egusa, R., Komiya, N., Kusunoki, F., Mizoguchi, H., Namatame, M., & Inagaki, S. (2020). Development of a Learning-Support System for Science Using Collaboration and Body Movement for Hearing-Impaired Children: Learning Support for Plant Germination and Growth Conditions. In K. Miesenberger, R. Manduchi, M. (Eds.), Computers Helping People with Special Needs. ICCHP 2020. Lecture Notes in Computer Science, vol 12377. (pp.157-165) Springer.

Shingai, Y., Aoki, R., Takeda, Y., Kusunoki, F., Mizoguchi, H., Sugimoto, M., Funaoi, H., Yamaguchi, E., & Inagaki, S. (2020. 5). Learning support game system for sustainable development goals education: Effects of improved user interface on satoyama forest management learning. Proceedings of 12th International Conference on Computer Supported Education, Volume 1, 428-435.

Yago, K., Shingai, Y., Kobayashi, W., Aoki, R., Takeda, Y., Kusunoki, F., Mizoguchi, H., Sugimoto, M., Funaoi, H., Yamaguchi, E., & Inagaki, S. (in press). Satoyama forest management learning game for SDGs education: Comparing the effect of providing additional information in the first half and latter half of the game. Proceedings of CSEDU 2021.

(5) 著書

中谷奈津子・鶴宏史・関川芳孝（編著）『保育所等の子ども家庭支援の実態と展望：困難家庭を支えるための組織的アプローチの提案』中央法規，2021年2月

Kitano, S. (2020). The praxis of local professional groups exploring alternatives for the banking concept of early childhood education in Japan. Michel Vandenbroeck (ed.) Revisiting Paulo Freire's Pedagogy of the Oppressed: Issues and Challenges in Early Childhood Education. Routledge. pp.134-146 (with Peer Review).

稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優（編著）『フェミニスト現象学入門—経験から普通を問い直す』ナカニシヤ出版，2020年6月。

INAHARA, Minae, The art of pain and inter-subjectivity in Frida Kahlo's self-portraits. Encountering Pain Hearing, seeing, speaking. Deborah Padfield and Joanna M. Zakrzewska (eds.) UCL Press, 219-29, 2021.

(6) 論文

吉永潤(2020)「個別事象の二項関係で学ばせる社会科授業の提案—『個別事象対一般概念』図式の優越性を抜け出すために」, 歴史地理学, 第62巻, 45-64. (査読あり)

渡邊隆信(2020)「共同体としての学校」の起源と史的展開—ドイツ新教育における「ゲームインシャフト」概念に着目して—, 教育学研究, 87(4), 495-506. (査読あり)

高橋あおい・山口悦司・稲垣成哲（印刷中）「国立科学博物館の展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」の理念」『科学教育研究』第45巻, 第1号. (査読あり)

俣野源晃・山本智一・山口悦司・坂本美紀・神山真一（印刷中）「複数の証拠を利用するアーギュメント構成能力の育成：小学校第5学年「電流がつくる磁力」の事例」『理科教育学研究』第62巻, 第1号. (査読あり)

新階幸也・青木良太・小林和奏・武田義明・楠房子・溝口博・杉本雅則・舟生日出男・山口悦司・稲垣成哲（印刷中）「STEM教育での課題解決能力獲得に向けた学習支援システム「里山管理ゲーム」：複数の里山への対応による学習効果に関する検討」『科学教育研究』第45巻, 第2号. (査読あり)

高橋あおい・神山真一・山口悦司（印刷中）「小学校理科の指導法に関する科目における遠隔会議システムを利用した教員養成実地指導講師による講義の実践的検討」『教育科学論集』第24号. (査読あり)

高橋あおい・山口悦司（2021）「小学校理科の指導法に関する科目における遠隔会議システムを利用した模擬授業の実践的検討」『日本科学教育学会研究会研究報告』第35巻, 第3号, pp. 9-14. (査読なし)

中谷奈津子, 生活困難家庭の早期発見に関する保育者の敏感さと他機関連携：保育所等の組織特性と保育者の支援プロセスに焦点を当てて, 子ども家庭福祉学, 第20号, 27-39,

2020 (査読あり)

目黒強, 課外読み物としての松山思水『喜劇と喜歌劇 アンポンタン』の位相, 大阪国際児童文学振興財団 研究紀要, 34, 1-11, 2021 (査読あり)

清野未恵子「SDGsを切り口としたサービスラーニングの可能性—神戸大学ESDコースの取り組み—」『ふくしと教育』(28), 2020年2月, pp.12-15 (査読なし)

清野未恵子「柿の利活用を通じた多様な主体による獣害対策の可能性—兵庫県丹波篠山市の事例から—」『Wildlife Forum』24(2), 2020年2月, pp.3-6 (査読なし)

清野未恵子「<SDGsのためのESD>という潮流におけるエージェンシーの可能性」『ESD実践研究 2019』2020年7月, pp.65-67 (査読なし)

井上太一, 猪原風希, 辻合悠, 津田英二「非対称的関係の学習論: 障害者の教育実践が提起する学びの形」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』14(2), 2021年3月, pp.59-67 (査読なし)

池田喬・稲原美苗, 書評 ヤーコ・セイックラ, トム・アーンキル『開かれた対話と未来—今この瞬間に他者を思いやる—』, 思考と対話, 第2号, 107-8, 2020.

(7) 国際会議発表

Ohyama, M., Baba, H., & Yoshinaga, J. (2020). Construction of Debriefing Designed for Applying Experiences of History Game to Contemporary Issues. In Ma, M., Fletcher, B., Göbel, S., Hauge, J.B., Marsh, T (Eds.), *Serious Games, Proceedings of Joint International Conference, JCSG2020* (pp.263-275). Springer. (遠隔発表)

Mochizuki, T., Chinn, C., Zimmerman, R., & Yamaguchi, E. (2020. 6). Reasoning about disagreements: Instructional design to improve thinking about controversial multiple documents. In M. Gresalfi, & I. S. Horn (Eds.) *The Interdisciplinarity of the Learning Sciences: 14th International Conference of the Learning Sciences, Vol.3*, 1609-1612.

Aoki, R., Shingai, Y., Inagaki, S., Mizoguchi, H., Takeda, Y., Kusunoki, F., Yamaguchi, E., Funaoi, H., & Sugimoto, M. (2020. 6). The “Satoyama Management Game” for teaching about the conservation of the satoyama environment: User evaluation with elementary school students based on eye tracking. *Proceedings of*

EdMedia + Innovate Learning 2020, 663–668.

Shingai, Y., Aoki, R., Takeda, Y., Kusunoki, F., Mizoguchi, H., Sugimoto, M., Funaoi, H., Yamaguchi, E., & Inagaki, S. (2020. 6). Satoyama forest management game: A learning support system for vegetation succession over 300 years to achieve sustainable development goals. *Proceedings of EdMedia + Innovate Learning 2020*, 731–736.

Sakamoto, M., Yamaguchi, E., Yamamoto, T., Inagaki, S., Wakabayashi, K., & Tokura, S. (2020). An intervention study on student's decision-making using trade-offs to resolve socio-scientific issues. In Levrini, O. & Tasquier, G. (Eds.), *Electronic Proceedings of the ESERA 2019 Conference, Part 5 (co-ed. Papadouris, N., & Testa, I.)*, (pp.722–729). University of Bologna.

Tokura, S., Yamaguchi, E., Sakamoto, M., Yamamoto, T., Inagaki, S., Wakabayashi, K., & Matano, M. (2020). Investigating perspective-taking on socioscientific issues among Japanese primary school students. In Levrini, O. & Tasquier, G. (Eds.), *Electronic Proceedings of the ESERA 2019 Conference, Part 8 (co-ed. Laherto, A., & Rybska, E.)*, (pp.949–974). University of Bologna.

Asahina, S., Kawaguchi, S., Takeda, Y., Funaoi, H., Yamaguchi, E., Kusunoki, F., Sugimoto, M., Mizoguchi, H., Inagaki, S. (2020). Evaluation of learning support function of simulation game for forest management. In Levrini, O. & Tasquier, G. (Eds.), *Electronic Proceedings of the ESERA 2019 Conference, Part 9 (co-ed. Dillon, J., & Zeyer, A.)*, (pp.1056–1061). University of Bologna.

Ito, M., Kusunoki, F., Inagaki, S., & Matsuoka, K. (2020). Manga method for supporting explanation of exhibit in science museums: a case study of the Toyohashi Museum of National History. *13th annual International Conference of Education, Research and Innovation (ICERI2020)*, pp.1671–1677, November 9–10.

(8) 国際シンポジウムの企画・運営

Ayako Kawaji, Takanobu Watanabe, Takashi Kinoshita, Toshio Funaki, Koichi Yamashita: Educational reform and teacher education, Kobe University, 2021.1.26.

(9) 教員の受賞

受賞者：吉永潤

受賞名：日本シミュレーション&ゲーミング学会優秀賞

受賞年月日：2020年12月6日

(10) 教育系講座の研究の総括と課題

今年度の困難な状況の中にあっても、教育系講座の各教員の活発な研究成果が表れている。国際共同研究と国内共同研究のそれぞれに進展があり、双方とも研究資金の獲得を伴って着実に進行している。今後の論文発表、共同研究成果発表等に結びつくことが期待される。系講座を超えた学内の共同研究の組織に積極的であることも特徴として挙げられる。著書出版は和文・欧文で計3件あり、成果の社会発信が進められている。論文発表、国際会議発表共に活発であり、教員個人の研究についても、1件の受賞があった。

(人間発達専攻長 稲垣成哲)

7.7.2. 人間環境学専攻

人間環境学専攻は、法学、経済学、社会学、理学、工学、農学、生活科学等の領域の研究の学際的な協働のもとで、「人間の発達を支える環境」に係る諸事象について、「人間の発達を促進し、支援する環境要因の解明」という視点から、総合的な教育研究を実践してきた。この専攻に含まれる「人間環境学講座環境基礎科学系教育研究分野」は、人間を取り巻く自然環境や多様化・高度化した情報環境が人間発達に及ぼす要因を解明すると同時に、それに基づく高度な科学技術の開発を目指している。また、「人間環境学講座環境形成科学系教育研究分野」は、技術進歩と制度発展により多様化・複雑化した人間を取り巻く生活環境と、グローバル化の進行による社会環境の変化が人間発達に及ぼす要因を解明すると同時に、それらが引き起こす問題状況の克服の方向性を探究する教育研究分野である。

本専攻では、多分野の教員が自身のテーマを発展させ、多彩な研究プロジェクトに従事することで、人間環境学と研究ネットワークの発展に貢献してきた。人間環境学に関する多様なプロジェクトを国内外で共同実施し、統括する役割をはたしている。また、それらの業績を論文や著書としてまとめ、報告している。

研究公表の内訳と数は、(1) 研究プロジェクト（代表者で、研究費総額200万円以上）計25件、(2) 国際共同研究 計11件、(3) 教員の受賞 計1件、(4) 国際共著論文 計22報、(5) 著書 計20報（単著1報、共著19報）、(6) WoS 論文 計52報、(7) その他論文 計37報である。

以下に、本専攻研究者が展開する研究の概要と成果内容を紹介する。

(1) 研究プロジェクト（専攻研究者が代表者で、研究費総額200万円以上）

<自然環境論>

研究代表者（本専攻教員）：青木茂樹

共同分担者：中野敏行（名古屋大学）、連携研究者：高橋覚（本専攻教員）

研究課題：気球搭載型エマルジョン望遠鏡による宇宙ガンマ線未解決課題の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (S)

研究概要：気球搭載型のエマルジョン望遠鏡を開発し、天体などからのガンマ線観測を行う。

研究代表者（本専攻教員）：蘆田弘樹

研究課題：電気エネルギーを利用し大気CO₂を固定するバイオプロセスの研究開発 CO₂取込み・濃縮機構の付与

研究資金：NEDO ムーンショット型研究開発事業／地球環境再生に向けた持続可能な資源循環を実現

研究概要：微生物へのCO₂取込み・濃縮機構を導入し、CO₂資源化のためのホスト生物を創製する。

研究代表者（本専攻教員）：蘆田弘樹

研究課題：CO₂固定酵素ルビスコの機能発現最適化による光合成の機能改良

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (B)

研究概要：CO₂固定酵素ルビスコの機能発現最適化を行い植物の光合成能向上を目指す。

研究代表者（本専攻教員）：蘆田弘樹

研究課題：光合成CO₂固定代謝の進化的分子基盤の解析

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：光合成生物の進化過程でCO₂固定代謝経路がどのように確立された分子機構を解析する。

研究代表（本専攻教員）：丑丸敦史

研究課題：複雑な花形態が適応的になる生態学的条件の解明：種間比較・群集間比較を通じた検討

共同研究者：石井博（富山大学）、岡本朋子（岐阜大学）

研究資金：文部科学省・科学研究費補助金（基盤研究B）

研究概要：複雑な形をした花（複雑花）が単純な形をした花（単純花）よりも適応的になる生態学的な条件を明らかにするため、複数の草原群集を詳細に調べ検証する。

研究代表者（本専攻教員）：江原靖人

研究課題：あらゆる新興・再興感染症を標的にする糖鎖修飾 siRNA の創製

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (C)

研究概要：新興・再興感染症ウイルスの感染初期においては、ウイルス糖鎖と宿主細胞の糖鎖レセプターとの相互作用が生じることに着目し、標的性を有した新規 siRNA の創製を行う。

研究代表者（本専攻教員）：大串健一

研究課題：急激な温暖化に対する深海生物の応答の研究：ベーリング海の底生有孔虫の解析

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C）

研究概要：ベーリング海の最終氷期の底生有孔虫群集を解析し、深海底の環境変動と群集変遷を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：窪田薫

共同分担者：石川剛志（海洋研究開発機構）

研究課題：過去 700 万年間の大気中二酸化炭素濃度の連続記録の作成

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B）

研究概要：海底堆積物中の有孔虫のホウ素同位体分析から古代の大気中二酸化炭素濃度を復元し、地球の気候システムの理解を深める。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

研究課題：低波数ラマン分光法を利用した高分子の分子間相互作用の直接観察

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B）

研究概要：低波数領域のスペクトルから高分子の分子間相互作用の直接観察を目指す。

研究代表者（本専攻教員）：高橋覚

研究課題：宇宙高エネルギーガンマ線の偏光観測の開拓

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B）

研究概要：気球搭載型のエマルジョン望遠鏡を開発し、天体などからのガンマ線観測を行う。

研究代表者（本専攻教員）：高見泰興

研究課題：性的形質の緯度クラインをもたらす性淘汰の環境依存性の解明

共同研究者：Jong Kuk Kim（Kangwon National University, Korea）, Jun Lark Kim

（Uiduk University, Korea）, Yong Hwan Park（Korea National Arboretum）

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B）

研究概要：朝鮮半島産ツヤオサムシ類の交尾器形態の緯度クラインの成因を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同分担者：山中裕樹（龍谷大学）

研究課題：環境 DNA 分析による繁殖レジームの多種同時分析系の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B）

研究概要：環境 DNA 分析によって魚類の繁殖レジームを網羅的に分析するための手法を開発する。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同分担者：駒井智幸（千葉県立中央博物館），中野智之（京都大学）

研究課題：無脊椎動物における調査方法の開発と実践，ならびに基盤データの整備

研究資金：環境研究総合推進費・戦略的研究開発課題（SII-7）

研究概要：深海域における無脊椎動物の多様性を推定するための手法として環境 DNA 分析を適用するための手法を開発する。

<数理環境論>

研究代表者（本専攻教員）：長坂耕作

研究課題：代数曲面の近似・変形・補間の各操作に適する数値・数式融合計算の開発と検証

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C）

研究概要：代数的な性質を用いた CG や CAD 等のために必要となる基盤的な計算アルゴリズムを開発し，その適用可能性を検証する。

<生活環境論>

研究代表者（本専攻教員）：平山洋介

研究課題：超高齢・持ち家社会における住宅相続の増大と階層化

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：社会階層化の新たなドライバーである住宅資産相続の実態の解明

研究代表者（本専攻教員）：佐藤真行

共同研究者：林岳（農林水産政策研究所），田畑智博（神戸大学）

連携研究者：栗山浩一（京都大学），國井大輔（農林水産政策研究所），山口臨太郎（国立環境研究所）

研究課題：国・地方公共団体における生態系勘定の導入に向けた研究

研究資金：環境省受託研究（環境経済の政策研究）

研究概要：2010 年に名古屋で開催された COP10 愛知目標に向けた生態系勘定の開発を行う。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤真行

共同研究者：源利文（神戸大学），村山留美子（神戸大学），小林勇太（横浜国立大学）

研究課題：新型コロナウイルスの感染拡大下での都市の生態系サービスとその評価

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸

研究概要：外出制限を踏まえた都市における生態系サービス評価を行う。

研究代表者（本専攻教員）：大野朋子

共同研究者：大形徹（大阪府立大学）

研究課題：伝統的文化を背景とした植物利用が地域性の形成と地域環境に与える影響に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C）

研究概要：宗教や伝統工芸など文化的背景を持ちながら利用される植物の栽培，維持，逃げ出しが地域景観と自然環境に与える影響を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：大野朋子

共同研究者：田畑智博（本専攻教員），村山留美子（本専攻教員）

研究課題：感染症対策下における都市公園の重要性評価とこれからの公園利用への提案

研究資金：若手研究者への研究活動経費助成制度大学発アーバンイノベーション神戸（令和2年度）

研究概要：都市公園での人々の利用状況から，公園の重要性評価を行う。この成果から神戸市の再整備計画に寄与する今後の，感染対策を踏まえた都市公園のあり方や利用方法を提案する。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

研究課題：トポロジカルクロマチンマッピングによる染色体高次構造の解明

研究資金：2020年度三菱財団自然科学研究助成

研究概要：物理学的アプローチであるトポロジカルクロマチンマッピングを発展させ，生物学の重要命題である染色体軸，クロマチン繊維，タンパク質，DNAの担体である染色体の高次構造と機能について明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Stefan Wanke（Technische Universität Dresden）

研究課題：Characterization of two complementary Hydrangea collections

アジサイの相互補完的遺伝資源植物コレクションの構築

研究資金：二国間交流事業共同研究

研究概要：ドイツのザクセン州立植物園ならびに神戸市森林植物園に自生するアジサイ植物材料を用いて，アジサイ植物材料の選抜と特性評価，評価法の統一化，染色体標本解析，倍数性，ゲノム解析を実施する。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：福井希一（大阪大学薬学研究科），Kornsorn Srikulnath（Kasetsart University, Thailand）

研究課題：Development of nano-visualization for structural analyses of genetic materials and early infection process for further innovation of functional bio-

nanotechnology

遺伝物質の構造および初期感染過程のナノ可視化法の開発によるバイオナノテクノロジーの新たな展開

研究資金：戦略的国際共同研究プログラム（SICORP）

研究概要：アジアに特有の生物種を材料に用い、細胞核および細胞分裂期に構築される遺伝物質の担体である染色体の構造についてナノ可視化法を用いて明らかにする。

<社会環境論>

研究代表者（本専攻教員）：浅野慎一

研究課題：戦後日本の夜間中学とその生徒の史的変遷：ポスト・コロニアリズムの視座から

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C）

研究概要：戦後日本の夜間中学とその生徒の変遷を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：岩佐卓也

研究課題：企業横断的労使関係の存立構造とその変容—ドイツを主な対象として

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C）

研究概要：企業横断的な労使関係の存立構造を実証的・理論的に明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：澤宗則

共同研究者：南埜猛（兵庫教育大）

研究課題：南アジア系移民のエスニック戦略とトランスナショナルな領域化の比較考察

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C）

研究概要：南アジア系移民（インド・ネパール・パキスタン・バングラデシュ）のエスニック戦略とトランスナショナルな領域化のプロセスを比較することにより、南アジア系移民社会の特質を明らかにする。

(2) 国際共同研究

<自然環境論>

研究代表者（本専攻教員）：蘆田弘樹

共同研究者：Antoine Danchin (Institut Cochin, Université Paris Descartes, France)

研究課題：光合成 CO₂ 固定酵素の分子進化

研究概要：光合成において CO₂ 固定を触媒する RuBisCO の進化的起源を解析した。

本専攻研究者：伊藤真之

共同研究者：森浩二（代表：宮崎大学）、上田佳宏（京都大学）、中澤知洋（名古屋大学）、松本浩典（大阪大学）、馬場彩（東京大学）、岡島崇、A. E. Hornschemeier, W. W. Zhang (NASA/ Goddard Space Flight Center) 他

研究課題：広帯域 X線高感度撮像分光衛星 FORCE (Focusing On Relativistic universe and Cosmic Evolution) ミッションの検討

研究概要：巨大質量ブラックホールの宇宙論的進化の解明等を目的とした広帯域 X線高感度撮像分光衛星 FORCE 計画の検討を行い、製作・打ち上げに向けて提案を行う。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

共同研究者：Sergei G. Kazarian (Imperial college London, UK)

研究課題：ATR-FTIR イメージング法を用いたポリマーブレンドの相分離と結晶化挙動の解析

研究概要：ATR-FTIR イメージング法を用いてポリマーブレンドの相分離に伴う分子間相互作用の変化を可視化することに成功した。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

共同研究者：Young Mee Jung, Yeonju Park (Kangwon National University, Korea)

研究課題：2次元相関分光法を利用した PHB ポリマーブレンドの分子間相互作用と高次構造の研究

研究概要：低波数領域と高波数領域のヘテロ 2次元相関分光法を用いて、PHB /PVPh ブレンドの分子間相互作用と高次構造を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

共同研究者：Andrey Shukurov (Charles University, Czech Republic)

研究課題：低波数ラマン分光法を用いたポリマーナノ粒子の物理的特性の研究

研究概要：プラズマ重合によって様々なサイズのポリマーナノ粒子の合成に成功した。本研究ではその物理的特性について低波数ラマンスペクトルの温度変化測定を用いて解析した。

本専攻研究者（本専攻教員）：高見泰興

共同研究者：Jong Kuk Kim (Kangwon National University, Korea), Jun Lark Kim (Uiduk University, Korea), Yong Hwan Park (Korea National Arboretum)

研究課題：朝鮮半島におけるオサムシ類の多様性と進化に関する研究

研究概要：気候変動に対するオサムシ群集の変動予測と、各種の地理的分化をもたらした生態的、歴史的要因の解明を行う。

<生活環境論>

研究代表者（本専攻教員）：田畑智博

共同研究者：Maciej M. Sokołowski (University of Warsaw)

研究課題：日欧におけるコージェネレーションの利用に関する研究

研究概要：日本と EU における熱電併給システム(コージェネレーション)の利用状況や課題について調査するとともに、気候変動緩和策としてのコージェネレーションのあり方を提案する。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Stefan Wanke (Technische Univeritat Dresden)

研究課題：Characterization of two complementary Hydrangea collections

アジサイの相互補完的遺伝資源植物コレクションの構築

研究資金：二国間交流事業共同研究

研究概要：ドイツのザクセン州立植物園ならびに神戸市森林植物園に自生するアジサイ植物材料を用いて、アジサイ 100 種について植物材料の選抜と特性評価、評価法の統一化、染色体標本解析、倍数性、ゲノム解析を実施する。

共同研究者：Kornsorn Srikulnath (Kasetsart University, Thailand)

研究課題：Development of nano-visualization for structural analyses of genetic materials and early infection process for further innovation of functional bio-nanotechnology

遺伝物質の構造および初期感染過程のナノ可視化法の開発によるバイオナノテクノロジーの新たな展開

研究資金：戦略的国際共同研究プログラム (SICORP)

研究概要：アジアに特有の生物種を材料に用い、細胞核および細胞分裂期に構築される遺伝物資の担体である染色体の構造についてナノ可視化法を用いて明らかにする。

共同研究者：Astari Dwirant (Department of Biology, Faculty of Mathematics and Natural Sciences, Universitas, Indonesia)

研究課題：Chromosomes Inner Structure Study using High- resolution Electron Microscopy

高感度電子顕微鏡を用いた染色内部構造

研究資金：寄付金

研究概要：染色体の内部構造について、様々な陽イオンの状態を変化させて明らかにする。

共同研究者：Misa Hayashida (NRC-NANO, National Research Council, Canada)

研究課題：3D observation of chromosome scaffold structure using electron tomography

電子トモグラフィーを用いた染色体スキャホールド構造の 3D 観察

研究概要：染色体を構成するクロマチン軸構造について、位相差トモグラフィーを用いて明らかにする。

(3) 教員の受賞

<自然環境論>

受賞者：窪田薫

受賞名：クリタ水・環境科学研究優秀賞

受賞対象：クリタ水・環境科学振興財団国内研究助成「長寿二枚貝殻を利用した北西太平洋の海水放射性炭素濃度の復元」

受賞日：令和2年8月28日

受賞理由：日本で最も長生きの冷水性二枚貝の殻を利用することで、北日本としては世界初となる、1950年以降の海水の放射性炭素濃度変動の連続記録を復元することに成功し、海洋炭素循環研究において重要なデータセットを提供したため。

(4) 国際共著論文 (海外との研究)

<自然環境論>

Abe K et al. (2020) Constraint on the matter-antimatter symmetry-violating phase in neutrino oscillations. *Nature* 580, 339.

Abe K et al. (2020) Search for Electron Antineutrino Appearance in a Long-Baseline Muon Antineutrino Beam. *Phys. Rev. Lett.* 124, 161802.

Agafonova N et al. (2020) First observation of a tau neutrino charged current interaction with charm production in the OPERA experiment OPERA Collaboration. *Euro.Phys.J.C.* 80, 699.

Taylor, K. et al. (in press) Plio-Pleistocene Continental Hydroclimate and Indian Ocean Sea Surface Temperatures at the Southeast African Margin. *Paleoceanography & Paleoclimatology*.

Starr, A. et al. (2021) Antarctic icebergs reorganize ocean circulation during Pleistocene glacials. *Nature* 589, 236-241.

Huiqiang Lu, Sergei G. Kazarian, Harumi Sato (2020) Macromol Simultaneous Visualization of Phase Separation and Crystallization in PHB/PLLA Blends with In Situ ATR-FTIR Spectroscopic Imaging. *Macromolecules*, 53, 9074-9085.

Pavel Pleskunov, Daniil Nikitin, Renata Tafiichuk, Artem Shelemin, Jan Hanus, Jaroslav Kousal, Zdeněk Krtouš, Ivan Khalakhan, Peter Kúš, Tatsuro Nasu, Tomoki

Nagahama, Chihiro Funaki, Harumi Sato, Marcel Gawek, Andreas Schoenhals, and Andrei Choukourov (2020) Plasma Polymerization of Acrylic Acid for the Tunable Synthesis of Glassy and Carboxylated Nanoparticles. *J. Phys. Chem. B*, 124, 668-

678.

Dian Marlina, Yeonju Park, Hiromichi Hoshina, Yukihiro Ozaki, Young Mee Jung, Harumi Sato (2020) A study on blend ratio-dependent far-IR and low-frequency Raman spectra and WAXD patterns of poly(3-hydroxybutyrate)/poly(4-vinylphenol) using homospectral and heterospectral two-dimensional correlation spectroscopy. *Analytical Science*, 36, 731-737.

Akiyama K, Jang TW, Park YH, Shinohara T, Konuma J, Liang H, Kubota K, Sota T, Ishikawa R, Kim JL, Kim JK, Takami Y (2020) Phylogeographical analysis of character displacement in feeding phenotypes of snail-feeding *Acoptolabrus* ground beetles. *Biological Journal of the Linnean Society* 131, 936-951.

Sota T, Hori M, Scholtz C, Karagyan G, Liang H, Ikeda H, Takami Y (2020) The origin of the giant ground beetle *Aplothorax burchelli* on St Helena Island. *Biological Journal of the Linnean Society* 131, 50-60.

Chen Z, Minamoto T, Lin L, Gao T (2021) An optional low-cost method of extracting environmental DNA of macro-organisms from filter membranes in large scale eDNA surveys. *Pakistan Journal of Zoology* 53(1): 253-272.

Chen J, Chen Z, Liu S, Guo W, Li D, Minamoto T, Gao T (2021) Revealing an invasion risk of fish species in Qingdao Underwater World by Environmental DNA metabarcoding. *Journal of Ocean University of China* 20(1): 124-136.

Osathanunkul M, Minamoto T (2020) A molecular survey based on eDNA to assess the presence of a clown featherback (*Chitala ornata*) in a confined environment. *PeerJ* 8: e10338.

Jo T, Tomita S, Kohmatsu Y, Osathanunkul M, Ushimaru A, Minamoto T (2020) Seasonal monitoring of Hida salamander *Hynobius kimurae* using environmental DNA with a genus-specific primer set. *Endangered Species Research* 43: 341-352.

Takeshita D, Terui S, Ikeda K, Mitsuzuka T, Osathanunkul M, Minamoto T (2020) Projection range of eDNA analysis in marshes: a suggestion from the Siberian salamander (*Salamandrella keyserlingii*) inhabiting the Kushiro marsh, Japan. *PeerJ* 8: e9764.

Itakura H, Wakiya R, Sakata MK, Hsu H, Chen S, Yang C, Yamamoto S, Minamoto T (2020) Estimations of riverine distribution, abundance and biomass of anguillid eels in Japan and Taiwan using environmental DNA analysis. *Zoological Studies* 59: 17.

<生活環境論>

Sato, M, Aoshima, I, Chang Y (2021), Connectedness to nature and the conservation of the urban ecosystem, *Forest Policy and Economics*, forthcoming

Hayashida M, Phengchat R, Malac M, Harada K, Akashi T, Ohmido N, Fukui K (2020) Higher-Order Structure of Human Chromosomes Observed by Electron Diffraction and Electron Tomography. *Microsc Microanal.* 20:1-7. doi: 10.1017/S1431927620024666.

Dwiranti A, Arifudin FS, Takata H, Ohmido N, Fukui K (2020) Application of the Chromosome Image Analyzing System (CHIAS) for Straightening Cation-treated Bent Chromosomes. *Microsc Res Tech.* 83(11):1411-1416. doi: 10.1002/jemt.23533.

Shenton M, Kobayashi M, Terashima S, Ohyanagi H, Copetti D, Hernández-Hernández T, Zhang J, Ohmido N, Fujita M, Toyoda A, Ikawa H, Fujiyama A, Furuumi H,

Miyabayashi T, Kubo T, Kudrna D, Wing R, Yano K, Nonomura KI, Sato Y, Kurata N (2020) Evolution and Diversity of the Wild Rice *Oryza officinalis* Complex, across Continents, Genome Types, and Ploidy Levels. *Genome Biol Evol.* 12(4):413-428. doi: 10.1093/gbe/evaa037.

Sartsanga C, Phengchat R, Fukui K, Wako T, Ohmido N. (2021) Surface structures consisting of chromatin fibers in isolated barley (*Hordeum vulgare*) chromosomes revealed by helium ion microscopy. *Chromosome Res.* 2021 Feb 22. doi: 10.1007/s10577-021-09649-2.

Siregar AY, Sartsanga C, Arifudin FS, Phengchat R, Salamah A, Ohmido N, Fukui K, Dwiranti A. (2021) Calcium ion significance on the maintenance of barley (*Hordeum vulgare*) chromosome compaction. *Micron.* 2021 Mar 3;145:103046. doi: 10.1016/j.micron.2021.103046

(5) 著書

<生活環境論>

(単著)

平山洋介(2020)『「仮住まい」と戦後日本——実家住まい・賃貸住まい・仮設住まい』青土社

(分担執筆)

<自然環境論>

丑丸敦史(2021) 生態学, 第2, 8章 生物の適応進化, 生物多様性, 化学同人 3月30日出版予定.

Ushimaru A, Uchida K, Ikegami M and Suka T (2020) Grasslands and shrublands in Japan. pp 785-799. in Goldstein MI & DellaSala L (eds.) . The Encyclopedia of the World's Biomes, Vol.3 section 6: Grasslands and shrublands - Sea of plants Elsevier, Oxford.

<生活環境論>

平山洋介(2020) 唯物論研究年誌 25 <復興と祝祭>の資本主義——新たな「災後」を探る, 第10章 ナノファイバーの医療, 衛生材料への応用, 被災した人たちが, ふたたび住む, 59-82, 大月書店

井上真理(2021) 不織布の最新開発動向, 第13章 不織布の物性測定, 265-278 (矢井田修監修: 信州大学/日本不織布協会) シー・エム・シー出版

佐藤真行(2021) 制度の質と持続可能性指標, 大塚直(編)『持続可能性と Well-being』, 日本評論社 近刊

蔡佩宜, 籠橋一輝, 佐藤真行(2021), 「ダム事業の意思決定支援ツールとしての多基準分析」, 『ダムと環境の科学IV』, 京都大学学術出版会, 近刊

<社会環境論>

井口克郎(2020)「介護人材政策の総括と課題」, 芝田英昭編著『検証介護保険施行20年—介護保障は達成できたのか』自治体研究社, pp.95-118

太田和宏(2021)「貧困の系譜と地域研究」, 児玉谷史朗他編著『地域研究へのアプローチ』ミネルヴァ書房, pp57-72

橋本直人(2021), 第2章「マックス・ウェーバーにおける「暴力 Gewalt」概念—「権力

Macht」 「支配 Herrschaft」 との対比から」, 左古輝人編『テキスト計量の最前線—データ時代の社会知を拓く』 pp. 43-69, ひつじ書房

原将也(2020) 第1章 地形と気候—起伏に富み, 水資源豊かな大地, 島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』明石書店, pp. 22-26

原将也(2020) 第6章 コッパーベルト—鉱山バブルによる都市の発達, 島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』明石書店, pp. 58-62

原将也(2020) 第14章 ザンビアの民族と言語—多様な民族と言語が共存する国, 島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』明石書店, pp. 104-108

原将也(2020) 第19章 ルンダー交易を通してキャッサバを取り入れた民族, 島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』明石書店, pp. 139-143

原将也 (2020) コラム12 たき火を囲んで語り継がれる昔話, 島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』明石書店, pp. 144-146

原将也(2020) 第21章 ルバレー少年の通過儀礼ムカンダ, 島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』明石書店, pp. 152-155

原将也(2020) コラム13 よみがえった先祖の霊マキシ, 島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』明石書店, pp. 156-158

原将也(2020) 第32章 ショッピングモールと市場—都市における大量消費と農村の自家消費, 島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』明石書店, pp. 217-221

原将也(2020) 第38章 東京オリンピックとザンビア—日本に響き渡った「ザンビア, バンザイ」の声, 島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』明石書店, pp. 247-251

Hara, M. The potential created by mobility: Social ties with strangers in the migration history of one family in northwestern Zambia. In *Development and Subsistence in Globalising Africa: Beyond the Dichotomy* (eds.) Takahashi, M., Oyama, S. and Ramiarison, H. A., Langaa RPCIG. in press

(6) WoS 論文 (10%論文には, 文頭に*を付す)

<自然環境論>

*Abe K et al. (2020) Constraint on the matter-antimatter symmetry-violating phase in neutrino oscillations. *Nature* 580, 339 (WoS “hot paper” Top 1%).

Abe K et al. (2020) Search for Electron Antineutrino Appearance in a Long-Baseline Muon Antineutrino Beam. *Phys. Rev. Lett.* 124, 161802.

Agafonova N et al. (2020) First observation of a tau neutrino charged current interaction with charm production in the OPERA experiment OPERA Collaboration. *Euro.Phys.J.C.* 80, 699

Iwachido Y, Uchida K, Ushimaru A Yokota S and Sataki T (2020) Nature-oriented park use of satoyama ecosystems can enhance biodiversity conservation in urban landscapes. *Landscape and Ecological Engineering* 16:163-172.

Inoue T, Yaida Y, Uehara Y, Katsuhara KR, Kawai J, Takashima K Ushimaru A and Kenta T (2021) The effects of temporal continuities of grasslands on the diversity and species composition of plants. *Ecological Research* 36:24-31.

Nikkeshi A, Hiraiwa MK, Ushimaru A, Hoshizaki K, Makita A and Inoue M (2021) Evaluation of sampling effort sufficient to assess pollen species richness on pollinators using rarefaction. *Applications in Plant Sciences* 9:e11411.

Sakai K, Ohkushi K, Shibahara A (2021) Biotic response of benthic foraminifera to OMZ variations in the northwestern Pacific since the last deglaciation, *Geo-Marine Letters*, 41(1) 5.

Taylor, K. et al. (in press) Plio-Pleistocene Continental Hydroclimate and Indian Ocean Sea Surface Temperatures at the Southeast African Margin. *Paleoceanography & Paleoclimatology*.

*Starr, A. et al. (2021) Antarctic icebergs reorganize ocean circulation during Pleistocene glacials. *Nature* 589, 236-241.

Seike, K., Shirai, K., Kubota, K., Ota, Y., Sassa, S. (2020) Does trace fossil size correspond with burrower population density? An example from the modern counterpart of the trace fossil *Bichordites*. *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology* 557, 109946.

Muramiya, Y., Yoshida, H., Kubota, K., Minami, M. (2020) Rapid formation of gigantic spherical dolomite concretion in marine sediments. *Sedimentary Geology* 404, 105664.

Yumiko Yamamoto, Hiromichi Hoshina, Harumi Sato (2021) Differences in Intermolecular Interactions and Flexibility between Poly(ethylene terephthalate) and Poly(butylene terephthalate) Studied by Far-Infrared/Terahertz and Low-Frequency Raman Spectroscopy. *Macromolecules*, 54, 2, 1052-1062.

Tatsuro Nasu, Yukihiro Ozaki, Harumi Sato (2020) Study of changes in water structure and interactions among water, CH₂, and COO⁻ groups during water absorption in acrylic acid-based super absorbent polymers using Raman spectroscopy. *Spectrochimica Acta Part A: Molecular and Biomolecular Spectroscopy*, 250, 119305.

Huiqiang Lu, Sergei G. Kazarian, Harumi Sato (2020) Macromol Simultaneous Visualization of Phase Separation and Crystallization in PHB/PLLA Blends with In Situ ATR-FTIR Spectroscopic Imaging. *Macromolecules*, 53, 9074-9085.

Pavel Pleskunov, Daniil Nikitin, Renata Tafiichuk, Artem Shelemin, Jan Hanus, Jaroslav Kousal, Zdeněk Krtouš, Ivan Khalakhan, Peter Kúš, Tatsuro Nasu, Tomoki Nagahama, Chihiro Funaki, Harumi Sato, Marcel Gawek, Andreas Schoenhals, and Andrei Choukourov (2020) Plasma Polymerization of Acrylic Acid for the Tunable Synthesis of Glassy and Carboxylated Nanoparticles. *J. Phys. Chem. B*, 124, 668-678.

Dian Marlina, Yeonju Park, Hiromichi Hoshina, Yukihiro Ozaki, Young Mee Jung, Harumi Sato (2020) A study on blend ratio-dependent far-IR and low-frequency Raman spectra and WAXD patterns of poly(3-hydroxybutyrate)/poly(4-vinylphenol) using homospectral and heterospectral two-dimensional correlation spectroscopy. *Analytical Science*, 36, 731-73.

Terada K, Nishimura T, Hirayama A, Takami Y (2021) Heterochrony and growth rate variation mediate the development of divergent genital morphologies in closely related Ohomopterus ground beetles. *Evolution & Development* 23, 19-27.

- Akiyama K, Jang TW, Park YH, Shinohara T, Konuma J, Liang H, Kubota K, Sota T, Ishikawa R, Kim JL, Kim JK, Takami Y (2020) Phylogeographical analysis of character displacement in feeding phenotypes of snail-feeding *Acoptolabrus* ground beetles. *Biological Journal of the Linnean Society* 131, 936–951.
- Sota T, Hori M, Scholtz C, Karagyan G, Liang H, Ikeda H, Takami Y (2020) The origin of the giant ground beetle *Aplothorax burchelli* on St Helena Island. *Biological Journal of the Linnean Society* 131, 50–60.
- Shinohara T, Takami Y (2020) Functional diversity and trade-offs in divergent antipredator morphologies in herbivorous insects. *Ecology and Evolution* 10, 5089–5096.
- Shimada J, Shimada M, Sugahara T, Tsunashima K, Takaoka Y, Tani A (2021) Phase equilibrium temperature and dissociation enthalpy in the tri-*n*-butylalkylphosphonium bromide semiclathrate hydrate systems. *Chem Eng Sci* 236: 116514.
- Maeda K, Nguyen VT, Suzuki T, Yamada K, Kudo K, Hikita C, Le VP, Nguyen MC, Yoshida N (2020) Network analysis and functional estimation of the microbiome reveal the effects of cashew nut shell liquid feeding on methanogen behaviour in the rumen. *Microb Biotechnol* 14(1): 277–290.
- Hoshino T, Nakao R, Doi H, Minamoto T. (2021) Simultaneous absolute quantification and sequencing of fish environmental DNA in a mesocosm by quantitative sequencing technique. *Scientific Reports* 11: 4372.
- Doi H, Akamatsu Y, Goto M, Inui R, Komuro T, Nagano M, Minamoto T (2021) Broad-scale detection of environmental DNA for an invasive macrophyte and the relationship between DNA concentration and coverage in rivers. *Biological Invasions* 23: 507–520.
- Sugiura K, Tomita S, Minamoto T, Mishina T, Iwata A, Abe T, Yamamoto S, Watanabe K (2021) Characterizing the spatial and temporal occurrence patterns of the endangered botiid loach *Parabotia curtus* by environmental DNA analysis using a newly developed species-specific primer set. *Ichthyological Research* 68(1): 152–157.

- Chen Z, Minamoto T, Lin L, Gao T (2021) An optional low-cost method of extracting environmental DNA of macro-organisms from filter membranes in large scale eDNA surveys. *Pakistan Journal of Zoology* 53(1): 253-272.
- Chen J, Chen Z, Liu S, Guo W, Li D, Minamoto T, Gao T (2021) Revealing an invasion risk of fish species in Qingdao Underwater World by Environmental DNA metabarcoding. *Journal of Ocean University of China* 20(1): 124-136.
- Osathanunkul M, Minamoto T (2020) A molecular survey based on eDNA to assess the presence of a clown featherback (*Chitala ornata*) in a confined environment. *PeerJ* 8: e10338.
- Jo T, Tomita S, Kohmatsu Y, Osathanunkul M, Ushimaru A, Minamoto T (2020) Seasonal monitoring of Hida salamander *Hynobius kimurae* using environmental DNA with a genus-specific primer set. *Endangered Species Research* 43: 341-352.
- Imamura A, Hayami K, Sakata MK, Minamoto T (2020) Environmental DNA revealed the fish community of Hokkaido Island, Japan, after invasion by rainbow trout. *Biodiversity Data Journal* 8: e56876.
- Kuwae M, Tamai H, Doi H, Sakata MK, Minamoto T, Suzuki Y (2020) Sedimentary DNA tracks decadal-centennial changes in fish abundance. *Communications Biology* 3: 558.
- Jo T, Murakami H, Masuda R, Minamoto T (2020) Selective collection of long fragments of environmental DNA using larger pore size filter. *Science of The Total Environment* 735: 139462-139462.
- Tsuji S, Maruyama A, Miya M, Uchio M, Sato H, Minamoto T, Yamanaka H (2020) Environmental DNA analysis shows high potential as a tool for estimating intraspecific genetic diversity in a wild fish population. *Molecular Ecology Resources* 20(5): 1248-1258.
- Takeshita D, Terui S, Ikeda K, Mitsuzuka T, Osathanunkul M, Minamoto T (2020) Projection range of eDNA analysis in marshes: a suggestion from the Siberian salamander (*Salamandrella keyserlingii*) inhabiting the Kushiro marsh, Japan.

PeerJ 8: e9764.

Takahara T, Taguchi J, Yamagishi S, Doi H, Ogata S, Yamanaka H, Minamoto T (2020) Suppression of environmental DNA degradation in water samples associated with different storage temperature and period using benzalkonium chloride. *Limnology and Oceanography: Methods* 18(8): 437-445.

Itakura H, Wakiya R, Sakata MK, Hsu H, Chen S, Yang C, Yamamoto S, Minamoto T (2020) Estimations of riverine distribution, abundance and biomass of anguillid eels in Japan and Taiwan using environmental DNA analysis. *Zoological Studies* 59: 17.

Hayami K, Sakata MK, Inagawa T, Okitsu J, Katano I, Doi H, Nakai K, Ichiyangi H, Gotoh RO, Miya M, Sato H, Yamanaka H, Minamoto T (2020) Effects of sampling seasons and locations on fish environmental DNA metabarcoding in dam reservoirs. *Ecology and Evolution* 10(11): 5354-5367.

Takahashi S, Sakata MK, Minamoto T, Masuda R (2020) Comparing the efficiency of open and enclosed filtering systems in fish and jellyfish environmental DNA quantification. *PLOS ONE* 15(4): e0231718.

<数理環境論>

Nagasaka K (2021) Toward the best algorithm for approximate GCD of univariate polynomials, *Journal of Symbolic Computation*, 105, 4-27.

Nagasaka K (2021) Approximate square-free part and decomposition, *Journal of Symbolic Computation*, 104, 402-418.

<生活環境論>

Hirayama, Y. (2021) Housing, family, and life-course in post-growth Japan, *Japan Architectural Review*, <https://doi.org/10.1002/2475-8876.12216>

Sato, M, Aoshima, I, Chang Y (2021) Connectedness to nature and the conservation of the urban ecosystem, *Forest Policy and Economics*, in press

Mori K, Tabata T (2020) Comprehensive evaluation of photovoltaic solar plants vs. natural ecosystems in green conflict situations, *Energies* 13: 6224.

Tabata T (2020) Consumer goods in Japanese elderly-only household units: Micro-material stock and earthquake resistance, *International Journal of Disaster Risk Reduction* 51: 101922.

Tabata T, Zhou J, Hoshikawa J (2020) Discussion on woody biomass energy systems and natural ecosystem impacts: Case study in Japan, *Clean Technologies and Environmental Policy*.

Hayashida M, Phengchat R, Malac M, Harada K, Akashi T, Ohmido N, Fukui K (2020) Higher-Order Structure of Human Chromosomes Observed by Electron Diffraction and Electron Tomography. *Microsc Microanal.* 20:1-7. doi: 10.1017/S1431927620024666.

Dwiranti A, Arifudin FS, Takata H, Ohmido N, Fukui K (2020) Application of the Chromosome Image Analyzing System (CHIAS) for Straightening Cation-treated Bent Chromosomes. *Microsc Res Tech.* 83(11):1411-1416. doi:10.1002/jemt.23533.

Shenton M, Kobayashi M, Terashima S, Ohyanagi H, Copetti D, Hernández-Hernández T, Zhang J, Ohmido N, Fujita M, Toyoda A, Ikawa H, Fujiyama A, Furuumi H, Miyabayashi T, Kubo T, Kudrna D, Wing R, Yano K, Nonomura KI, Sato Y, Kurata N (2020) Evolution and Diversity of the Wild Rice *Oryza officinalis* Complex, across Continents, Genome Types, and Ploidy Levels. *Genome Biol Evol.* 12(4):413-428. doi: 10.1093/gbe/evaa037.

Sartsanga C, Phengchat R, Fukui K, Wako T, Ohmido N. (2021) Surface structures consisting of chromatin fibers in isolated barley (*Hordeum vulgare*) chromosomes revealed by helium ion microscopy. *Chromosome Res.* 2021 Feb 22. doi: 10.1007/s10577-021-09649-2.

Siregar AY, Sartsanga C, Arifudin FS, Phengchat R, Salamah A, Ohmido N, Fukui K, Dwiranti A. (2021) Calcium ion significance on the maintenance of barley (*Hordeum vulgare*) chromosome compaction. *Micron.* 2021 Mar 3;145:103046. doi: 10.1016/j.micron.2021.103046

<社会環境論>

Yamashina C., Hara M. and Fujita T. (2020) The effects of human disturbance on the species composition, species diversity and functional diversity of a Miombo woodland in northern Malawi. *African Journal of Ecology* 1-9. DOI:

10.1111/aje.12798 (Online First)

(7) その他論文

<自然環境論>

村中泰子, 米谷淳, 伊藤真之, 蛭名邦禎, シギナシ・ミハエラ (2021) ROOT フォローアップ基礎ステージにおけるルーブリック評価とレジリエンスの評価ー. 大学教育研究 29: 77-92.

窪田薫 (2020) 生物源炭酸塩に対する地球化学分析技術を駆使した海洋炭素循環研究 (Marine carbon cycle revealed by geochemistry of biogenic calcium carbonate) . 地球化学: 奨励賞受賞記念論文 54, 61-78.

Just, J. and the Expedition 361 Scientists. (2020) Data report: evaluation of shipboard magnetostratigraphy by alternating field demagnetization of discrete samples, Expedition 361, Site U1475. the Proceedings of the International Ocean Discovery Program.

Babin, D. P. et al. (2020). Data report: X-ray fluorescence core scanning of IODP Site U1474 sediments, Natal Valley, Southwest Indian Ocean, Expedition 361. the Proceedings of the International Ocean Discovery Program 361.

Tsuri K, Ikeda S, Hirohara T, Shimada Y, Minamoto T, Yamanaka H (2021) Messenger RNA typing of environmental RNA (eRNA): A case study on zebrafish tank water with perspectives for the future development of eRNA analysis on aquatic vertebrates. Environmental DNA 3(1): 14-21.

Minamoto T, Miya M, Sado T, Seino S, Doi H, Kondoh M, Nakamura K, Takahara T, Yamamoto S, Yamanaka H, Araki H, Iwasaki W, Kasai A, Masuda R, Uchii K (2021) An illustrated manual for environmental DNA research: Water sampling guidelines and experimental protocols. Environmental DNA 3(1): 8-13.

Muchebve E, Takayama Y, Akatsuka M, Ito K, Minamoto T (2020) Feasibility study for seagrass beds monitoring using environmental DNA. 土木学会論文集 B2(海岸工学) 76(2): I_949-I_954.

赤塚真依子, 高山百合子, Edwin Muchebve, 伊藤一教, 渡辺謙太, 桑江朝比呂, 源利文 (2020) 海草場を対象とした環境 DNA の季節変化と環境 DNA 分析における採水量の検討.

土木学会論文集 B2(海岸工学) 76(2): I_943-I_948.

Kudoh A, Minamoto T, Yamamoto S (2020) Detection of herbivory: eDNA detection from feeding marks on leaves. *Environmental DNA* 2(4): 627-634.

Sakata MK, Yamamoto S, Gotoh RO, Miya M, Yamanaka H, Minamoto T (2020) Sedimentary eDNA provides different information on timescale and fish species composition compared with aqueous eDNA. *Environmental DNA* 2(4): 505-518.

Jo T, Arimoto M, Murakami H, Masuda R, Minamoto T (2020) Estimating shedding and decay rates of environmental nuclear DNA with relation to water temperature and biomass. *Environmental DNA* 2(2): 140-151.

Yatsuyanagi T, Ishida R, Sakata MK, Kanbe T, Mizumoto H, Kobayashi Y, Kamada S, Namba S, Nii H, Minamoto T, Araki H (2020) Environmental DNA monitoring for short-term reproductive migration of endemic anadromous species, Shishamo smelt (*Spirinchus lanceolatus*). *Environmental DNA* 2(2): 130-139.

<数理環境論>

Nagasaka K (2020) Multiple-choice questions in Mathematics: automatic generation, revisited, *Electronic Proceedings of the 25th Asian Technology Conference in Mathematics*, 21785-1 - 21785-15.

Nagasaka K (2020) Approximate GCD by Bernstein Basis, and its Applications, *Proceedings of the 45th International Symposium on Symbolic and Algebraic Computation, ISSAC 2020*, 372-379.

<生活環境論>

平山洋介 (2021) 「住宅セーフティネットは役に立つのか」『住宅会議』(111)

平山洋介 (2021) 「持ち家の現在をどう読むか」『住宅』70 (1), 44-51

糟谷佐紀・平山洋介 (2020) 「在宅生活を送る知的障害者の居住実態」『日本建築学会計画系論文集』85 (776), 2217-2216. (審査付き)

糟谷佐紀・平山洋介 (2020) 「重度肢体不自由者の在宅生活を支える条件としての住まいのあり方について」『日本建築学会計画系論文集』85 (774), 1761-1770. (審査付き)

平山洋介 (2020) 「住宅セーフティネット政策の位置と性質について」『個人金融』14 (4), 14-23.

井上真理 (2020) KES による布の物理特性の測定と風合いの客観的評価, 繊維学会誌, 76(11): P-473-P-480

井上真理 (2020) 素材の触感・風合いの計算・評価法と自動車内装材料の評価事例, Material Stage, 20(7): 17-22

白杉 (片岡) 直子, 作田はるみ, 橘ゆかり, 岸田恵津, 坂本薫, 井奥加奈, 森井沙衣子, 升井洋至, 堀内美和, 中谷梢, 三浦加代子, 片平理子 (2020) 小学校家庭科教科書における鍋による炊飯加熱過程の表現に対する教員志望大学生の理解, 日本調理科学会誌, 53 (2), 114-126

佐藤真行 (2021) 「自然資本の経済評価と持続可能な発展」, 環境情報科学 (招待論文), 第 49 巻, 第 4 号, pp. 24-29.

佐藤真行 (2021) 「社会的費用の考慮と持続可能な発展」, 繊維機械学会誌 (招待論文), 第 74 巻, 第 1 号, pp. 44-49.

豊成春子, 田畑智博 (2020) 「環境未来都市」構想に関する取組の効果と課題に関する考察, 環境科学会誌, 33 (6) : 172-183.

田畑智博, 周俊男, 大野朋子, 村山留美子, 井口克郎, 片桐恵子 (2021) SDGs のローカライゼーションに関する考え方の提案: 六甲山の森林管理と地域活性化を事例として, 日本森林学会誌, in press.

<社会環境論>

浅野慎一 (2020) 「夜間中学校とその生徒の史的変遷過程 (後篇): 『60 年の歩み 全国夜間中学校研究大会史料集成』を主な素材として」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 14 巻第 1 号, pp. 81~99

浅野慎一・佟岩 (2021) 「中国残留日本人二世の生活史と社会文化圏の形成 (中篇): 日本における労働-生活過程」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 14 巻第 2 号, 印刷中

井口克郎 (2020) 「介護保険制度 20 年の介護労働力政策の総括」『住民と自治』No. 688, 自治体研究社, pp. 18-20

井口克郎 (2020) 「神戸医療産業都市構想と借上復興公営住宅追い出し訴訟から見る『グローバル化』の矛盾」『大阪保険医雑誌』No. 652, 大阪府保険医協会, pp. 29-33

井口克郎 (2020) 「制度発足 20 年の現実から介護保険を問い直す—コロナ禍から安全・安心の介護保障を考える」『社会保障』No. 494, 中央社会保障推進協議会, pp. 4-7

井口克郎 (2021) 「介護保険 20 年, 介護労働の基盤は整えられたか?」『医療労働』642 号, pp. 3-5

井口克郎・市川英恵 (2021) 「借上復興公営住宅転居者調査から見える転居者の生活・健康への影響」『「災害多発社会を考える」報告書IV』, 兵庫県震災復興研究センター編, pp. 46-55

井口克郎 (2021) 「地域包括ケアシステム, コンパクトシティおよび防災集団移転の一体的展開と住民生活への影響—東日本大震災被災地における住民生活実態調査から—」『医療福祉政策研究』第 4 号, 日本医療福祉政策学会編, pp. 59-84, 掲載決定

岩佐卓也 (2020) コロナ危機と資本主義: クライリンガー他著『コロナ・危機・資本』を読む, 労働総研クォーターリー118, pp. 7-13

太田和宏 (2021) 「東南アジアにおける新型コロナ対応と地域秩序」『アジア・アフリカ研究』61 巻 1 号, pp. 1-13

原将也 (2020) 銅とトウモロコシからみるザンビア, 地理, 65(8), pp. 102-109.

(人間環境学専攻長 近江戸伸子)

8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動

8.1. 産官学共同プロジェクト

(1) マスターズ甲子園大会事業

高校部活動の同窓会クラブ活性化による生涯スポーツ推進を目的として, 全国高校野球OBクラブ連合の団体設立と都道府県予選大会支援, マスターズ甲子園本大会事業を 2004 年より事務局を設置し継続運営している。全国的スポーツプロモーションに関わる主にイベント開発, 組織化支援, コミュニケーション事業に関する実践研究と教育機会としても寄与していくことを目指している。

(人間発達専攻 長ヶ原誠)

(2) ワールドマスターズゲームズ開催

生涯スポーツの国際大会であるワールドマスターズゲームズを関西広域連合に招致し、2022年の開催に向けた大会運営組織委員会に関わると共に、関西組織委員会と国際マスターズゲームズ協会との連携により、大会準備と開催を通じた社会・地域活性化の波及効果と大会後の成果継続を目指したレガシー創出委員会に従事している。

(人間発達専攻 長ヶ原誠)

(3) トゲドコロ芋の健康商品開発に向けた最適加工条件の検討

これまでに、茶葉や豆類等を粉末化し、商品化してきた京都グレインシステム株式会社とアンチエイジングやメタボ予防の効果のある栄養成分であるジオスゲニンを含有するトゲドコロ芋の粉末化及び商品開発に向けての検討を行っている。

(人間発達専攻 佐藤幸治)

(4) 「鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して」

神戸市灘区の「大学と連携したまちづくりチャレンジ事業」の助成金を得て地域自治体とも連携して実施しているアクションリサーチ。本年度は新型コロナウイルス流行のためほとんど実施できなかったが、例年はほぼ毎月地域住民向けの「アカデミックサロン」などを実施する一方、本プロジェクトが地域住民の間の絆形成に寄与していることを科学的データを用いて検証している。

(アクティブエイジングセンター)

(5) 認知症予防プロジェクト (神戸大学)

認知症や生活習慣病の「予防」に良いとされる研究成果をもとに神戸大学が開発したヘルスケア・サービスで、保健学研究科，人間発達環境学研究科（アクティブエイジング研究センター），システム情報学研究科，農学研究科および医学研究科が関わる文理融合の社会実装のプロジェクトを行っている。

(アクティブエイジングセンター)

(6) 「Well-being 研究拠点」社会関係資本ユニットでの活動 (神戸大学高等研究院未来世紀都市学研究アライアンス)

安心安全な社会の構築や健康長寿の実現を目指す上で豊かな人間関係（社会的ネットワーク）を保つことは重要である。社会関係資本ユニットにおいては、社会的ネットワークづくりを支援する方法論，ならびに社会ネットワークを客観的に評価する方法に関して検討を行っている。

(アクティブエイジングセンター)

(7) 次世代育成プロジェクト事業

兵庫県三木市と神戸大学とが協定を結び、2012年度から連携事業（教育関連「次世代育成プロジェクト事業」）を展開し、その終了後も継続して本研究科から「確かな学力向上プロジェクト」に参画している。具体的な取組として、第一に三木市学力向上推進委員会を年2回開催した（2012年度から継続／岡部：委員長，山下：副委員長）。児童生徒自身による学習計画の立案等を促す補助教材「みっきいすてつぶ」や自主的プリント学習「プリントひろば」の活用，タブレット端末の導入，学習指導案データベースの運用等について，学校現場からの代表（校長・教頭・教諭等）と教育委員会事務局職員ら総勢28名による協議をコーディネートすると同時に，専門的立場からの助言を行った。第二に，三木市学力向上サポート事業を実施した。2019-20年度指定の別所中学校・志染中学校区の2中4小が2年次を迎えたが，今年はコロナ禍により研究発表会は見送った。2020-21年度指定となる緑が丘中学校区の1中2小が初年次の研究に着手し，指導助言者として山下が参画した。

（人間発達専攻 岡部恭幸・山下晃一）

(8) 幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究

国立教育政策研究所・所外研究委員として、「幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究」に携わり，幼児期から児童期にかけて同じ幼児・児童を継続的に調査することにより，幼児期から児童期への教育の意義や幼児期の教育・保育の質がその後の育ちと学びに与える影響などに関する研究に参画した。

（人間発達専攻 北野幸子）

(9) 社会福祉法人と諸外国の社会福祉を担う非営利法人等の比較に関する調査

厚生労働省，令和2年度社会福祉推進事業「社会福祉法人と諸外国の社会福祉を担う非営利法人等の比較に関する調査」を受託された PwC コンサルティング合同会社の依頼を受けて，アメリカの保育・幼児教育，子ども・家庭福祉に関する内容の現状についての分析や知見の提供を行った。

（人間発達専攻 北野幸子）

(10) 非認知的能力の育ちを捉え育む乳幼児教育・接続期教育の開発

尼崎市学びと育ち研究所の主席研究員として，非認知的能力の育ちを捉え育む乳幼児教育・接続期教育の開発研究を行っている。小学校1年生を対象とした非認知的能力の育ちを捉える方法を開発し実態を明らかにするとともに，非認知的能力の育成を促す保育者のための実践開発を行った。尼崎市教育委員会と連携して，既存の資料を活用するとともに，性格特性などの調査を実施し，生育環境や教育環境が子供の諸能力，機能の発達にどのような影響があるかを検証している。

（人間発達専攻 北野幸子，國土将平）

(11) 乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究～公開保育と実践検討を中心に～

神戸市こども家庭局と市の研究事業費を得て、研究代表者として共同研究を行った。乳幼児保育研究部会を立ち上げ、「乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究～公開保育と実践検討を中心に～」の研究を全市の園の参画をえた研修システムの開発をおこなっている。

(人間発達専攻 北野幸子)

(12) 新型コロナウイルス蔓延化の世界の子どもたちのウェル・ビーイングに関する実態調査

ベネッセ教育総合研究所内チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) の企画による国際共同研究、新型コロナウイルス蔓延化の世界の子どもたちのウェル・ビーイングに関する実態調査、課題の検討を行った。

(人間発達専攻 北野幸子)

(13) 「これからの幼児教育」の監修

ベネッセ教育総合研究所に依頼を受けて、同研究所が国内全幼稚園・保育園・こども園に発行している雑誌「これからの幼児教育」の監修を行った。

(人間発達専攻 北野幸子)

(14) ICTを活用したドキュメンテーションツールの開発～「おうちえん」についての機能強化、新展開に関わる共同研究～

研究代表者として、(株)スマートエデュケーションと(株)神戸大学イノベーションとともに「ICTを活用したドキュメンテーションツールの開発～「おうちえん」についての機能強化、新展開に関わる共同研究～」に着手し、附属幼稚園における「おうちえん」の実証研究を踏まえ、ドキュメンテーションツールを開発している。

(人間発達専攻 北野幸子)

(15) 株式会社クオルテック、他数社との共同研究

戦略的基盤技術高度化支援事業「ペプチド核酸を用いた高感度・オンサイト利用可能な家畜感染ウイルス検出システムの開発」(2018-2020年度)

我が国の畜産現場における、豚流行性下痢(PEDV)、豚コレラ、口蹄疫、鳥インフルエンザといったウイルス性伝染病を迅速にモニターするため、本研究では、化学修飾核酸とイムノクロマト法を組み合わせることにより、畜産現場でPEDVウイルスの存在を目視で検出できる迅速検査キットの開発を行った。

(人間環境学専攻 江原靖人)

(16) スカイワークスフィルターソリューションズジャパン株式会社，基盤材料の評価に関する研究

加工プロセスを経た基板材料の評価技術として，ESR や XPS，STEM などの分析を通じて基板内での面内ダメージの分布の把握に取り組み，その有意差を調べる評価手法の改善を行った。

(人間環境学専攻 谷篤史)

(17) Studio Phones

Kobe Studio Seminar

Studio Phones と数理情報環境論が産学連携で実施する少人数と分野横断などをコンセプトとするセミナー活動である。2020 年度は，新型コロナウイルスの感染防止の観点から活動を縮小したが，オンラインにて 3 回の講演等のセッションを実施した。

(人間環境学専攻 長坂耕作)

(18) 農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）ならびに東レリサーチセンター

クライオ-集束イオンビーム加工観察装置(FIB)を用いた染色体ナノ加工

農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）ならびに東レリサーチセンターとの共同で，クライオ-集束イオンビーム加工観察装置(Cryo-FIB)を用いた生体試料である染色体ナノ加工について検証した。

(人間環境学専攻 近江戸伸子)

(19) 国土交通省 近畿地方整備局

防災教育の現状とその効果-淀川流域における河川防災活動を事例として-

河川整備に伴う河川安全について教育上での現状と課題を明らかにすることを目的とし，自身が委員を務める淀川水系流域委員会で問題とされていた河川教育に対する出前講座の効果を教育関係者や児童，一般市民へのアンケート調査を行い，把握，考察した。

(人間環境学専攻 大野朋子)

(20) 大阪府岸和田市まちづくり推進部都市計画課

住民から捉えた地域資源としての「景観」の特徴とこれからの景観保全・創造への提案
地域住民が地域資源として残したい景観とは何かについて明らかにすることを目的とした。
住民感情を踏まえた景観資源について既存のアンケート結果と景観写真を用いて景観構図，要素分析し，解明を試みた。岸和田市景観審議委員としても岸和田市と協力して研究を行っている。

(人間環境学専攻 大野朋子)

(21) 神戸市建設局公園部計画課

感染症対策下における都市公園の重要性評価とこれからの公園利用への提案

緊急事態宣言発出前後の都市公園の利用状況の変化を明らかにし、感染対策を踏まえた公園利用法を提案することを目的としている。公園の利用状況を Web アンケート調査や現地調査等によって感染症発生前後で明らかにし、公園の重要性評価を行う

(人間環境学専攻 大野朋子)

(22) 六甲山観光株式会社

アートプロジェクトが神戸市の地域活性にもたらす効果

神戸市をモデルとして、アートプロジェクト (AP) の現状をその主催側と来場者側、双方の視点から明らかにし、AP が地域活性にもたらす効果について考察することを目的とした。六甲山観光株式会社の協力により、六甲ミーツ・アート芸術散歩 2020 年の来場者アンケート調査等を行って、現状の把握と、今後の課題を明らかにした。

(人間環境学専攻 大野朋子)

(23) 農事組合法人アグリファーム

日本におけるキャッサバ栽培技術に関する研究

2020 年より農事組合法人アグリファーム (群馬県邑楽郡邑楽町) と高崎経済大学と連携し、日本における熱帯作物キャッサバの栽培実践の定量的な把握に取り組んでいる。日本でのキャッサバ栽培の先例はほとんどなく、現在の実践を把握して分析することで、日本におけるキャッサバの栽培技術の確立につながる事が期待できる。

(人間環境学専攻 原将也)

8.2. 地域連携プロジェクト

(1) 大阪府私立幼稚園連盟と連携し、幼児教育の質的向上をめざし、幼稚園における教育実践への指導助言、教員の研修、研究成果の書籍出版を行った。

(人間発達専攻 北野幸子)

(2) 福井県私立幼稚園・認定こども園協会と連携し、幼児教育の質的向上をめざし、幼稚園における教育実践への指導助言、実践開発を行った。

(人間発達専攻 北野幸子)

(3) 越前市の依頼をうけて、本学産官学連携本部を通して、「主体的に遊ぶための環境づくり～一人一人の思いを支える保育者の役割～」に関する学術指導を行った。

(人間発達専攻 北野幸子)

(4) 舞鶴市の依頼をうけて、本学産官学連携本部を通して、「乳幼児教育の質の向上と保育者育成」に関する学術指導を行った。また同市の乳幼児教育センター運営会議の議長も

務めた。

(人間発達専攻 北野幸子)

(5) 神戸市こども家庭局幼保振興課の依頼をうけて、本学産官学連携本部を通して、「幼児期の自然体験推進について」に関する学術指導を行った。

(人間発達専攻 北野幸子)

(6) ESD グローカルネットワーク推進プロジェクト

学び系の教員が中心となって、国連大学の ESD 推進組織 RCE (Regional Centers of Expertise on ESD) の事務局として認証されたヒューマン・コミュニティ創成研究センターを拠点に、持続可能な開発 (SD) に関連する阪神間の NPO、企業、行政などのローカルネットワーク化支援、世界約 180 か所の RCE とのグローバルネットワークの構築支援を行ってきた。「RCE 兵庫-神戸 (ESD 推進ネットひょうご神戸)」の現段階での構成員は、100 を超えている。

(人間発達専攻 清野未恵子)

(7) ESD ユースネットワーク推進プロジェクト

SDGs 推進のカギとされるユース (35 歳未満：国連定義) の国内外のネットワーク化を促進するため、6 月にオンラインカンファレンスを実施した。ヒューマン・コミュニティ創成研究センターを事務局とする「ESD プラットフォーム WILL」が主体となって、国内のユースを含む総 70 名が参加した。本専攻の教員 2 名が、他専攻教員の協力も得ながら、神戸大学を中心とした ESD ユースネットワークの組織化を支援した。

(人間発達専攻 松岡広路・清野未恵子)

(8) 第 5 回 ESD 実践研究集会の開催

2016 年より、ESD に関連する実践者・研究者の情報交換、課題研究の探究、共同研究の創成の場として、ヒューマン・コミュニティ創成研究センター主催の「ESD 実践研究集会」を開催してきた。本専攻教員 5 名が中心的な役割を果たしている。本年度は、2020 年 9 月 21、22 日の二日間オンラインで開催し、約 100 名の参加を得た。大会テーマは、「WITH コロナ社会の ESD 活動」で、コロナ禍の工夫が共有された。

(人間発達専攻 松岡広路・清野未恵子・津田英二・稲原美苗)

(9) 東日本大震災公民館支援プロジェクト

2011 年 3 月 11 日に発災した東日本大震災被災地、岩手県大船渡市赤崎町における復興のまちづくり支援活動を継続している。本年度は、コロナウイルスのために当初の計画どおりの活動はできなかったが、2021 年 3 月 9 日～11 日に同地を訪問し、慰霊行事の支援や初めてのオンライン交流会の実施などを行った。その他、赤崎地区公民館、赤崎中学校

と連携したオンライン授業を11月に実施した。人間環境学専攻の井口克郎准教授教員らと共に、本専攻の松岡広路教授が中心となっている。

(人間発達専攻 松岡広路)

(10) 子育て支援拠点モデル開発

神戸市との連携による「のびやかスペースあーち」の日常的な運営を通して、「ドロップイン・サービス」「ペアレンティング・セミナー」「赤ちゃんふれあい体験学習」などを引き続き実施した。その他、地域子育て応援プラザ灘、灘区公立保育園、園田学園女子大学、灘区歯科医師会、各種NPO法人、社会福祉法人との連携・協働によって、多様なプログラムを展開した。

(人間発達専攻 津田英二)

(11) 子どもの居場所づくりモデル開発

神戸市の委託によって「子ども居場所づくり」事業を実施し、灘区連合婦人会との連携・協力によって、子ども食堂、学習支援など、さまざまな課題をもつ人びとが集まり、相互支援の場の提供を行った。また、「都市型中間施設」概念の生成を契機とした施設も出る開発を展開した。

(人間発達専攻 津田英二)

(12) 知的障害者に大学教育を開く実践研究

文部科学省の委託によって、知的障害者9名を聴講生として受け入れ、授業を展開した。この事業推進にあたって連携協議会を組織し、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、神戸大学附属特別支援学校と連携した。

(人間発達専攻 津田英二)

(13) 自然共生地域支援プロジェクト

神戸大生と高校生が交流する機会として、「獣がい対策実践塾」に学生を誘い、参加してもらった。また、その研修会の集大成として、「第3回獣害フォーラム」を開催し、その会の運営をともにおこない、野生動物管理に携わる様々な業種の方と交流する機会を設けた。

(人間発達専攻 清野未恵子)

(14) 哲学カフェ

「のびやかスペース『あーち』」及びNPO法人「女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ」が運営しているWACCA(神戸市長田区)で、フェミニスト現象学を学問的基盤におく「哲学カフェ」を企画・運営した。今年度は、WACCAでは、カフェ活動の他に自己表現を促すワークショップを行った。あーちでは、参加者の方々がジェンダーや時

事問題について気軽に考えられるように創案した。院生や他大学の研究者とのコラボし、哲学対話実践の効果や可能性を探究した。

(人間発達専攻 稲原美苗)

(15) 子育て地域拠点における学びの場づくり

兵庫県丹波篠山市に設立されたおとわの森子育てママフィールド Petit-Prix (プティプリ) で、平成 29 年度 (2017 年度) から子育て世代が学ぶ場づくりに関わっている。2020 年度はコロナ感染拡大予防のため、9 月から月に一度の開催となったが、稲原美苗准教授、本研究科の岡崎香奈准教授にもご協力いただき、多様な学びのテーマを提供した。

(人間発達専攻 清野未恵子)

(16) 兵庫県篠山市における子育て支援事業における音楽ワークショップおよびコンサートの開催。NPO 法人里地里山問題研究所が実施する地域子育て支援拠点事業『おとわの森子育てママフィールド』において、ゼミ学生と共に企画立案をし、ワークショップおよび子育て支援コンサートを行った。毎年、現地に赴いていたが、今年度はオンラインで配信し、ゼミ学生たちのフィールド学習として効果があった。

(人間発達専攻 岡崎香奈)

(17) 兵庫県の音楽療法士卒後教育モデルの開発。兵庫県音楽療法士会の顧問として、同会の役員と密接に連携しながら、オンラインでの研修方法および県内における実践場所を開拓した。

(人間発達専攻 岡崎香奈)

(18) 全国社会福祉協議会全国保育士会の認定こども園特別委員会専門委員として、認定こども園の現状分析、政策提言の内容の検討などを行った。

(人間発達専攻 北野幸子)

(19) 兵庫県教育委員会、幼児教育連携促進協議会委員として、作成した県内すべての乳幼児教育・保育施設およびに幼児のいる家庭に配布した兵庫県幼児教育資料・親子ノートの活用推進についての検討と、園と小学校との連携や接続を図る研修会等の参画、研修の実施などを行った。

(人間発達専攻 北野幸子)

(20) 兵庫県こども政策課の、ひょうご乳幼児教育・保育マイスター認証審査会の審査委員、兵庫県幼保連携型認定こども園園長資格認定等研修検討委員会の委員長などを務めて、養成制度の検討と改善に寄与した。

(人間発達専攻 北野幸子)

(21) 子育て支援拠点モデル開発

神戸市との連携による「のびやかスペースあいち」の日常的な運営を通して、「ドロップイン・サービス」「ペアレンティング・セミナー」などを引き続き実施した。ただし、例年実施している、地域子育て応援プラザ灘、灘区公立保育園、園田学園女子大学、灘区歯科医師会、各種 NPO 法人、社会福祉法人との連携・協働によるプログラムは、新型コロナ感染リスクを避けるために自粛した。

(人間発達専攻 津田英二)

(22) 子どもの居場所づくりモデル開発

神戸市の委託によって「子ども居場所づくり」事業を実施し、灘区連合婦人会との連携・協力によって、子ども食堂、学習支援など、さまざまな課題をもつ人びとが集まり、相互支援の場の提供を行った。また、「都市型中間施設」概念の生成を契機とした施設も出る開発を展開した。今年度は思うように実施できない時期があったため、オンライン会議システムを用いた居場所づくりも試みた。

(人間発達専攻 津田英二)

(23) 地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究

文部科学省からの受託によって、特別の課程として10月から2月まで週3日の授業を実施し、知的障害者9名を受け入れた。また、同じ文部科学省受託により、兵庫県全域で障害者の生涯学習推進のための情報収集や整理・発信、ネットワーク形成を行い、1月29日には、文部科学省、兵庫県教育委員会との共催で、近畿ブロック「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」を実施し、本部機能を担った。

(人間発達専攻 津田英二)

9. 社会的活動・震災復興支援

9.1. メンタルケア関係

2020年度東北大学等との連携による震災復興、並びに災害科学分野における学術研究の支援経費として採択された「東日本大震災の心理的影響と支援のあり方に関する継続的研究—放射線被爆不安と新型コロナウイルス感染不安との複合的影響の検討—」の資金を活用して、福島県中通り地区などでの心のケア事業、情報発信事業、調査研究事業を計画した。

(1) 心のケア事業（教員等に対するセミナー・助言指導）

従来通りの実施に向けて、共同事業を行ってきた福島県北養護教諭部会との連絡調整を続けてきたが、新型コロナウイルス感染拡大状況にあって夏季休業、冬季休業のいずれでも研修会が実施できず、また出前授業も実施できなかった。しかしながら、2月13日の大余

震発生時においてメールで生徒等メンタル状況を確認し、アドバイス等の支援を行った。

(2) 情報発信活動

①神戸大学V. School価値創造サロン#D2 (12月10日/オンライン)

②神戸大学都市安全研究センター 第1回 震災復興・災害科学シンポジウム(1月10日/オンライン)

(3) 調査研究事業

福島県及び関東地方に居住する子育て中の成人を対象に、放射線被爆不安と新型コロナウイルス感染不安に関わる複合的影響に関する調査を実施した。

(人間発達専攻 齊藤誠一)

9.2. 災害地への支援活動

九州南部豪雨災害支援 熊本県八代市坂本町

2019年7月4日前後の集中的な豪雨により被害がもたらされた熊本県球磨川流域への支援活動を行った。主な活動は、ネットワーキング活動、募金活動、直接訪問によるボランティア・調査活動の三つである。

発災後ただちにこれまでの被災地支援ネットワークを利用して情報収集に努めるとともに、支援を計画していた諸団体と連絡を取り、新型コロナウイルスの感染拡大を意識した活動の在り方を検討した。九州の諸大学(熊本大学、熊本県立大学、熊本学園大学など)の動きとともに、現地・兵庫県社会福祉協議会の動向を配慮しながら支援プランを作り、結果として、被災地外からの後方支援(物資提供、義援金、情報提供)、緊急支援期以後の復興期における支援(地域拠点運営支援、情報発信支援、現状把握を目的とした訪問活動)を行った。訪問活動は、全4回(7月26日~29日 9月24日~27日 10月30日~11月1日 11月20日~23日)で、のべ30名程度が八代市坂本町社会教育センターを拠点として清掃活動やヒアリングによる状況把握のための活動を行った。また、9月には、東日本大震災を契機とした『11えん募金』を再開し、「球磨川アドベンチャーズ」に義援金を手渡した。2021年1月には現地の住民たちとのオンライン交流会を実施した。これらにかかわったのは、本研究科教員(人間発達専攻教員2名、人間環境学専攻教員1名)、学生(のべ40名)、学外NPOメンバー10名程度であるが、オンラインを多用していたおかげで、全国の有志とのネットワークを作ることができた。今後の災害支援時にこうしたネットワークは、実際の経験知とともに有益に機能することが期待される。

東日本大震災復興支援 岩手県大船渡市赤崎町

2011(平成23)年3月11日に津波によって大きな被害を受けた岩手県大船渡市への復興支援は、10年になる。新型コロナウイルスの感染リスクを避けるため、今年度は、オンライン・電話・手紙を活用した住民との交流が主な活動となったが、10周年にあたる3月11日前後には、現地とのオンライン交流セッションの準備や現地住民のみの慰霊式典の準備を目的として、本学教員1名、学生2名、OB1名が岩手県赤崎町を訪問した。

現在、大船渡市では、防災集団移転、災害公営住宅移転、防潮堤建設などが終わり、復興道路も工事段階に入り、ハードの整備はほぼ終わりかかっている。それに伴い、教育・福祉・医療の仕組みも徐々に正常に戻りつつあって、社会の基本的な枠組み、いわば「外形」は復興してきたように見える。しかし、津波によって失われた人の活力、町のコミュニティの力は、いまだ「戻ってきた」とはいいがたい。「復興疲れ」と言われて久しいが、漸減的な活力の低下が見て取れる。公民館活動の減少、地域自治会の弱体化、婦人会などの地縁組織の解体、人口減少による学校の統廃合、より現象的には地域祭りや各種地域行事の不開催などがある。それに拍車をかけているのが新型コロナウイルスである。高齢者の人口割合が高いこの地区では、外部との接触のみならず住民間の交流も自制されている。多くの地域活動が現在は中止されている。復興の中心メンバーは「地域の力が失われた。これからどうなることか…」と肩を落とす。

新型コロナウイルス禍が落ち着くであろう 2022 年春以後、さまざまな地域活動が再始動される際に、住民の人たちの力が再び沸き起こるべくいかにサポートできるかが課題である。また、このボランティアプログラムは、朴木佳緒留本学名誉教授の科研『女性被災者の実感を活かした被災者支援の方法再構築』、本大学院院生人間発達専攻博士課程後期院生（長田真）の心理学会での奨励研究の取得にも貢献している。

（人間発達専攻 松岡広路）

10. 附属施設

10.1. 発達支援インスティテュート

10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会

本委員会は青木茂樹発達支援インスティテュート長（研究科長）、松岡ヒューマン・コミュニティ創成研究センター長、伊藤俊樹心理教育相談室長、伊藤真之サイエンスショップ室長、国土将平教育連携推進室長、片桐恵子アクティブエイジング研究センター長、及び近藤徳彦先端融合研究環コーディネーターで構成される。また、中野下勉事務課長も出席した。

令和 2 年度も本委員会を毎月 1 回のペースで開催し、研究科としての研究基盤の強化を図ると同時に、毎回各室・センターの活動報告を定例化し相互の連携を強めた。特に、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が続く中での各センター・室の取り組み方法に関して情報共有を継続的に行った。

なお、本委員会の検討事項は以下のとおりである。

	検討事項
第 1 回（5 月 8 日）	1. 令和 2 年度人間発達環境学研究科年次計画について 2. 新型コロナウイルス関連プロジェクト研究について 3. 学内共同利用施設等の見直しに係る年次報告書の提出について
第 2 回（6 月 26 日）	1. 令和 2 年度人間発達環境学研究科年次計画について 2. 新型コロナウイルス関連プロジェクト研究について

	3. 学内共同利用施設等の見直しに係る年次報告書の提出について
第3回 (7月31日)	1. 令和2年度人間発達環境学研究科年次計画について 2. 学内共同利用施設等の見直しに係る年次報告書の提出について
第4回 (9月25日)	1. 令和2年度人間発達環境学研究科年次計画について 2. 学内共同利用施設等の見直しに係る自己点検・評価書の準備について
第5回 (10月30日)	1. 令和2年度人間発達環境学研究科年次計画について 2. 学内共同利用施設等の見直しに係る自己点検・評価書の準備について
第6回 (11月27日)	1. 令和2年度人間発達環境学研究科年次計画について 2. 学内共同利用施設等の見直しに係る自己点検・評価書の準備について 3. 部局年次計画等に関するヒアリングについて 4. シンポジウムの開催について
第7回 (12月25日)	1. 令和2年度人間発達環境学研究科年次計画について 2. 規程の改正について 3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの組織再編成案（ブレインストーミング）について
第8回 (1月29日)	1. 令和2年度人間発達環境学研究科年次計画について 2. ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの組織再編案に関する今後の進め方について 3. シンポジウム等の開催に関して（来年度にむけての頭出し）
第9回 (2月26日)	1. 令和2年度人間発達環境学研究科年次計画について

(発達支援インスティテュート長 青木茂樹)

10.1.2. 心理教育相談室

心理教育相談室は、市民を対象とし、地域に開かれた相談室である。臨床心理学や心理療法に関する知見を生かして、地域の人々の心の健康に貢献することを目的としている。同時に、当相談室は、本研究科人間発達専攻臨床心理学コースが臨床心理士養成第Ⅰ種指定校としての認可を維持するために必要な実習機関であり、コース所属の学生たちの臨床訓練の場として機能する目的を有している。平成12年度に総合人間科学研究科の附属施設として設立され、平成17年度からは同研究科附属発達支援インスティテュートの一部門に位置づけられた。心理教育上のさまざまな問題について、臨床心理学の立場から専門的な援助を提供する活動を行っている。年間を通じて開室し（年末年始、夏季の休室期間を除く）、カウンセリング、プレイ・セラピーなどの心理療法を中心に、必要に応じて心理テストを実施するなどの心理臨床実践を行っている。相談は有料である。相談内容は、幼児期・児童期に家庭や学校でみられる発達教育上の問題、青年期のアイデンティティ形成に絡む課題、成人期のメンタルヘルス、熟年期の家族関係や生き方に関することなど、

多岐にわたっている。

また、平成 30 年度より本学研究科人間発達専攻博士課程前期課程こころ系講座臨床心理学コースにおいて、国家資格である公認心理師の養成が始まり、心理教育相談室はその実習の一部を引き受けている。心理教育相談室に所属する臨床相談員が実習指導者となり、公認心理師のカリキュラムに指定された実習時間（450 時間以上、そのうち心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援等 270 時間以上）の一端を担う役割をしている。なお、心理教育相談室における研修生の面接担当時間の確保等、今後公認心理師カリキュラムに対応するための対策が重要な課題の一つとなってくるものと思われる。

相談室の組織構成、ならびに相談システムについては以下のとおりである。

心理教育相談室は、心理教育相談室運営委員会により管理運営される。委員会の構成員は、運営委員会委員長の相談室長をはじめ、副相談室長、ほか 2 名の委員からなる。また、本年度の相談室スタッフは、教員 6 名（臨床心理学コース担当、臨床心理士、公認心理師）、博士後期課程こころ系 A 講座院生 3 名、前期課程臨床心理学コース院生 24 名（M1：12 名、M2：12 名）、事務補佐員 1 名である。

今年度の相談室の運営はコロナの影響を大きく受けた。最初の緊急事態宣言の発令直後の 4 月 6 日から 7 月 3 日までの約 3 か月間、相談員でもある大学院生の入構停止に伴い、クライアントの相談を受けることができなくなり、休室となった。相談室は、ウイルス感染対策として、体温の計測、消毒の徹底、相談室の椅子のソーシャルディスタンスの確保、窓を開けることによる換気、テーブルにアクリル板を立てて飛沫感染を防止するなどを行い、7 月 6 日から対面の相談を再開し、密をさけるために待合室を制限しケース数を減らしながら相談を行った。

新規の相談申込みは、基本的に電話受付によって行われている。この受付業務も、臨床心理学コースの授業「臨床心理基礎実習」の一環となっており、修士課程 1 年（M1）の学生たちが相談室スタッフの一員として交代で臨んでいる。新規の申し込み受付も、コロナの影響を受け、4 月 6 日から受付を停止し、10 月 12 日から新規相談申込の受付を再開した。受付時間は、月曜日の午後 1 時～2 時 45 分、火曜日～金曜日の午後 1 時～6 時（いずれも祝日は除く）である（年末年始、夏季のお盆期間は閉室）。毎年 30 件弱の新規相談申込があり、受理面接、インテークカンファレンスを経て面接受理、担当者、継続面接の形式等が決定されるが、今年度は大幅に減少した。年間相談件数は、平成 22 年度以降おおむね 800 から 1000 件程度で推移しているが、同じく今年度は大幅に減少した。しかし、地域住民の心の健康に貢献する心理相談機関として、ならびに、臨床心理士養成に関わる実習機関として適切な活動していることには変わりない。なお、詳細な面接受付件数、面接受理数、面接回数等は年次報告資料編に掲載するとおりである。

平成 22 年度より心理教育相談室は、年 1 回『神戸大学大学院発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要』を発刊しており、院生たちに心理臨床の実践研究をまとめる場を提供している。今年度第 11 号は、事例研究論文 1 篇、相談室活動報告、相談員・研修生活動報告から構成される。なお、掲載された 1 篇の事例研究論文の題目は以下の通りで

ある。

・鈴木田英里 独自のファンタジーで自身の内面を表現する小学生男児とのプレイセラピー
また、平成 28 年度から、発達支援インスティテュート HC センターとの共同で「サテライト施設のびやかスペース・あーち」において、一般の子育て中の保護者を対象とした「心理教育相談室子育て支援セミナー」を開催しているが、今年度はコロナの影響のため開催を取りやめた。

(心理教育相談室長 伊藤俊樹)

10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

(1) ジェンダー・コミュニティ支援部門

現代の私たちはグローバル化した社会が当たり前になってきたのもつかのま、新型コロナウイルスの感染拡大の影響によって、コミュニティの中で分断や格差の問題がますます深刻化している。そこで、異なる状況で生きている人々が共存できるコミュニティのあり方が焦眉の問題になっている。このような問題を共に考えて答えようとする一つの試みが「対話実践」である。本部門は、一人一人が日常生活の中で抱えている多く問題を共に考える探究のコミュニティ（一般的に「哲学カフェ」と呼ばれている）を創成する試みをしてきた。それらの問題を「マジョリティ」の立場ではなく、むしろ「マイノリティ」の立場に立って考えていこうとする臨床哲学的な実践を行い、多様な側面から一人一人の「語り」の地平を拓き、全ての支援にかかわる営みには欠かせない「生きづらさ」の哲学を探究する。男女間の格差やセクシャリティに関する差異などについて考える上で、社会のさまざまな場所で潜在的に問題となっていることを、社会の中で生きている人々との対話を通して掘り起こし、問いを作り、ゆっくりじっくり考えること、つまり、哲学プラクティスに取り組んでいる。例えば、ジェンダーやセクシュアリティの問題をはじめ、医療、介護、福祉、教育、テクノロジー、環境などについて、それらの問題に常に関わっている人々との対話実践を行う中で「何が問題であるのか」を吟味することを重視してきた。2020 年度中にジェンダー・コミュニティ支援部門が開催して 4 つの活動について報告する。

1. 「ジェンダーや身体が多様性について考えるメルロ＝ポンティ現象学研究会」

2020 年度、当該研究会を計 5 回（8/8, 9/27, 11/22, 1/23, 3/10）開催した。コロナ禍の中、すべての研究会を Zoom によるオンライン開催となった。（オンラインにしたことで、海外（フランス）や関東からの参加者が増えた。）メルロ＝ポンティ研究者である松葉祥一氏（同志社大学）を招き、主に、『眼と精神』の中の「人間の科学と現象学」を輪読しながら、ジェンダー、看護、介護、生老病死、身体、表現などをテーマに、参加者全員で対話をした。現象学的アプローチを用いた研究の意義についても議論を重ねた。本学の学生、院生、教員、他大学の院生や教員の方々、そして一般の方々も参加し、ジェンダ

一や現象学を中心に掘り下げて議論を続けてきた。現象学などの専門書の読解に並行して、医療、看護、介護、ダンス、気功などの実践者や専門家たちと対話をする中で、それぞれの「生きられた経験」を考察した。さらに、私たちの経験、身体の動き方、感情などを詳細に記述する現象学的アプローチを行うことで、生老病死のライフステージにいる一人一人の当事者の社会的・心理的な状態の理解と支援のあり方について考えた。

2. 「WACCA 女性やシングルマザーと子どもたちの居場所」(神戸市長田区)での哲学カフェ
 例年、NPO 法人「女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ」が運営している WACCA の支援者(主にスタッフ・ボランティア)が対象の哲学カフェを隔月のペースで開催していたが、2020 年度は一度も開催できなかった。ここにもシングルマザーが置かれている厳しい環境を垣間見ることができた。Zoom での開催を勧めたが、パソコンやスマートフォンを所有していない人もいたため情報格差があり、哲学カフェの開催は難しいと判断した。しかしながら、当該 NPO 法人の代表理事である正井禮子とはインターネット上で情報交換を続けている。コロナ収束後の再開を目指して準備を続けている。

3. HC Café ～哲学対話の時間～ オンライン哲学カフェ

前述した NPO 法人「女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ」での活動と同様の理由(新型コロナウイルス感染拡大の影響)で、2020 年度、神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設「のびやかスペースあーち」での対面哲学カフェを一度も開催できなかった。その代わりにオンラインでの哲学カフェを 3 回開催した。今年度から、関西学院大学高等教育推進センターの三井規裕氏を迎えて、共同実践している。このプロジェクトは、学生に開かれた環境を作り、ジェンダー問題を多角的に考える機会を提供すると同時に、哲学カフェのファシリテーションスキルを習得できる学びの場としても機能していくことを目標にしている。対面とは異なるオンラインの対話の場をどのようにデザインすれば良いのか暗中模索の中、実践を始めた。2020 年度は、2021 年度の GSP 研修型国内フィールド学修を再開するための準備期間として、三井氏と稲原の二人で企画・運営を行ったが、神戸大学の学生も数名参加していた。来年度は学生に対話実践の企画・運営に携わってもらえるように工夫が必要になる。

今年度は、哲学カフェを 3 回開催した。開催日、テーマ、参加人数を下記の表にまとめておく。

開催日	テーマ	参加人数(スタッフ)
2020 年 11 月 7 日	「伝えたのに、伝わってない」のはなぜ?	14(2)
2020 年 12 月 25 日	恋愛をテーマにしたクリスマスソングが多いのはなぜか?	17(2)
2021 年 3 月 20 日	なぜ、日本では女性は蔑視されるのか?	19(2)

このプロジェクトの哲学カフェは、2 の WACCA の哲学カフェとは異なり、誰でも参加で

き、日常生活の中にあふれている（普段あまり深く考えない）問いについて、少し立ち止まって考えてみようという試みであり、異世代間交流をしながらジェンダーを考えるグローバルな視野をもてるように市民の学びの場を構築していくことを目的にしている。本年度の哲学カフェをオンラインで開催しているおかげで、参加者の年齢・職業・地域などの層が広がっている。なお、本プロジェクトは、本学 GSP の研修型プログラム（国内フィールド学修）として学生を受け入れている。今後も、学生の力を借りながら、「哲学カフェ」の実践を続けていきたい。

4 オンライン・シンポジウム：不登校と哲学プラクティス

2021年1月30日にオンライン・シンポジウム「不登校と哲学プラクティス」を開催した（主催：科研費，共催：本部門）。登壇者に、赤井郁夫氏（一般社団法人 office ひと房の葡萄），中川雅道氏（神戸大学附属中等教育学校），村瀬智之氏（東京工業高等専門学校）を迎えて、稲原を含む4名が発表した。

不登校という現象は、それほど珍しいことではなくなっている。当該シンポジウムでは、学校に行きにくくなり、学校に関わりにくい子どもたちと哲学プラクティスとの関係性について考えた。それぞれの形で哲学プラクティスを実践している実践者たちが、哲学プラクティスと不登校の関わりについて経験を語った。その後、参加者たちと共に考える対話の時間を持った。当該シンポジウムに53名が事前登録し、当日の参加者は48名だった。

（担当 稲原美苗）

(2) 社会教育・サービスラーニング支援部門

2017年4月のヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、HCセンター）の組織変更によって、新たに「社会教育・サービスラーニング支援部門」が創設され、3年になる。この部門は、文字通り、学校教育以外のノンフォーマルな教育（社会教育）の教育原理・方法の探究と、ノンフォーマル教育だからこそもつ開拓性・斬新性・柔軟性・実際性を学校教育と連動させる「サービスラーニング」の在り方の探究を、実践研究のターゲットにおく部門である。

一般に、社会教育は、学校教育以外の組織的な教育活動と理解されるが、本部門では、制度化されていない幅広い教育的な活動（インフォーマル・エデュケーション）を視野に入れ、「いかに新しい教育が立ち現れるのか？」を問いとする実践的な研究も課題とする。すなわち、社会的活動のなかで「教育らしきもの＝学び」が立ち現れ、ノンフォーマル教育として輪郭をもち、その過程で制度化された教育（フォーマル教育）としての学校教育と連動して教育的効果が高まっていく、という教育生成の流れを、全体構図とする。

それゆえ、「ボランティア」「エンパワメント」「インクルージョン」「アンラーニング」「対話」「共生」「ネットワーキング」「ソーシャルアクション」「持続可能な開発」など、他の部門で注視されるキーワードは、本部門においても重要となる。教育生成の全体の流れを意識したうえで、多様な領域を視野にいれながら、各キーワードを基盤とした実践・研

究の連環的様態を探究することが、本部門の使命である。

現在は、こうした全体構図を否が応でも意識することになる「ESD（持続可能な開発のための教育）」をターゲットに、HCセンターの他部門との連携・協力のなかで研究的実践を展開している。ESDは、持続可能な開発という理想を実現するうえで生起する、さまざまな社会的課題間の葛藤・矛盾を教材とする新しい教育である。「ESDがいかに立ち現れるか」を問いとしてモデル実践を組み立て、ESD実践の理論化を図ることを目標としている。

具体的には、以下の5つの実践フィールドをもつ。

1. ESD ネットワーキング支援事業

国連大学認証組織（RCE 兵庫 - 神戸：「ESD 推進ネットひょうご神戸」）の組織化・企画創出の過程におけるアクションリサーチ（参与観察・関与観察など）を主とする。「自然共生地域支援部門」「インクルーシヴ社会支援部門」「国際開発実践支援部門」などのHCセンターの他の部門及び発達支援インスティテュート「サイエンスショップ」と連携しつつ、環境系・福祉系・国際開発系・まちづくり系などの多様な市民・企業・行政組織が互いの活動ベクトルを接近・交差させる過程や、協働的活動のコーディネートの在り方、及び、その過程での学習プロセスの特徴を解明する。

新型コロナウイルスの影響を受け、本年度のRCEの主な活動は、オンライン方式の定例会議、第5回ESD実践研究集会の実施※、ウェビナー方式の各種国際会議への参加に終わったが、2021年に向けての行動指針・計画を策定した。

※「(4) 自然共生地域支援部門」参照

2. ESD プラットフォーム WILL 支援事業

HCセンターが主催・支援する高校生・大学・若手社会人を中心とするESD関連事業（「ESD ボランティアぼらばん」「大船渡 ESD プロジェクト」など）の人的・物的資源の流動化を促進する時空間づくり、すなわち、プラットフォーム創成の過程を企図する事業である。「大船渡 ESD プロジェクト」は、その支援母体が「ボランティア社会・学習支援部門」から「社会保障・ソーシャルアクション支援部門」へと移り、「ESD 学び隊」は、「自然共生地域支援部門」が主たる支援母体となっているが※、これらと本部門が所管する「ESD ボランティアぼらばん」が、実質的に一元的な動きするようになることを企図する事業である。2017年度末に3部門の間で協議され、今年度より本格的に実施の運びとなった。こうしたプラットフォーム化のなかで、あるいは、その結果として、学生などの若者だけではなく関係者すべてにESDが立ち現れることが期待される。このプロセスからESD実践に必要な条件を輪郭化しようとするものである。

※「(4) 自然共生地域支援部門」「(6) 社会保障・ソーシャルアクション支援部門」参照。

3. ESD フォーマル教育推進事業（フォーマル教育×ノンフォーマル教育）

神戸大学のフォーマルカリキュラムとして2006年に設立されたESDサブコースのカリ

キュラム・授業内容を実験的にデザインすることを主とするアクションリサーチである。第1学年に配当される「ESD 基礎 A」「ESD ボランティア論」は、上記のノンフォーマルな ESD 事業との連動の中でデザインされている。ESD が立ち現れるサービスラーニングの在り方、および、その教育が ESD を推進する実践者育成に及ぼす効果を、比較的自由度の高い高等教育において探究することをめざしている。ESD 総合コーディネータの協力の元、学習者の学びのプロセスをデータ化した。

4. ESD 社会教育・生涯学習支援促進事業

これまでも神戸市・堺市・岸和田市などの生涯学習に関する施策策定に ESD を位置づける活動を行ってきた。あるいは、兵庫県嬉野台生涯教育センター生涯大学やいなみ野学園（高齢者大学校）のカリキュラムの変更のなかで ESD を位置づけるために指導助言を行ってきた。今年度は、特に、尼崎市生涯学習審議会委員として、ESD・社会教育事業の推進に関する計画づくりに関与した。

以上の5つの活動を通して、ESD としての教育の形成過程の研究、すなわち、教育哲学論、学習論、主体論、方法論の各視座から ESD とは何かを探究する研究を行っている。

(担当 松岡広路)

(3) インクルーシヴ社会支援部門

A. 2005 年度よりヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設として開設している「のびやかスペースあーち」において、「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」の実践を継続して行った。今年度は新型コロナ感染拡大を防ぐために、時間制限と人数制限を行う中で実践を工夫した。

「よる・あーち」は、2006 年度より実施している「あーち居場所づくり」を基盤として、2016 年秋から開始したプログラムである。神戸市の「子どもの居場所づくり事業」の助成を受け、灘区連合婦人会との連携で、学習支援、子ども食堂、遊び、交流の4つの活動を柱とした複合的な場づくりである。さまざまな困難（主に社会性の問題、学力の問題、障害の問題など）をもつ子どもや家庭の支援に関心の中心に置き、その他にも障害のある青年や成人など、多様な課題を抱える人たちが、市民や学生と相互に学び合う状況を創出している。今年度は時間短縮と人数制限を課したため、ターゲットになる子どもや青年のみに特化したケアを行った。また、限定した機能の代替としてオンラインでの「居場所づくり」を行った。毎週金曜日の夜約一時間、子ども、青年、学生、市民がオンライン会議システムで交流し、グループに分かれてコミュニケーションを持続させた。その中で、赤木和重准教授との共同研究「ユーモア的即興から生まれる表現の創発：発達障害・新喜劇・ノリツッコミ」をオンラインで行った。

B. 文部科学省受託により、知的障害者に大学教育を開く実践研究を行った。10月～2月に特別の課程として週3日の授業を展開し、知的障害者9名を聴講生として受け入れた。その成果に基づき報告書『神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム』を編集・刊行した。また、同じ文部科学省受託により、兵庫県全域で障害者の生涯学習推進のための情報収集や整理・

発信，ネットワーク形成を行い，1月29日には，文部科学省，兵庫県教育委員会との共催で，近畿ブロック「共に学び，生きる共生社会コンファレンス」を実施し，本部機能を担った。

C. 学内の交流ルームに2008年度に設置されたカフェ・アゴラの運営に携わり，障害者雇用及び実習のモデル開発を継続した。9月には，附属特別支援学校の美術の授業を題材としたギャラリー展示「終わりのない芸術展」を，博物館学芸員課程の学内実習として実施した。

D. 交流協定を締結している韓国ナザレ大学とのオンライン交流を継続し，12月19日にWEB日韓交流セミナー「知的障害者の舞台芸術活動とその支援」を実施した。

E. 障害児の放課後保障の観点から2008年度から開始したインクルーシブな学童保育の支援を継続して行った。

F. 知的障害者のセルフ・アドボカシーグループの支援として，新聞編集支援を継続的に実施した。ほぼ毎月1回の編集活動を支援し，12月に第23号「フレンド新聞」を発行した。

(担当 津田英二)

(4) 自然共生地域支援部門

本部門では，自然と共生した地域社会の実現を目的として農村部等をフィールドにアクションリサーチ型の研究を行っている。本年度は主に以下の4つの内容を中心に研究・実践に取り組んだ。

1) 地縁型・テーマ型コミュニティを基盤とした獣害対策の推進

・獣がい対策を進める地縁・テーマ型コミュニティの創成支援

野生動物による農作物および生活被害は「獣害問題」と呼ばれ，全国各地で様々な対策がなされている。兵庫県丹波篠山市畑地区では，人里に慣れた野生動物と地域住民との棲み分けを目標に，放棄柿を早期収穫し野生動物の集落への出没を防ぐ取り組みが7年前から行われている（さく×はた合戦）。この取り組みは都市農村交流や，地域住民の獣害対策に関する情報共有の場としても活用されており，今年度も運営実施を支援した。そのイベントを単発で終わらせるのではなく，地域と外部人材との関わりを強め，地域の人材不足を補填する可能性を模索するため新たな事業を企画運営した。それは，これまで地域の方々のみによって行われてきた野生動物の集落への出没を防ぐ集落柵の点検作業に地域外の人材とともに実施する事業で「さく×はた合戦」と命名された。2020年度は11月7日と3月6日の2回実施した。

・高校生らによる獣害問題への理解促進と実践者の育成

本部門では，NPO法人里地里山問題研究所と連携し，野生動物を「害」と考えず，住民にとってプラスの存在に変えていく対策（＝獣がい対策）を全国に発信している。今年度は，昨年度に引き続き丹波篠山市にある県立東雲高等学校および鳳鳴高等学校の高校生を交えて「獣がい対策」実践塾を実施し，シカ・イノシシ・サルの対策それぞれについて学び，高校生らが獣害問題に関わる仕組みを考案した。8/30，9/26，10/25，12/13，1/11，2/13，3/13

の7回の研修会を経て、3/20に開催された第3回獣がいフォーラムで成果を発表した。参加者の学年は1年～2年生で、担当の先生方からも好評のプログラムであった。今後は、高校生企画の実現することが課題である。

2) 令和2年7月九州南部豪雨災害の支援とESDとしての展開

令和2年7月4日に発生した九州南部を中心とした豪雨により、熊本県等の多くの自治体が被災した。特に、熊本県の球磨川流域は被害が甚大で、球磨川とともに暮してきた方々の多くが今後の生活再興を余儀なくされた。そこで、球磨川流域で被災した方々が被災後に球磨川に対してどのような認識変化があったのかを明らかにするため現地を視察した。また、災害後は自治体の復興支援では行き届かない部分を多くの災害ボランティアが支援してきた歴史がある。しかしながら、コロナ禍においては県外からの災害ボランティアの自粛が求められており、高齢過疎化が進む地域で、コロナ禍にどのような支援の形がありうるのかも合わせて検討した。その結果、被災にあったあとも、地域の方の多くは球磨川流域での生活を志向していた。また、球磨川内の清掃活動は、地域の人々とのソーシャルディスタンスを確保することができ、かつ、球磨川に親しみをもつ地域の方々を遠方より支援する方法であると考えられた。今後も、地域と密接に関わり復旧復興を行うNPO法人球磨川アドベンチャーズやつしろと連携しながら、球磨川とともに暮らす方々の復興を支援していきたい。

3) 自然を生かした子育て・子育て拠点施設の運営支援

兵庫県丹波篠山市の「おとわの森子育てママフィールド～petit prix（以下、プティプリ）」は、旧味間認定こども園おとわ園舎を活用して平成28年7月に設立された地域子育て支援施設である。当施設の周囲には、子どもたちのために地域住民がボランティアに整備を行ってきた森林がある。こうした自然を生かした子育て拠点としての可能性も期待されている。そこで、自然環境を生かした子育て・子育ての環境づくりのための学びの場として「ツキイチ勉強会」を3年前からコーディネートしている。勉強会の目的は1)プティプリの新規利用者層の開拓、2)子育て中の親の興味関心を広げること意識した学びの場づくりである。今年度はコロナウイルス感染拡大のため開始が遅れ、定員を削減して実施したために参加者数が昨年度と比較すると少なかった（以下の表を参照）が、事後アンケートから参加者の満足度が高かったことがわかっている。テーマや講師についてはスタッフの意見を聞きながら選定しているが、リピーターとなる参加者がみられるようになり、この勉強会での交流を通じたプティプリ利用者とスタッフとのつながりの強化も成果としてあげられる。

■2020年度ツキイチ勉強会のラインナップ

日	タイトル	講師	参加人数
10/23	命を大切にできる性教育	稲原美苗（神戸大学人）	5人＋スタッフ

		間発達環境学研究科)	
11/27	ミュージック・セラピー体験	岡崎香奈 (神戸大学人 間発達環境学研究科)	16人+スタッフ
12/7	イノシシについて学ぼう	山中亜季子 (ちゃめっ こはくぶつかん)	6組+スタッフ
1/25	災害から家族を守る防災講座	中村伸一郎 (みんなで 減災し隊!)	5人+スタッフ
2/18	子育てと食育を考えよう～幸せと 健康のために～	藤岡亜季子 (里山旬菜 料理ささらい)	5人+スタッフ
3/12	子どものしつけ～褒め方としかり 方のコツ～	水口優子 (丹波篠山市)	5人+スタッフ

4) フリースクールにおける ESD 推進手法の検討

神戸市西区の公立フリースクールである神出学園は、平成 29 年 3 月にユネスコスクールとして認定され、ESD を推進する様々な取り組みを行っている。令和 2 年度は、給食の残飯を減らす「神出口福 (こうふく) プロジェクト」の指導助言を行った。全学で行った ESD 活動報告会では、このプロジェクトを通じて、料理をしているスタッフへの感謝の言葉が増えたり、残飯が減少するなど、取り組みの成果を生徒さんたちも実感していた。

(担当 清野未恵子)

(5) ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

ヘルスプロモーションの理論的枠組みとされている健康生成モデルの立場から、生きがい意識を日本固有の Well-being としてとらえ、アクション・リサーチを展開している。そして、Well-being を中核に据えたヘルスプロモーション・健康行動支援事業を進めている。今年度は、以下のとおり地域および学校との連携を中心とした国内での事業に加え、グローバル化の進展を視野に入れ、ヘルスプロモーションのグローバルモデルの構築をめざして国際的な事業や調査も開始した。

1. 地域におけるヘルスプロモーション・健康行動支援活動

① 健康あーち 子育て支援を通じたヘルスプロモーション・健康行動支援事業を行った。

【目的】乳幼児の保護者を対象とし、食生活を中心に健康について話し合いを行い、話し合いの中から課題を見つけたり、悩みの解決方法を考えたりしながら、子どもとその保護者の健康増進をみざすことを目的として事業を展開した。

【場所】神戸市灘区民ホール 3 階 のびやかスペースあーち

Zoom および SNS を活用したリモート事業

【開催日とテーマ】 下記のテーマで全8回の健康あいちを開催した。

開催日	テーマ
7月18日(土)	リモート健康あいち運営に関する意見交換/Zoomの使用方法について
8月15日(土)	小学校での給食/新型コロナウイルスに関する情報提供
9月19日(土)	トマトの栄養素, 料理について動画を配信
10月17日(土)	いやいや期への対応
11月21日(土)	好きな食べ物・嫌いな食べ物
12月19日(土)	食物アレルギーについて
2月20日(土)	おやつについて
3月20日(土)	来年度の運営について意見交換

プログラムは、企画会議で保護者およびスタッフと話し合い前年度の振り返りを経て作成、実施した。今年度は、COVID-19の影響で開催が極めて困難な状況であったが、保護者の協力を得ることが出来、ICTを活用しリモートでの健康あいちを実施した。ICTの整備環境も含め、ICT活用の可能性について、事前にアンケート調査をおこなったうえで、具体的にZoomの使用方法についてセミナーを開催した。そのため、プログラム実施の事前準備にも一定の時間が必要であった。永野和美氏(神戸大学附属中等教育校/管理栄養士・栄養教諭)、黒川通典氏(大阪樟蔭女子大学/管理栄養士)、黒川浩美氏(大阪青山大学/管理栄養士)、黒田久恵氏(神戸市/管理栄養士・栄養教諭)木田薫氏(堺市/管理栄養士・栄養教諭)からも専門的な支援を得ることができた。のべ88名の参加があった。

企画会議および運営会議：開催にあたり、合計10回程度の企画会議を行った。

② 定保健指導者向け研修プログラムの開発と実践：兵庫県の特定保健指導の指導者や関係者を対象とし、ヘルスプロモーション・行動変容に関わる理論や実践に関する研修を行った。具体的には、兵庫県および兵庫県尼崎市の担当者と企画会議を経て、尼崎市の実践報告を研修に導入し、実践への理論の適用強化を図る動画研修プログラムを開発し実施した。

2. 学校におけるヘルスプロモーション・健康行動支援活動

① 神戸大学附属初等教育学校の教員と実践研究について意見の交換を行った。

3. 国際的な事業

① 生活習慣改善のための国際プログラムの開発を旨とした教育研究活動：エトベシュローランド大学との協定に基づき、エトベシュローランド大学の教員によるオンラインセミナーが開催された。また今後のオンラインセミナーに関する計画についても、意見交換を行った。

② 心の健康のための国際プログラムの開発を旨とした研究活動：心の支援にあたる支援

者を対象とした心の健康に関する国際調査を行うために、オーストリアに研究拠点を築き、海外での研究を進めている。

(担当 加藤佳子)

(6) 社会保障・ソーシャルアクション支援部門

◇東日本大震災津波跡地・高台移転先におけるまちづくり支援

2012年11月以後、継続的に、学生・院生及び教職員が赤崎地区公民館（2012年5月1日に、本研究科と連携協定と締結）に赴き、支援活動をしてきた。本年度は新型コロナウイルスの流行により、イベントの開催支援や大人数での現地訪問は控えたが、震災後2021年で震災10年を迎えるにあたり、今後10年のまちづくりや復興のあり方について、地元との交流や意見交換、議論を行った。

◇社会保障裁判等における市民支援

2013年の国による生活保護基準引き下げの違憲性を問う「新生存権裁判・いのちのとりで全国裁判アクション」や、神戸市・西宮市が阪神・淡路大震災被災者に対し、借上復興公営住宅からの転居を求めて訴訟を起こしている問題について、市民・被災者の人権保障に寄与するための支援を行った。

(担当 井口克郎)

10.1.4. のびやかスペースあーち

1. 「のびやかスペース あーち」全体の取組について

本研究科のヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、2005（平成17）年9月より、神戸市との連携の下、灘区役所旧庁舎（灘消防署2階）において、サテライト施設「のびやかスペースあーち（以下、「あーち」とする）」の運営を開始した。本施設は、開設当初より「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」の拠点となることを目指して、様々な取組（プログラム等の提供）をおこなうとともに、実践的研究の場や学生・院生の実践の場（研究フィールド）を提供してきた。2017年度以降は、実践場所を「灘区民ホール（3階）」に移している（2016年10月より「子どもの居場所づくり事業（後述）」を先行して実施、2016年度末には「あーち」全体が移転）。

「あーち」は、多様な人々や団体・組織などがこの場で出会うような働きかけを通して、徐々に地域のあらゆる立場の人々の居場所やプラットフォームとして機能している。言い換えれば、互いの立場や境遇の違いを認め合い・理解し合える場、あるいは、互いに暮らしやすい地域を創っていくためにどのような活動ができるのかを考え・共有する場となってきたのである。これが「あーち」の大きな特徴であるが、その他にも、地域のボランティアに支えられた多様なプログラムのほとんどが開設当初から現在まで継続しており、多くの人々がそのプログラムを楽しんでいる点、また、新規のボランティアによる新しいプログラムも年々増えている点なども「あーち」の特徴と言える。以上のことから、「あーち」が大学の果たすべき役割のひとつである「社会貢献」を着実に果たしていると判断できよう。

これまでの「あーち」受賞歴は次の通りである。：兵庫県「ユニバーサルまちづくり賞」

平成 19 年度 神戸市「市民福祉奨励賞（児童福祉）」平成 21 年度／神戸大学「学長表彰」平成 22 年度／兵庫県「ひょうご子育て応援賞」平成 27 年度。

神戸市から委託されている「*地域子育て支援拠点事業（2007 年度より）」と「**子どもの居場所づくり事業（学習支援・子ども食堂）（2016 年度より）」も継続しており，特に後者の事業の「子ども食堂に」関しては，灘区連合婦人会による協力のもと，毎週金曜日の夜間に開催している。

「*地域子育て支援拠点事業」とは地域に暮らす子育て中の親子の交流促進や育児相談等を実施し，子育ての孤立感，負担感の解消を図り，全ての子育て家庭を地域で支えるという目的のもとに 2007 年度より予算化された国事業である。全国で約 7,578 箇所（2019 年度現在）ある。「あーち」では本事業の委託を受け，基本 4 事業（①交流の場の提供・交流促進 ②子育てに関する相談・援助 ③地域の子育て関連情報提供 ④子育て・子育て支援に関する講習等）を週 5 日（6 時間／日）実施している。

「**子どもの居場所づくり事業」は，その背景として「子どもの貧困対策の推進に関する法律（2003 年成立）」がある。貧困対策のひとつとして，国が地方自治体に予算を配分し，各地域の実情に応じた多様な取り組みを促すのがこの事業である。具体的には，「子ども食堂」や「学習支援」がそれに相当する。事業の対象者としては，例えば，ひとり親であったり経済的に困難であったりするため，食事面で何らかの支援が必要な子ども，学習面においては，学校の授業についていくことが困難であったり，学習の機会が乏しいといった子どもとその保護者らである。

こうした流れも受けて，「あーち」では，それまでの「居場所づくり」実践を発展させる形で，「子どもの居場所づくり事業」を取り込んでプログラム化した。その名称は「よる・あーち」であり，週 1 回（金曜日の午後 4 時～9 時）開催している。毎回，多くの未就学児・小学生・中学生・高校生および青年とその保護者，そして市民ボランティア，学生（他大学含む）・院生らが集まってくる。子ども・青年たちは学習支援を受けたり，ボランティアや保護者と夕食を共にしたり，遊びのプログラムに参加したりして，それぞれが自分のニーズに合わせて自由に過ごしている。市民ボランティアや学生らは，子どもの学習支援を担当したり保護者と交流したりしながら互いに親睦を深めている。毎回のプログラム終了後には，学生が主体となって，その日の振り返りをおこない，学生や市民ボランティア同士で意見交換をおこなっている。また，本事業の運営においては，高齢者給食に関する豊富な実績のある「灘区連合婦人会」との協働事業となっており，灘区の婦人会会員が 50 余名登録し，シフト制で調理を担当している。

【新型コロナウイルス感染拡大の影響と対策】

昨年度より新型コロナウイルスの影響は続いている。「あーち」では 2020 年 2 月末，神戸市から要請のあった「臨時休館措置」を受け入れ，3 月 1 日から 15 日まで休館したが，その後の急速な感染拡大（パンデミック）により臨時休館が延長された。また本年度に入り，第 1 回目の「緊急事態宣言（4 月 7 日）」発出を受けて 5 月末日まで休館が再延長された。

休館中は、館内の清掃並びにおもちゃや備品の消毒を徹底して行い、事務作業の整理と効率化を図り、さらに利用者に対しては電話訪問を実施した。電話訪問により、保護者の中には自粛生活の影響により子育ての負担や不安が増大、また新たに家庭・家族の悩みが出現した者が少なからずいることが判明したため、スタッフや相談員が対応し記録に残した。その後、日本における感染者数の減少により、6月4日より、いわゆる「三密」を避ける工夫（常時換気、利用時間および利用者数の制限、プログラムの制限や休止、新たに予約システムの活用など）と午前・午後の室内の清掃・消毒および備品・おもちゃの洗浄・消毒を徹底しながら開館した。再開後は、スタッフの健康管理は当然のことながら、利用者にもマスク着用（小学生以上）、「健康おたずね表」への記載、手洗いなどを依頼している。利用者は協力的でありトラブル等は起きていない。また、「よる・あーち」と「健康あーち」についてはオンラインでも実施・運営した。2021年1月14日、日本における感染の再拡大により、第2回目の「緊急事態宣言」が発出されたが、「あーち」では、再開時に制限した利用者数をさらに減らし、感染予防を徹底することで休館せずに現在に至っている。

上記の多様な制約を受けているため、「あーち」の年間利用者数（月別は後述の表1で提示する）は、これまでの15年間に比べて減少した。2月末現在で、4,580人（延べ）である。年間の利用者数を開館日数の176日で割ると一日平均、約26人が利用している。本年度のプログラム開催状況を集計（2月末現在）すると、教員・一般ボランティアが主催するプログラムの実施回数（延べ数）は86回、大学の正規教育プログラム（GSP）の実施回数（延べ数）は9回である。また、学部生・院生が卒業研究・修士研究の場として「あーち」を活用することも多く、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの業務に関わる教員の指導学生に限っても、これまで、卒業論文9編・修士論文14編・博士論文3編が提出されている（2006～2019年度）。7年前より園田学園女子大学人間健康学部人間看護学科の4年次生（経験値統合実習）、3年次生（育成連携支援実習）などを継続的に受け入れていたが、本年度は新型コロナウイルス感染拡大のため休止となった。

大学に設置されている「のびやかスペースあーち運営委員会」とは別に、日常的に「あーち」のプログラム等にかかわっているメンバーが参加する「あーち連絡協議会（隔月）」については、本年度は教員・スタッフのみで開催した。プログラム予定表、学生やスタッフによる絵本の紹介、利用者が担当する取材記事・コラム等を掲載する月刊広報誌を編集するために、毎月1回「あーち通信編集会議」が開催されている。開設以来、「あーち通信」は一度も発刊を欠いておらず、「あーち」のホームページ上で順次公開されている。また通信は、利用者に配布されているだけでなく、灘区役所や灘社会福祉協議会および各児童館、さらに連携先の産婦人科クリニックにも配布・設置している。本年度末で通信は187号になる。

2. 教員・職員が中心に進めている主な活動について

<ドロップイン・サービス（神戸市からの委託事業「地域子育て支援拠点事業」>

地域子育て支援拠点事業を神戸市との連携によって引き続き実施した。乳幼児とその保護者が安心して多様な人との交流を深めながら、社会的なつながりや活動に関わることが

できる場である。週5日（6時間／日＜但し本年度は、室内清掃・備品・おもちゃの洗浄・消毒を徹底するため、午前2時間、午後2時間に区切り実施＞）、開設している。「あーち」において利用者の最も多い活動であり、さまざまなプログラムの拠点としても機能している。

<子育て相談事業（同上）>

上記ドロップインの場に、助産師・保育士などの資格を持つ相談員を配置し、保護者からの相談に応じた。灘区のまちづくり課から派遣されている地域活動支援コーディネーター（1回／週）や、地域の保健師（不定期）も子育て相談に応じてくれている。その他、灘区歯科医師会との連携相談事業（4回／年）も行った。これらの相談内容を整理・分析した結果、子どもの生活に関するもの、発育・発達に関するもの、離乳食・幼児食に関するもの、育児不安、地域資源に関するものが多かった。また、分類結果等は、毎年、神戸市に報告されている。

<よる・あーち及びWeb あーち>

学習支援、子ども食堂、居場所づくりなどを並行して実施する複合プログラムで、毎週1回、夕方から夜にかけて実施している。多様な年齢や属性の人たちが大勢集まり、相互に学び合う場を形成している。本年度は時間を短縮して開催し、その時間に参加が困難な利用者のために「Web あーち」を開設。院生・学部生・卒業生も参加、青年や子ども、保護者、市民ボランティアらと交流を深めている。

(1) あーち学習支援（神戸市からの委託事業「神戸市子どもの居場所づくり事業」）>

神戸市の委託を受け、毎週1回、「よる・あーち」プログラムの一環として実施している。学習面、社会性の面で課題をもつ児童・生徒・青年が参加している。支援者は学生を中心に構成され、学習支援を契機とした支援者の学びに焦点を置いた取り組みを行っている。地域住民や保護者も支援に加わり、参加型研究のフィールドにもなっている。

(2) あーち子ども食堂（同上）

神戸市の委託を受け、灘区連合婦人会と連携して実施している事業で、毎週1回、「よる・あーち」プログラムの一環として実施している。本年度は感染予防の観点から、食堂での飲食を中止し、必要な家庭に弁当として持ち帰ってもらうよう工夫し、1月上旬まで継続した。

(3) あーち居場所づくり

毎週1回、「よる・あーち」プログラムの一環として実施している多様な人びとの間の関わりを促進する実践である。障害のある子どもの十分な参加をテーマとして活動を構成し、さまざまな年齢や属性の人たちが遊びや会話を通してエンパワーした。「都市型中間施設」概念に基づくモデル開発実践プログラムとしても位置づけている。

<地域子育て応援プラザ灘・灘区公立保育所との協働実践>

灘区内の公立の子育て支援関係施設と連携し、保育士の「あーち」への派遣事業（見守り、相談、親子遊びの実施）や広報活動を行った。

<地域の医療機関との協働実践>

灘区歯科医師会と連携し、近隣の歯科医師が来館し、子育て中の親子の歯の相談を行った。計4回開催。また、近隣の産婦人科の医師や助産師が、日常的に「あーち」の広報を行うことで、生まれてまもない乳児がいる家庭の利用促進をはかった。

<リモート健康あーち（食育プログラム）>

食に関する子育て中の親子の疑問や悩みに対応しながら、食のあり方を考えるセミナーと交流会である。参加者である親たちが主体となり運営できるよう教員や学生らが支援している。本年度はリモート運営に関する意見交換会（対面）が1回と、Zoomを利用した運営が7回実施された。

3. プログラム概要・その他

ここでは、①プログラム概要、②見学・視察数、③月別年間利用者数（表1）、④プログラム数とそれに対応するボランティア数（表2）、⑤「よる・あーち」利用者数・ボランティア数とその内訳（表3）、⑥連携・協力関係にある組織・団体（表4）を示す。

① プログラムの概要

<★印 本年度開催が可能であったプログラム>

子どもとその保護者を主な対象にしたプログラム

- ★ふらっと：地域子育て支援拠点事業（ドロップイン・サービス）として週5日開設
- ★おひさまひろば あーち：神戸市地域子育て支援センター灘の保育士・灘区公立保育所の保育士がドロップイン・サービスの利用者に対し、見守り・相談と親子遊び（ショートプログラム）を提供
- ★ベビーマッサージ：「あーち」利用者である母親がリーダーとなっておこなう交流プログラム
- ・あーち ビギナーズ交流会：「あーち」を初めて利用する、または利用して日が浅い母親対象の仲間づくりプログラム（子どもの月齢6か月未満対象）
- ・ほのぼの音ランド：音楽療法士によるリズム遊びプログラム
- ・おはなしの国：ボランティアによるストーリー・テリングと絵本の読みきかせ
- ・めだか親子クラブ：退職教員が中心となった手作りおもちゃのプログラム
- ・おりがみ遊び：「あーち」の利用者である母親が子どもや保護者に楽しいおりがみを伝えるプログラム
- ・らくがきおばさんがやってきた：地域の画家が展開する自由なアート空間
- ・アートセラピー：草木などの自然のものなどを用いてアートを展開するワークショップ
- ・人形劇団むー：「あーち」支援者や利用者が立ち上げた人形劇団
- ★おもちゃ病院：地域住民の有志によるグループが、壊れたおもちゃなどを修理してくれるプログラム

- ・親子のびのび体操：フリーランスで活躍する保育士による親子あそび
- ★リフレッシュ YOGA：「あーち」利用者による産後の母親の体調改善をめざすプログラム
- ・えいごであそぼう！：「あーち」利用者による幼児を対象とした英語あそび
- ・親子あそびと子育て講座：元神戸市保育士による子育て支援プログラム（4回シリーズ）
- ・くりにかるあーと：子どもと一緒に作品をつくりながら子どもの新たな一面を見出す
- ★あらかると音楽あそび：手づくり紙芝居や絵本に音をつけて、一緒に音楽遊びを楽しむ
発達障害のある子どもの保護者を対象にしたプログラム
- ★パパママほっと：自閉症プログラムのお子さん絵を持つ、保護者のための、語らいと情報交換の場

おとなを主な対象としたプログラム

- ・0歳児のパパママセミナー：子育て中の親を対象にした学習・交流プログラム
 - ・赤ちゃんのふれあい体験学習：地域の子どもたちが0歳児とその保護者が毎月1回交流する
- 保育士のための子育て支援研修会（1回）

その他

- ★よる・あーち（居場所づくり/学習支援+子ども食堂）：多様な立場にある人たちが交流し、その時々々のプログラムを企画し実践する/子どもや青年に対して学生や市民ボランティアが個別に学習支援を実施した後、子どもや保護者、ボランティアなどが、灘区連合婦人会が調理した夕食を一緒に楽しむ）
- ・音楽の広場：本研究科の院生や教員・ボランティアが主催する、誰でも楽しめる自由な音楽プログラム
- ・みんなで歌おう！：地域の作業所スタッフや実習生によるゴスペル
- ★学ぶ楽しみ発見プログラム（KUPI）：大学の資源を無理なく効果的に活用することで、言語によるコミュニケーションが可能な知的障害のある青年が、学ぶことの楽しさを感じ、自己理解や他者理解、人格を陶冶するプログラム

授業・実習等

- ・博物館実習：学生と大学外の団体等とコラボして表現の意義や方法等を学ぶ

会議等

- ・あーち通信編集会議：利用者や学生を交えて「あーち」通信をつくる場
- ・あーち連絡協議会：プログラムリーダー、利用者、教職員等による「あーち」運営に関する会議

②「あーち」への見学・視察数

大学のサテライト施設として、社会的責任や地域貢献をはたし、アクション・リサーチの成果を社会に対してモデル提示したり発信したりする手段として、見学者やメディア取材の受け入れをおこなっている。以下は、2020年6月から2021年2月末までの「見学者数」を機関・組織別に整理したものである。

◎「あーち」見学者など

<見学（総数 19 名）>（順不同）

神戸市こども青少年課 1 名 灘区長 灘区役所 3 名 個人 5 名 神戸市建築住宅局保全課 4 名

兵庫県教育委員会事務局社会教育課 1 名 三田市すくすく子育て課 3 名 園田学園女子大学教員 1 名

「よる・あーち」見学者（順不同）

神戸新聞記者 1 名 灘区長 灘区まちづくり課 2 名 兵庫県教育委員会事務局社会教育課 5 名

鳴門教育大学院生 2 名他，企業・NPO・個人 多数

③2020 年度「あーち」利用者数とその内訳（6 月～2 月末現在）

本年度の年間利用者数は，子ども 2,043 人・おとな 2,537 人であり，合計 4,580 人（延べ数）である。この人数を今年度の開館日数である 176 日で割ると，一日平均約 26 人が利用していることになる。

表 1 月別年間利用者数

2020 年度		ふらっと		こらぼ／ゆーす		Web / リモート		一日の利用者数		
月	開館日数	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	合計
6	19	135	117	10	32	10	33	155	182	337
7	21	118	129	10	35	15	46	143	210	353
8	16	133	125	14	49	14	36	161	210	371
9	21	194	192	27	72	16	41	237	305	542
10	23	231	215	30	59	13	53	274	327	601
11	19	210	196	20	57	9	44	239	297	536
12	20	260	250	12	36	14	48	286	334	620
1	19	250	254	15	45	12	42	277	341	618
2	18	252	240	13	44	6	47	271	331	602
合計	176	1783	1718	151	429	109	390	2043	2537	4580

④2020 年度「あーち」プログラム数およびボランティア数（2 月末現在）

表 2 は，「あーち」で提供されたプログラム数およびそれにかかわったボランティア（リーダー，スタッフ，一般，学生・院生）の数である。

表 2 プログラム数およびボランティア数（延べ数）

2020	プログラム数	スタッフ・ボランティア数	学生

月	開館 日数	一般 のプ ログ ラム	大学の授 業および 教育プロ グラム (実習)	プログ ラム総 数	プログラ ム数一日 平均	プログラムリーダー およびスタッフ数			
						スタッフ	一般	合計	学生
6	19	5	1	6	0.32	16	18	34	2
7	21	9	1	10	0.48	31	14	45	2
8	16	6	1	7	0.44	21	17	38	4
9	21	9	1	10	0.50	42	15	57	5
10	23	12	1	13	0.57	49	12	61	14
11	19	11	1	12	0.63	47	11	58	6
12	20	10	1	11	0.58	42	10	52	5
1	19	13	1	14	0.74	45	10	55	10
2	18	11	1	12	0.71	38	8	46	16
合計	176	86	9	95	0.54	331	115	446	64

*地域子育て支援拠点事業である「ふらっと」は毎日開催しているが、プログラム数に入っていない

*「あーち」通信編集会議・連絡協議会・他の会議などは入っていない

⑤2020年度「よる・あーち」利用者・ボランティア数とその内訳（2月末現在）

表3は、今年度に「よる・あーち」および「Web あーち」に参加した利用者（子ども・おとな・保護者）、一般のボランティア、学生ボランティア、スタッフの数（月別年間数）である。

表3 「よる・あーち Web あーち」利用数・ボランティア数（一般・学生等）・内訳（延べ数）

2020 年度	月		6	7	8	9	10	11	12	1	2	合計 (人)
			利用者	未就学	小学生	0	0	0	0	0	0	
1年	0	0			0	0	0	0	0	0	0	0
2年	2	1			2	5	7	0	2	2	3	24
3年	0	0			0	0	0	0	0	0	0	0
4年	0	0			0	1	0	4	0	0	0	5
5年	0	2			1	2	1	1	0	1	0	8

	6年	3	3	3	5	3	3	0	3	2	25
小計		5	6	6	13	11	8	2	6	5	62
中学生	1年	1	2	2	2	0	3	4	5	5	24
	2年	1	1	5	5	0	5	5	5	3	30
	3年	2	2	2	3	2	3	1	2	1	18
小計		4	5	9	10	2	10	9	11	8	68
高校生	1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3年	0	3	1	0	0	1	0	0	0	5
小計		0	3	1	0	0	1	0	0	0	5
保護者		13	11	8	14	18	14	11	11	13	113
おとな		32	38	46	34	14	41	48	57	55	365
小計		42	46	54	46	26	52	54	53	55	428
ボランティア	一般	27	19	16	17	12	11	11	10	13	136
	学部生	16	13	15	21	9	32	24	26	32	188
	院生	5	5	4	5	0	0	0	1	2	22
	小計	42	32	33	35	18	32	25	28	37	282
スタッフ	教職員	15	15	15	14	12	15	15	15	15	131
	婦人会	0	4	4	8	8	4	3	4	0	35
	小計	14	18	18	21	20	18	17	18	14	158
合計 (人)		171	180	151	188	122	183	176	176	176	1523

⑥2020年度 連携・協力関係にある団体など

以下の表4は、今年度の「あーち」の運営にあたって、連携・協力を得た組織や団体名を整理したものである。

表4 連携・協力関係にある組織・団体など

団体名	連携協力の内容
神戸市市民参画推進局	運営協力
神戸市子ども家庭支援部こども青少年課	運営協力
神戸市灘区保健福祉部こども家庭支援課こども保健係	0歳児のパパママセミナー&中・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習
神戸市灘区まちづくり推進部	なだ桜まつり/地域コーディネーター
灘消防署	消防訓練
神戸市地域子育て支援センター灘	ふらっと相談員/おひさまひろばあーち

灘区民ホール	運営協力／情報交換
灘区公立保育所（7 か所）	ふらっと相談員／おひさまひろばあーち
灘区地域コーディネーター（元幼稚園教諭）	ふらっと相談員
灘区社会福祉協議会	ボランティアコーディネート
灘区内児童館（10 か所）	情報交換
六甲道児童館	情報交換
六甲道児童館ユースセンター	中学・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習
灘区連合婦人会	よる・あーち（子ども食堂）
社会福祉法人たんぼぼ	博物館実習／みんなで歌おう！
学童保育つむぎ	居場所づくり
カフェ「アゴラ」	居場所づくり
社会福祉法人かがやき神戸	居場所づくり
神戸ユニバーサルツーリズムセンター	居場所づくり
NPO 法人神戸子どもと教育ネットワーク	めだか親子クラブ
チャレンジひがしなだ	筆をもとう
クエスト総合研究所	アートセラピー
NPO 法人マザーズサポータ協会	おしゃべりほっとタイム
亀田マタニティ・レディース・クリニック	アウトリーチ・サービス
灘区歯科医師会	ふらっと相談員
おもちゃ病院（地域の有志）	おもちゃ病院
園田学園女子大学	育成連携支援実習／経験値統合実習の場として提供
神戸海星女子学院大学	提供
神戸大学医学部保健学科地域連携センター	ボランティア論（授業）の場として提供
	ぽっとらっく

他に個人による協力も多数あり

（のびやかスペースあーち運営委員長 相澤直樹）

10.1.5. サイエンスショップ

1. 概要と運営体制

サイエンスショップは、(a) 地域社会における広義の科学教育や科学コミュニケーションを含む市民の科学に関わる諸活動への支援、および (b) 神戸大学学生の主体的研究活動等への支援を行うことを目的とする。(a) については、科学者等の専門家と市民の対話と協働を通じて、環境問題など科学に関わる地域課題への市民の取組や、社会における科学技術の進展とそれに関する政策形成過程などへの市民の参画を促す仕組づくりと実践を目指しており、実践研究として行われている。

令和2年度は、研究科専任教員（室長、副室長、及びその他の室員若干名）と、学術研究員2名（非常勤職員）、事務補佐員3名（非常勤職員）の体制で運営された（学術研究員お

よび事務補佐員については、次項に記すグローバルサイエンスキャンパス事業に係る業務担当者を含む)。

2. 令和2年度の主な取組

(1) グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムの運営

サイエンスショップは、神戸大学を実施機関、兵庫県立大学、関西学院大学、甲南大学を共同機関として4大学の連携で実施する、高校生等を対象とした科学技術人材育成プログラム「根源を問い革新を生む国際的科学技術人材育成挑戦プログラム」(略称 ROOT プログラム: ROOT は、Research-Oriented On-site Training Program for innovative scientists in the future より)の事務局として事業運営の中核的役割を担っている。この教育プログラムは、国立研究開発法人 科学技術振興機構の次世代人材育成事業の一環である「グローバルサイエンスキャンパス (GSC)」の企画として同機構の支援を受けて展開されている。(企画の実施主担当者をサイエンスショップ室長が務めている)。

神戸大学では、本研究科、計算科学教育センターの他、大学教育推進機構等が主体となり、全学の理系部局の参画のもとで企画が進められている。その企画立案、実施等について審議するために、大学教育推進機構に「グローバルサイエンスキャンパス委員会」が設置されている。また、地域の幅広い連携のもとで人材育成を推進するために、兵庫県および周辺府県等の教育委員会や、兵庫県下の先端的研究機関(高輝度光科学研究センター、理化学研究所計算科学研究機構、同生命機能科学研究センター、兵庫県立人と自然の博物館、兵庫県立大学西はりま天文台)や、公益財団法人兵庫工業会などが連携機関として協力し、実施機関である神戸大学、共同機関を含めてGSC ひょうご神戸コンソーシアムが形成されている。令和2年度には、新たに大学コンソーシアムひょうご神戸が連携機関として参加した。

このプログラムでは、毎年、科学分野で優れた資質をもつ受講生を募集し、40名程度を選抜する。大学教員による講義・実習、先端的研究機関の見学などを含む約半年間の「基礎ステージ」を経て、受講生が研究課題を提案し、評価を受けて選抜された10名程度が、大学等において研究を行なう「実践ステージ」に取り組む。科学的課題設定力・探究力を培うプログラムと並行して、科学英語、海外研修など国際性を高めるプログラムも展開される。令和2年度は、年間を通じて新型コロナウイルス感染症の影響により、基礎ステージはオンラインによる活動が中心となった。また、実践ステージの研究活動についても、アドバイザー教員との打ち合わせ、指導・助言などはオンラインを中心として行われ、必要最小限の範囲で大学での研究活動、野外でのフィールドワークなどが行われた。前年度から継続して個別課題研究に取り組む第3期実践ステージ生は12名であった。一方、5月から6月にかけて第4期基礎ステージ生の募集を行い、これまでで最も多い112名の応募者(所属学校所在地:兵庫県、大阪府、京都府、奈良県、徳島県、神奈川県)から48名を選抜、それらの受講生が基礎ステージを受講した。令和3年1月から2月にかけて、その中から実践ステージ受講生候補者7名が選抜され、令和3年度の研究活動に向け、大学教員の指導・助言のもとで研究計画の具体化などを進めた。これまでの修了生も含めて、英語による研究論文の

発表、英語および日本語による学会発表の他、受講生が日本学生科学賞、高校生科学技術チャレンジ、科学オリンピック、科学の甲子園などで優れた成績を収め、また国際的な科学コンテストの日本代表に選出されるなど、優れた科学技術人材の発掘・育成の形ある成果が見られた。なお、8月に予定していた米国シアトルへの海外研修は、新型コロナウイルスの影響により中止となり、それに代わる取組として、令和2年8月および令和3年3月に、ROOTプログラム受講生のワシントン大学のオンラインシンポジウムへの参加・発表、同大学の学生・スタッフとの交流などを行った。

本年度は、科学技術振興機構による支援の最終年度（4年度目）にあたることから、次年度以降の取組継続に向けて、第Ⅱ期 ROOT プログラムの構想・計画を策定し、3月に神戸大学として外部資金の申請を行った。

(2) 地域社会における市民の科学活動および科学コミュニケーション支援

市民による科学コミュニケーション活動の支援として、それぞれ伊丹市、淡路島、播磨地域で、市民を中心として科学コミュニケーション活動に取り組むグループ「サイエンスカフェ伊丹」、NPO 法人ソーシャルデザインセンター淡路、「サイエンスカフェはりま」によるサイエンスカフェ等（オンライン中心）の企画・開催等に協力した。これらは、令和2年度神戸大学地域連携事業（課題名：持続可能な社会づくりをめざす市民活動への支援事業）、事業主体：発達支援インスティテュート）の一環として学内支援も受けて取組を進めた。

以下に本年度の主な取組等をまとめる。なお、サイエンスカフェの開催リストについては年次報告書資料編に掲載する。

(a) サイエンスカフェ伊丹

伊丹市を中心にサイエンスカフェの開催に取り組む市民グループ「サイエンスカフェ伊丹」によるサイエンスカフェ等の開催（8回）を支援した。オンラインによる開催の企画・運営に協力し、希望する市民に Zoom の利用方法を説明する取組も行った。令和3年2月のサイエンスカフェ「あなたの睡眠、私の睡眠—睡眠の個人差を考える—」では、神戸大学人間発達環境学研究科の研究者がゲストを、サイエンスショップのスタッフがファシリテータを務めた。

(b) SODA カフェ

ソーシャルデザインセンター淡路による SODA カフェ「コロナで変わる？帰る？還る？わたしたちの社会 Vol. 1, 2, 3」は、covid-19 パンデミックを経た社会の変容について考えるテーマで、企画段階からの協力の他、京都大学等の研究者（環境システム学、生態学、歴史学、臨床心理学）とともにサイエンスショップのスタッフがパネリストを務めた（3回のシリーズ）。

(c) サイエンスカフェはりま

姫路市を中心とした播磨地域において、サイエンスカフェ等を開催する市民グループ「サイエンスカフェはりま」による科学コミュニケーションイベントの開催を支援した（1回）。

(d) サイエンスカフェ神戸

本研究科大学院生の企画・運営により、人間発達環境学研究科の研究者をゲストとしてオンライン・サイエンスカフェ「意外と知らない気候変動のアレコレ，研究航海記～アフリカ沖・南極海編～」を，令和2年6月に開催した。

この他，平成19年以降実施している，市民が科学者とともに IPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change：気候変動に関する政府間パネル）の報告書を読み解く会「市民のための，IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」を17回開催した（第2期，第95回から第111回）。

なお，令和元年度まで継続的に行われてきた，千種川流域圏で活動するグループ「千種川圏域清流づくり委員会」による河川環境モニタリング「千種川一斉水温調査」（8月）への協力については，新型コロナウイルス感染症の影響に配慮し，実施を見合わせた。

(3) 地域科学教育への支援

グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムについては，項目(1)に記したが，それ以外の取組について記載する。

令和2年11月には，兵庫県生物学会と共同で「高校生私の科学研究発表会2020」をオンラインにより開催した。兵庫県，大阪府，岡山県から高校生58名，高等学校教員13名，本学学生8名を含む89名の参加者があり，活発な発表，交流が行われた。優れた研究に対して，サイエンスショップより優秀賞を授与した（詳細は7.2.1(3)参照）。

本年度は，新型コロナウイルスの影響により，例年行ってきた，兵庫「咲いテク」事業推進委員会主催の，高校生による英語での科学研究発表会 “Science Conference in Hyogo” は中止となり，高校生の科学研究発表・交流会「サイエンスフェア in 兵庫」の開催協力は見合わせた。また，鶴甲小学校PTAの要請を受けて，平成19年度以降毎年開催してきた「理科実験教室」，およびサイエンスショップ研究員による市民を対象とした「つるかぶと科学教室」の開催は見合わせた。

(4) 学部・大学院教育

本年度も，国際人間科学部のグローバル・スタディーズ・プログラム（GSP）の国内フィールドとして学生（前期4名）を受け入れた。新型コロナウイルスの影響により，活動が制限される中，学生は，フィールドワークとして，オンラインによるサイエンスカフェ等の科学コミュニケーションイベント，高校生の科学研究発表会等，サイエンスショップが関わる諸活動に参加した。

このように，サイエンスショップは，大学・大学院におけるアクティブ・ラーニング／サービス・ラーニングの場やそれを促す仕組みとしても機能している。

なお，サイエンスショップの枠組みで学生が取組む「天文ボランティアグループ アストロノミア」の活動については，新型コロナウイルスの影響により，小学校を訪問しての観望会は実施できなかったが，オンラインによるプラネタリムの企画，開催などを行った。

(5) 研究活動に関する国際交流

令和2年度神戸大学国際交流促進事業の助成を受け、神戸大学・ワシントン大学教育研究連携イニシアチブ第1回ワークショップ（Seattle-Kobe International Academic Collaboration Initiative, The 1st Workshop）として、”Development of Environmental DNA Research”をテーマとしたワークショップを令和3年3月にオンラインで実施した（主催：神戸大学サイエンスショップ）。環境DNAおよびその手法を活用した生態学研究で国際的に先導的な研究を活発に展開する、神戸大学大学院人間発達環境学研究科のグループ（参加者11名）と、米国ワシントン大学のグループ（参加者10名）の大学院生等6名の若手研究者が研究を紹介する講演を行い、それを受けて交流、ディスカッションを行った。これらの2つの研究グループ以外から、神戸大学、兵庫県立大学、龍谷大学、National Oceanic and Atmospheric Administration (NOAA), Monterey Bay Aquarium research Institute, 兵庫国際交流協会などからの参加者があった。

神戸大学サイエンスショップ 令和2年度の主な取組

市民科学活動・科学コミュニケーション支援

- ・サイエンスカフェの開催・開催支援（サイエンスカフェ神戸（1回）、県下各地のサイエンスカフェ開催等支援（総計12件））
- ・市民と研究者が協力して気候変動に関する IPCC レポートを精読する会「市民のための、IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」の定期開催（17回） 他

地域の科学教育支援

- ・グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムの運営

大学教育・学生の活動

- ・国際人間科学部グローバル・スタディーズ・プログラム（GSP）国内フィールド「『市民の科学』プログラム：サイエンスショップ」提供
- ・オンラインプラネタリウムの企画・開催

研究会等の主催

- ・「高校生・私の科学研究発表会2020／兵庫県生物学会2020研究発表会」開催（主催：兵庫県生物学会、神戸大学サイエンスショップ） オンライン開催
- ・Seattle-Kobe International Academic Collaboration Initiative, The 1st Workshop ”Development of Environmental DNA Research” オンライン開催

イベント等開催協力

- ・サイエンスカフェ伊丹（主催：サイエンスカフェ伊丹） オンライン、伊丹市
- ・サイエンスカフェ*SODA（主催：ソーシャルデザインセンター淡路） オンライン、南あわじ市
- ・サイエンスカフェはりま（主催：サイエンスカフェはりま） オンライン

研究・開発等

- ・「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」（神戸大学先端融合研究究環 人文・社会科学系融合研究領域：人文学研究科等との共同）
- ・日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業』（領域開拓プログラム）」（人文学研究科等との共同：分担） 他

（サイエンスショップ室長 伊藤真之）

10.1.6. 教育連携推進室

教育連携推進室では、教育連携部門、研究開発部門、拠点形成部門において、それぞれ以下の活動を行った。

教育連携部門では、神戸市教育委員会と共同して、神戸市立幼稚園、保育園、小学校及び私立の保育園等の教員・保育士を対象に、幼小接続期教育をテーマにして「つばめセミナー」（研修講座）を開催した。なお年度の計画としては年間全7回の予定であったが、コロナ感染症拡大の影響により、年間4回と規模を縮小して開催した。本研究科からは教育連携推進室の教員を中心に本学附属小学校・幼稚園とも連携しながら、次に示す3回を開催した。

- | | |
|--------|--|
| 8月24日 | 明日につながる幼小接続期教育 ～乳幼児期で大切にしたいことから
講師：北野幸子 |
| 10月15日 | 幼小接続期における数と形の理解
講師：岡部恭幸，藤中寛子（神戸大学附属小学校） |
| 11月16日 | 幼小接続期における特別支援教育の基礎・基本
講師：鳥居深雪 |

研究開発部門では、高度教員養成プログラムを実施するとともに、7回のセミナーと神戸大学附属学校園や地域の学校及び教育施設等をフィールドとした教育実践のアクション・リサーチを含む理論的・実践的研究の推進に寄与した。なお、例年は6月より開催したが、本年度は10月からの開催となった。本年度の認定証発行は6名であった。

拠点形成部門では、国内外の拠点形成を目指して、調査活動に従事する予定であったが、予定されていた渡航や協議は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、規模を縮小して実施せざるを得なかった。ラオス国立大学との共同研究は、Zoomを介して10月より一月に一回の頻度で打ち合わせを実施した。今後、新型コロナウイルスの感染拡大の中でも、研究拠点の形成の手法や、感染収束後、国際的な研究拠点としての本室の活動が期待される場所である。

本年度から附属学校と連携したプロジェクト研究として、附属小学校、附属幼稚園における、歴史的資料のデータベース作成を開始した。しかし、その他のアクション・リサーチを含む共同研究は、新型コロナウイルス感染拡大のため、実施を次年度以降に延期することとした。

財務的には、現在多くの科研等（JSPS科研等代表8件，JSPS科研等分担11件，その他代表3件）の採択を獲得してきているが、今後もさらに継続して大型競争的資金の獲得に向けた

申請（基盤A の応募中）及び申請の準備をする予定である。

令和元年度における教育連携推進室関係の連携を基礎とする主要な研究活動実績は以下の通りである。

1. 国際シンポジウム共同企画・運営

① Ayako Kawaji, Takanobu Watanabe, Takashi Kinoshita, Toshio Funaki, Koichi Yamashita: Educational reform and teacher education, Kobe University, 2021. 1. 26.

② Shohei Kokudo, Current status and promotion of physical activity and physical fitness for Asian children, The 2020 Yokohama Sport Conference, Online, 2020. 9. 8-22

2. 研修セミナーの企画・運営

年月日：令和2年度4月から1月

名称：次世代型研修プログラム開発事業「つばめセミナー」

内容：神戸市総合教育センターと連携して、保幼小連携の理論と実践を解説するセミナーを企画運営した。全4回中3回を担当した。

3. 高度教員養成プログラムの企画・運営

年月日：令和2年10月から令和3年12月

名称：高度教員養成プログラム

内容：参加院生（博士前期課程6名と博士後期課程5名）向けに計7回セミナーを開催するとともに、連携先とのアクション・リサーチを主体とする研究活動を行った。

4. 国際共著論文（Web of Science 収録論文）

① Tomokawa S, Miyake K, Takeuchi R, Kokudo S, and Asakura T. (2020.12), Participation of children in school health in Japan, Pediatrics International, Vol.62, 1332-1338

② Tomokawa S, Asakura T, Keosada N, Bouasangthong V, Souvanhxay V, Navamal P, Kanyasan K, Miyake K, Kokudo S, Watanabe R, Soukhavong S, Thalangsy K, Moji K (2020.9) Introducing Ecohealth education in a Teacher Training Institute in Lao PDR: a case study, Health Promotion International, Health Promot Int. 2020 Sep 10:daaa100. doi: 10.1093/heapro/daaa100.

5. 国際共著論文（Web of Science収録誌未掲載論文）

- ① Shingai, Y., Aoki, R., Takeda, Y., Kusunoki, F., Mizoguchi, H., Sugimoto, M., Funaoi, H., Yamaguchi, E., & Inagaki, S. (2020. 5). Learning support game system for sustainable development goals education: Effects of improved user interface on satoyama forest management learning. *Proceedings of 12th International Conference on Computer Supported Education, Volume 1*, 428-435.
- ② Yago, K., Shingai, Y., Kobayashi, W., Aoki, R., Takeda, Y., Kusunoki, F., Mizoguchi, H., Sugimoto, M., Funaoi, H., Yamaguchi, E., & Inagaki, S. (in press). Satoyama forest management learning game for SDGs education: Comparing the effect of providing additional information in the first half and latter half of the game. *Proceedings of CSEDU 2021*.
6. 主要な研究業績 (WOS 以外の学術論文)
- ① Kitano, S. (2020). The praxis of local professional groups exploring alternatives for the banking concept of early childhood education in Japan. Michel Vandembroeck (ed.) *Revisiting Paulo Freire's Pedagogy of the Oppressed: Issues and Challenges in Early Childhood Education*. Routledge. pp.134-146 (with Peer Review).
- ② 渡邊隆信, 「共同体としての学校」の起源と史的展開—ドイツ新教育における「ゲマインシャフト」概念に着目して—, *教育学研究*, 87(4), 495-506, 2020 (査読あり)
- ③ 高橋あおい・山口悦司・稲垣成哲 (印刷中) 「国立科学博物館の展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」の理念」『*科学教育研究*』第 45 卷, 第 1 号. (査読あり)
- ④ 俣野源晃・山本智一・山口悦司・坂本美紀・神山真一 (印刷中) 「複数の証拠を利用するアーギュメント構成能力の育成: 小学校第 5 学年「電流がつくる磁力」の事例」『*理科教育学研究*』第 62 卷, 第 1 号. (査読あり)
- ⑤ 新階幸也・青木良太・小林和奏・武田義明・楠房子・溝口博・杉本雅則・舟生日出男・山口悦司・稲垣成哲 (印刷中) 「STEM 教育での課題解決能力獲得に向けた学習支援システム「里山管理ゲーム」: 複数の里山への対応による学習効果に関する検討」『*科学教育研究*』第 45 卷, 第 2 号. (査読あり)
- ⑥ 高橋あおい・神山真一・山口悦司 (印刷中) 「小学校理科の指導法に関する科目における遠隔会議システムを利用した教員養成実地指導講師による講義の実践的検討」『*教育科学論集*』第 24 号. (査読あり)
- ⑦ 高橋あおい・山口悦司 (2021. 3) 「小学校理科の指導法に関する科目における遠隔会議システムを利用した模擬授業の実践的検討」『*日本科学教育学会研究会研究報告*』第 35 卷, 第 3 号, pp.9-14. (査読なし)
- ⑧ 北野幸子, 保育環境スケールを活用した養成教育現職研修の展開, 子どもと発育発達, Vol. 18 No. 2, pp. 115-120 (査読なし)

- ⑨ 佐野孝, 國土将平 小学生の開脚跳びとかかえ込み跳びに共通する運動課題における困難度の差異 体育測定評価研究, 20, 26-39, 2021年3月(査読有り)
- ⑩ 佐野孝, 國土将平, 学生の跳び箱運動における開脚跳びの動作困難度を考慮した動作配列図の作成, 体育学研究, 65, 691-704, 2020年9月(査読有り)
- ⑪ 大澤清二, 家田重晴, 西嶋尚彦, 佐川哲也, 國土将平, 下田敦子, 20世紀末タイにおける社会環境の激変が子どもの形態発育に与えた影響, 発育発達研究, 2020(86), 52-65, 2020年(査読有り)
- ⑫ 佐野孝, 國土将平, 小学生の跳び箱運動におけるかかえ込み跳びを構成する動作の困難度の検討行動計量学, 47(2), 173-185, 2020年(査読有り)
- ⑬ 佐野孝, 國土将平, 近藤亮介, 小学生の跳び箱運動における開脚跳び動作の熟達度とかかえ込み跳びの達成度との関連発育発達研究 2020(87), 10-19, 2020年(査読有り)

7. 科研等(令和2年度代表分)

- ① 基盤研究(A)(一般)「科学系博物館におけるユニバーサルデザイン手法の開発と実践モデルの提案」(課題番号18H03660)代表: 稲垣成哲
- ② 挑戦的研究(萌芽)「幼小接続期の数理認識の発達に着目した評価スケールの開発」(課題番号18K18648)代表: 岡部恭幸
- ③ 挑戦的研究(萌芽)「高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発」(課題番号20K20829)代表: 山口悦司
- ④ 文部科学省, 令和2年度「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」
「ICTや先端技術の活用などを通じた幼児教育の充実の在り方に関する調査研究」
「位置測位データを活用した個々の幼児の育ちと学びの理解の深化と、教師の省察、
家庭との連携の充実につながるICTの活用方法に関する調査研究」代表: 北野幸子

8. 科研等(令和2年度分担分)

- ① 基盤研究(B)(一般)「生物多様性の実感的学習を可能とするSDGsを志向した里山環境保全教育プログラム」(課題番号19H01734)代表: 武田義明
- ② 基盤研究(B)(一般)「ユニバーサルデザインに基づいたデジタル人形劇の開発と実践」(課題番号17H02002)代表: 楠房子
- ③ 基盤研究(B)(一般)「実世界センシングデータからの行動-学習モデルの構築と学習支援環境の設計」(課題番号19H04222)代表: 杉本雅則
- ④ 挑戦的研究(萌芽)「市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モデル開発」(課題番号: 18K18646)代表: 坂本美紀
- ⑤ 基盤研究(B)(一般)「政治的抑圧からの回復期におけるアジアの子どもの身体・文化・生活の相互変容研究」(課題番号: 17H02192)代表: 佐川 哲

- ⑥ 基盤研究(B) (一般)「全国大規模調査による思春期小児の身体活動・生活習慣と睡眠の検討」(課題番号:18H01000) 代表:石井 好二郎
 - ⑦ 基盤研究(C) (一般)「音楽科固有の資質・能力の基礎となる音楽的感覚及び音楽能力育成カリキュラムと指導法」(課題番号:18K02577) 代表:三村真弓
 - ⑧ 基盤研究(C) (一般)「音と声」に注目した保育者研修プログラム-ECERS 及び音環境調査に基づいて-」(課題番号:18K02467) 代表:埋橋玲子
 - ⑨ 基盤研究(B) (一般)「アジアの途上国の教員の自己教育力及び保健教育のコンピテンシー向上のための授業研究」(課題番号:20H01687) 代表:小磯透
 - ⑩ 基盤研究(B) (一般)「一見矛盾する事実から真実を導き出す能力を育む協調学習環境の開発と実践的評価」(課題番号:20H01729) 代表:望月俊男
 - ⑪ 基盤研究(C) (一般)「新教育運動期における自然保護運動の昂揚と環境教育の起源に関する比較的研究」(課題番号:20K02529) 代表:宮本健市郎
 - ⑫ 基盤研究(C)「研究課題:家庭養育と乳児保育の質の向上を促す家庭と乳児保育の連携プログラムの開発」(課題番号:20K02643) 代表:寺見陽子
9. その他の外部資金 (令和2年度代表分)
- ① 神戸市共同研究「乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究」代表:北野幸子
 - ② 大阪府私立幼稚園連盟共同研究「0歳児から6歳児までの保育・教育を考える-非認知的能力はどのようにして育まれるのか-」代表:北野幸子
 - ③ 福井県私立幼稚園・認定こども園協会共同研究「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の視点から子どもの育ちをとらえる」代表:北野幸子
 - ④ 大学発アーバンイノベーション神戸「ICTを活用したドキュメンテーションツールの開発~「おうちえん」についての機能強化、新展開に関わる共同研究~」代表:北野幸子
 - ⑤ 産官学共同研究(神戸大学・㈱神戸大学イノベーション・㈱スマートエデュケーション)「ICTを活用したドキュメンテーションツールの開発~「おうちえん」についての機能強化、新展開に関わる共同研究~」

10. 受賞

佐野孝, 國土将平, 特異項目機能(DIF)を用いた小学生の開脚跳びにおける動作困難度の性差および学年差の検討 日本体育測定評価学会 第20回大会優秀発表賞受賞 2021年3月

11. 主要な連携先

海外: ドレスデン工科大学教師教育センター, マノスク国際学校, トリブバン大学教育学部, ラオス国立大学教育学部

国内: 神戸大学附属小学校, 神戸大学附属幼稚園, 神戸市教育委員会, 兵庫県教育委員会, 明石市, 舞鶴市, 兵庫県, 大阪市, 尼崎市, 神戸市立王子動物園, 国立科学博物館, 兵庫県

10.1.7. アクティブエイジング研究センター

運営体制

(1) 運営委員

1) 教員：片桐恵子，増本康平，近藤徳彦，岡田修一，長ヶ原誠，平山洋介，井上真理，田畑智博，近江戸伸子，齊藤誠一，木村哲也，岡崎香奈，原田和弘

2) 研究員（学術研究員）：当山倫子

3) 学外研究員

①福沢愛 東京大学 未来ビジョン研究センター

②加藤成二 山梨県富士・東部農務事務所

研究プロジェクトの推進

(1) プロジェクト内容：メンバーと内容

令和元年度は前年度までの17のプロジェクトに1つのプロジェクトが加わり18研究プロジェクトの各研究活動を行った。

鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して

メンバー：岡田修一，近藤徳彦，長ヶ原誠，片桐恵子，増本康平，原田和弘，学外研究者

期間：2010年度～2020年度

内容：オールドニュータウンである鶴甲地区を対象に，多世代が心身ともに健やかで将来の希望に満ちた，安全に暮らせるまちづくりを支援するものである。アカデミック・サロン（大学内で行うイベント）を鶴甲地区の住民の学びと活動の場の基礎とし，大学をコミュニティの中心に位置付け，このサロンを通して，住民同士のネットワークを形成するとともに，サロンの継続に必要なファシリテーターを養成し，住民が企画・運営するコミュニティ活動を支援する。

住民ネットワーク形成の客観的検証方法の確立

メンバー：増本康平，岡田修一，近藤徳彦，長ヶ原誠，片桐恵子，木村哲也，古谷真樹，

研究科共同研究者4名

期間：2015年度～2017年度

内容：ウェアラブルセンサデバイスによって対面コミュニケーション行動データを自動収集し，ネットワーク解析を行うことで住民交流の現状や変化，キーパーソンを把握し，支え合い・助け合いの基盤となる住民ネットワークの活性化につなげる。

男女の違いや個人差を考慮した健康増進支援プロジェクト

メンバー：近藤徳彦，岡田修一，中村晴信，古谷真樹，井上真理，齊藤誠一，木村哲也，佐藤幸治

期間：2015年度～2019年度

内容：健康行動（食・睡眠・運動）を支援するため、これらに関係する環境を工夫することにより健康を支援する方法を提案する。その際、これまで十分な情報が得られていない男女の違いや個人差からアプローチする。

高齢者の身体システム機能維持・向上への学際的プロジェクト

メンバー：木村哲也，佐藤幸治，学外研究者

期間：2015年度～2022年度

内容：高齢者の身体システム機能の維持・向上に対して，基礎研究及びその成果に基づいた社会実装を，応用生理学，運動生理・生化学，バイオメカニクス，生体工学の各観点を統合して学際的に実施する。現在取り組み中の具体的課題は，立位バランス神経制御則の解明や高齢者の筋機能の向上である。

都市住居高齢者の日常活動の国際比較

メンバー：片桐恵子，原田和弘，福沢愛，学外研究者1名，海外研究者2名

期間：2015年度～2018年度

内容：都市に居住する高齢者がどのような日常活動を行っているのか，その活動量はどの程度か，活動がどのように気分や健康に関連しているか，などの実態の解明とそれらの関連を，日本（神戸）と韓国（ソウル）との国際比較から検討する。

超高齢社会を見据えた持続可能なごみ処理施策の提案

メンバー：田畑智博，片桐恵子

期間：2015年度～2018年度

内容：高齢者世帯の増加が将来の自治体のごみ処理施策に及ぼす環境的・経済的影響を，シミュレーション分析により明らかにする。ごみ分別等の住民負担の限界と対策の検討を通じて，超高齢化社会に相応しい持続可能な自治体のごみ処理施策を提案する。

関西ワールドマスタースゲームズ2021レガシー創造支援研究

メンバー：長ヶ原誠，岡田修一，近藤徳彦，片桐恵子，増本康平，学外研究者3名

期間：2015年度～2022年度

内容：2022年に関西広域で開催が決定した生涯スポーツの国際大会がもたらすレガシー（遺産）創造に向けた振興事業アクションリサーチの展開と効果検証のモニタリング評価を実施し，成人・中高年者を対象とした参加型のスポーツメガイイベント開催が個人と地域の活性化に及ぼす影響過程を検証する。

高齢期の意思決定バイアスの解明と自律に向けた生涯学習プログラムの開発

メンバー：増本康平，学外研究者2名

期間：2015年度～2017年度

内容：高齢者の意思決定バイアスの特徴を明らかにし、高齢者に適した意思決定の支援方法を明確にする。最終的には、高齢期の自律を目標とした「選び方を選ぶ」生涯学習プログラムを開発する。

マスターズ甲子園による「アクティブエイジング活性化の検証」

メンバー：長ヶ原誠，学外研究者3名

期間：2015年度～2017年度

内容：高校野球部OBクラブの拡大を目指して始動したマスターズ甲子園の各地方予選・全国大会の開催が及ぼすアクティブエイジングに関わる諸効果を検証し、スポーツ同窓会結成支援による活動的な加齢文化の推進に着目した生涯スポーツプロモーション事業の可能性と課題を提示する。

サードエイジのサクセスフル・エイジング・モデル構築プロジェクト

メンバー：片桐恵子，学外研究者2名

期間：2015年度～2020年度

内容：これまでの高齢者とは異なる新しいシニア層である、団塊世代以降の人のライフスタイルや志向を把握し、サードエイジ期（定年後から元気な時期）のサクセスフル・エイジング・モデルを構築する。

生涯学習・多世代交流プロジェクト

メンバー：片桐恵子，学外研究者2名，海外研究者1名，大学院生1名

期間：2018年度～2020年度

内容：生涯学習を行うシニアの現状を明らかにし、学習を促進疎外する要因とそのもたらす効果をライフコース的な視点から明らかにする。さらに生涯学習を異世代交流の機会をとらえて、その効果も検討する。アイルランドとの国際比較研究を実施しながら検索する。

超高齢社会における複数住宅所有の実態と役割

メンバー：平山洋介，学外研究員1名

期間：2017年度～2019年度

内容：高齢化が進む社会のなかで、複数の住宅を所有する世帯が増えている。付加的な住宅はレントアウト収入をもたらす、高齢者の経済セキュリティを形成するケースがある。ここでは、高齢社会の安定の維持における複数住宅所有の可能性と限界を明らかにする。

活動的な生活習慣と健康増進プロジェクト

メンバー：原田和弘，近藤徳彦，学内・学外研究員

期間：2017年度～2025年度

内容：高齢者において、活動的な生活習慣が形成・維持されるプロセスには、どのような要因が関わっているのかを学際的な観点から明らかにする。また、その知見に基づき、活動的な生活習慣の効果的な支援方法を開発する。

アクティブライフ評価と健康寿命の延伸・認知症予防対策

メンバー：近藤徳彦，増本康平，木村哲也，佐藤幸治，原田和弘，学内研究員

期間：2017年度～2022年度

内容：中年期までの活動的な生活習慣（＝アクティブライフ）が、健康寿命の延伸や認知症発症を防ぐ効果があるかどうかに関心が集まっている。本研究では幅広い年代のアクティブライフを、経年的に、かつ、正確に測定し、アクティブライフと健康・認知症に関するデータの構築を目指す。これにより健康寿命の延伸や認知症予防に効果的な生活習慣対策を検討する。

更年期女性の身体的変化と心理的適応

メンバー：齊藤誠一，田中美帆，学外研究員

期間：2017年度～2020年度

内容：40歳代後半から閉経に向けて生じる女性の身体的変化の時期である更年期において、どのような身体的変化が生じ、その変化にどのように適応していくか、あるいは同時期の配偶者や子の発達の状況とどのように相互作用しているのかについて検討を行い、その後の中年期後期への望ましい発達のあり方を提案していく。

高齢者の住まい方とエネルギー消費との関係性に関する調査

メンバー：田畑智博，学外研究者

期間：2017年度～2019年度

内容：高齢者世帯におけるエネルギー消費と、居住形態，家電所有，生活時間などとの関係性を調査する。また，エネルギー消費が，環境だけでなく，高齢者世帯の家計や貧困などに与える影響を分析する。

超高齢・持ち家社会における住宅相続の増大と階層化

メンバー：平山洋介，学外研究員1名

期間：2018年度～2021年度

内容：超高齢・持ち家社会としての日本では，遺産相続による住宅資産の世代間移転が増え，社会を階層化する新たな要因になる。相続住宅は，一方では，自己居住用，家賃収入源として役立ち，さらに資産形成を促進すると同時に，他方では，使い途がなく，空き家のままで放置され，管理負担ばかりをもたらし場合がある。ここでは，住宅相続の階層化の実態を解明するところから，住宅ストック利用に関する政策課題を検討する。

エンド・オブ・ライフにおける感情調整の機序と役割

メンバー：増本康平，佐藤幸治，原田和弘，学外研究者

期間：2019年度～2021年度

内容：身体，認知機能が低下し自立した生活が困難となっても，社会的つながりを維持し，幸せな生活をおくるために重要な機能として，近年，感情調整が注目されている。本研究では，感情調整機能の加齢による変化について遺伝的，心理的，文化的側面から検討する。

(2) 外部資金

科研若手研究(A)，科研科学挑戦的研究(開拓) 挑戦的研究(萌芽)2件，基礎研究(B)2件，基盤研究(C)，神戸市役所・令和2年度大学発アーバンイノベーション神戸，明治安田康生事業団，第36回若手研究者のための健康科学研究助成，木下基礎科学研究基金助成事業，(株)カネカ，(公財)ひょうご環境創造協会を獲得し，上記研究プロジェクトを推進している。

(3) アクションリサーチの実施

研究プロジェクト「鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して」は，鶴甲地域住民の地域の絆を構築するための，アクションリサーチである。

神戸市灘区の「大学と連携したまちづくりチャレンジ事業」の助成を受け，本年後は主催する連続講座【2020年度健康体操教室】に延べ76名の住民の参加があった。

(なお，当連続講座は，11月・12月に計5回企画されていたが，11月24日付けの兵庫県ホームページにて，「不要不急の外出自粛」の呼びかけにより，11月25日付けで中止を決定。2回の講座開催となった。) これまでの延べ参加者は，約4700名となった。

本プロジェクトによるアクションリサーチの結果は，国際学術雑誌に採択されており，現在も投稿中である。住民のネットワークの拡充やwell-beingの向上に役立っていることを科学的エビデンスに基づき示したものとして評価されている。

連続講座 灘区まちづくりチャレンジ事業

助成活動報告 2020年度健康体操教室 2020/11/20, 11/24, 11/27, 12/1, 12/4

3. セミナー

以下のセミナーをセンター主催・後援した。

(1) 日時：2020年11月27日（金） 10:00～12:00

場所:Zoom

講演者：衣笠智子（神戸大学経済学研究科），安田公治（青森公立大学経営経済学部），増本康平（神戸アクティブエイジング研究センター）

第2回 ABCDE (Aging, Brain, Cognition, Decision-making, & Emotion) セミナー「寿命観と貯蓄行動」

(2) 日時：2021年2月18日（木） 13:30～15:00

場所:Zoom

講演者:金宰輝（韓国中央大学心理学科教授），増本康平（神戸アクティブエイジング研究センター）

企画者：片桐恵子（神戸アクティブエイジング研究センター）

(3) 日時：2021年3月16日（火） 15:00～17:00

場所:Zoom

講演者: Dr. Xiaoyi Zhang (Director of Social Policy Research Center, Director of Elderly Long-term Care Institute School of International and Public Affairs, Shanghai Jiaotong University), Dr. Soondool Chung (Director of Ewha Institute for Age Integration Research Department of Social Welfare, Ewha Womans University), Dr. Vivian Weiqun Lou (Director of Sau Po Centre on Ageing Department of Social Work and Social Administration, The University of Hong Kong), Dr. Keiko Katagiri (Director of Kobe Active Aging Research Hub, Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University)

企画者：片桐恵子（神戸アクティブエイジング研究センター）

4. 連携活動

(1) 連携活動

以下の学内プロジェクトと連携活動を実施した。

- 1) 認知症予防プロジェクト（神戸大学）
- 2) 「Well-being研究拠点」社会関係資本ユニットでの活動（神戸大学高等研究院未来世紀都市学研究アライアンス）

(アクティブエイジング研究センター長 片桐恵子)

10.2. 実習観察園の運営利用状況

○実習観察園施設および概略図

実習観察園の概略は図1の通りで、前年と変わりはない。灰色で示した部分は、自然環境論コースの教員が研究のために設置したビニルハウスである。

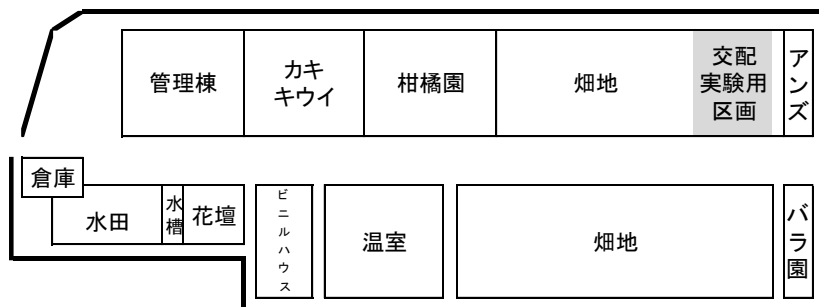


図1 施設・作付概要

○作付面積および作付植物

作付面積および作付作物はそれぞれ表1および表2に示した通りである。

表1 作付面積 (㎡)

種 別	面積	備 考
畑 地	352	教材・実習用
果 樹 園	255	教材・実習用
水 田	70	実習・研究用
バ ラ 園	35	園内美化・実習用
花 壇	25	園内美化・実習用
計	735	全体

表2 作付植物

種 類	植 物
野 菜	コマツナ、ホウレンソウ、キャベツ、キュウリ
	カボチャ、スイカ、トマト、オクラ、ピーマン
マメ・穀類	イチゴ、ナス、ダイコン、カブ、タマネギ、ニンジン
	ダイズ、ラッカセイ、ソラマメ、インゲンマメ
果 樹	ジャガイモ、サツマイモ、トウモロコシ、イネ
	なつみかん、ハッサク、温州みかん、スダチ
花 卉	ユズ、キンカン、カキ（富有、サエフジ）、ブドウ
	スモモ、キウイ、ウメ
花 卉	ベゴニア、マリーゴールド、ペチュニア、サルビア
	キンセンカ、バーベナ、トレニア、デモルフォセカ
	マツバボタン、スベリヒユ、ヒマワリ、アサガオ
	ハボタン、チューリップ、ナデシコ、バラ その他

表3 授業と研修の利用数

授 業 名					
	2016	2017	2018	2019	2020
幼 児 環 境 指 導 法	24	26	18	0	0
保 育 内 容 研 究 (環 境)			23	23	23
植 物 環 境 学 実 験 実 習	24	17	0	0	0
園 芸 教 室	54	54	54	54	0
鶴 甲 幼 稚 園		80	81	66	0
神戸大学附属住吉学校		18	14	15	0
計	102	177	176	143	23

○教育活動

例年は、「保育内容研究(環境)」(履修生 23 名)において、植物栽培に関すること、すなわち、畝立て、土作り、草花や野菜の種まき、育苗、鉢上げ、定植、誘引、収穫、挿し芽繁殖、花壇・緑化設計と制作などを行っている。これらの他に、プランターや鉢植え栽培による校内美化の指導も行っている。履修者が実践的に“植物と子供の遊び”というテーマで、幼稚園児の指導をおこなうことを想定し、草もちの作製をおこなった。タケ、ササの来歴、利用法について講義、能動的に学修するアクティブ・ラーニングとして、五感を活用した実習をおこなった。

なお、今年度は新型コロナウイルスによる緊急事態宣言を受け、講義はすべて遠隔となったため、教員が実習園で上記に関してのビデオ撮影などをおこない利用した。

○研究活動

人間発達環境学研究科および発達科学部の教員ならびに学生が研究と論文作成のため、本実習園を活用している。

1) 幼児の自然体験を通じた感受性への影響調査

野外での実体験が、幼児にどのような効果、影響を及ぼすかを調査研究するため、実習観察園で実施された鶴甲幼稚園児への芋ほり、稲刈り体験から、幼児の行動調査をおこなった。この成果によって、環境科学会 2020 年会での発表 大学院生・大野朋子「幼児の自然体験を通じた感受性への影響」および修士論文「幼児の自然体験を通じた学習効果と感受性への影響」の作成を行った。

利用者：大学院生 1 名

2) ツククサの栽培実験

人間発達研究科の M1 の「修士論文研究」および研究生 (D 入学予定者) の研究 (指導教員：丑丸敦史) として、人間発達環境学研究科の施設である実習観察園に設置した温室内で栽培したツククサを対象にした研究を行った。里山および都市部の水田に生育するツククサ集団から実生を採取し、温室内のポットに実生を植え付け (4-5 月)、結実期 (10 月中旬) まで温室内での生長および開花の調査を行った。この研究では研究補助として、発達科学部・国際人間科学部の学生数名の協力があつた。本研究成果は、2020 年に行われた第 52 回種生物学会 (オンライン, 12 月 5 日) において「混殖種ツククサにおける大きな花でみられる先行自家受粉の適応的意義」および「都市-里山水田環境におけるツククサの機能形質の種内変異」というタイトルで発表した。

利用者：大学院生 1 名, 研究科研究生 1 名, 協力学部学生約 5 名

3) カラスウリの栽培実験

昨年度より行っているカラスウリの繁殖様式の研究として、圃場の東と北のフェンス脇においてカラスウリの鉢植えによる栽培を行った。ダンゴムシの発生や発育不良により、

開花を確認できた個体は一個体のみで、来年度も引き続き栽培を行う必要がある。本研究では研究補助として、研究科研究生1名の協力があつた。

利用者：丑丸敦史，協力研究生1名

4) ハマヒルガオの栽培実験

受託している植物研究助成による研究として、伊豆諸島および千葉県・茨城県・静岡県
の海岸において採取した地下茎から発芽したハマヒルガオ植物体の栽培を観察園ガラス温
室内で行い、開花の様子を観察した。ハマヒルガオの生育が芳しくなく、開花個体は非常
に限られた。本研究では研究補助として、学部生1名の協力があつた。

利用者：丑丸敦史，協力学部生1名

○他機関の利用

例年は以下の3つについて取り組んでいるが、今年はすべてキャンセルとなった。

- 1) 田植え体験・稲刈り・芋ほり体験 鶴甲幼稚園
- 2) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 連続講座2020「園芸教室」の開催
- 3) 野菜探求プロジェクト～植と食の融合～ 神戸大学附属中等教育学校

来年度は地域や学校等の要請等も積極的に受け入れ、授業ならびに研究で、利活用を図る
予定である。

(実習観察園運営委員長 近江戸伸子)